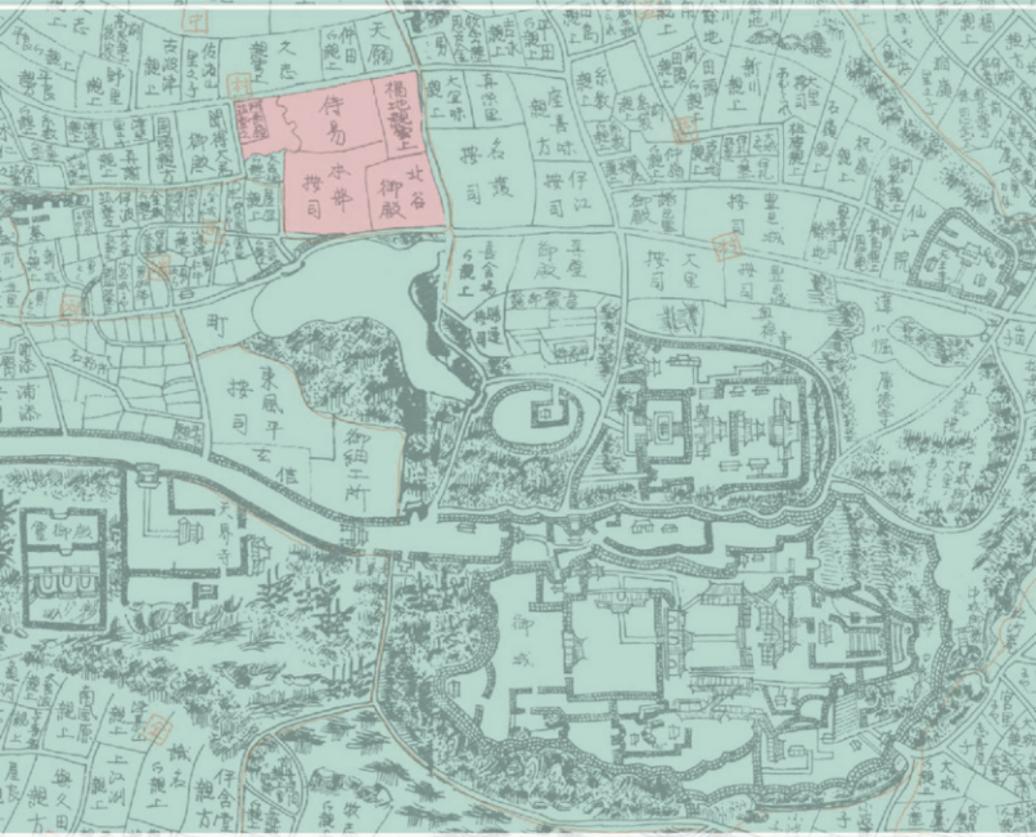


中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6) —



平成30(2018)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

北

沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書 第95集

中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6) —



東

南

平成30(2018)年3月
沖縄県立埋蔵文化財センター

中城御殿跡

— 県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書(6) —

平成30(2018)年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター

序

本報告書は、首里城公園整備に伴い、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課より予算の分任を受け、沖縄県立埋蔵文化財センターが平成19・20・21年度に遺構確認調査を実施し、平成28年度にその一部をまとめたものです。

中城御殿は琉球国王世子の邸宅として、当初は現在の首里高等学校敷地内に創建されましたが、1870年に今回の調査対象となった大中町に新御殿が建てられ移転します。そして、1879年の琉球処分を経て、1945年の沖縄戦により破壊されるまでの間、当地にありました。

すでに平成19・20・21年度の調査成果については報告しているが、当該年度調査で出土した金属製品は質ならびに量共にこれまでの調査から類例が見られないことから、それらをまとめて今回、報告するものである。

これら金属製品は中城御殿跡から出土したのですが、1874年まで現在の首里高等学校に所在した中城御殿や1879年の首里城明け渡しの際に移動させられたと思われる金属製品も多数見ることができます。これらは首里城や中城御殿の日常生活を偲ぶものであると共に、それらの場所で執り行われた祭祀の様相を知る上では貴重な遺物であると言えます。また、大量に出土した銅釘、鉄釘なども中城御殿の建物の実態を窺い知る上で欠くことのできない遺物であると言えます。

この成果をまとめた本報告が、沖縄県の歴史・文化を離隔する資料として、多くの方々に活用されるとともに、埋蔵文化財の保護・活用について関心を持っていただければ幸いです。

最後に、発掘調査ならびに資料整理作業にあたり、ご指導・ご協力を賜った関係者各位に厚く御礼申し上げます。

平成30（2018）年3月

沖縄県立埋蔵文化財センター
所長 金城 亀 信



1 米軍撮影中城御殿



2 中城御殿跡全景



3 平成20年度調査区全景（西から）



4 平成20年度調査区全景（東から）



5 平成21年度調査区全景（西から）



6 平成21年度調査区全景（北から）



7 金属製品一括出土状況（1）



8 金属製品一括出土状況（2）



9 金属製品一括出土状況 (3)



10 銅製花瓶出土状況



1 1 銅製蓋出土状況 (1)



1 2 銅製蓋出土状況 (2)



13 飾り金具出土状況(1)



14 飾り金具出土状況(2)



15 大型香炉出土状況



16 銅製品出土状況

例 言

- 1 本報告書は、県営首里城公園の整備に伴い、平成 19（2007）年度、平成 20（2008）年度、平成 21（2009）年度にそれぞれ実施した中城御殿跡の埋蔵文化財発掘調査成果と、平成 21（2009）年度と平成 22（2010）年度の未報告の遺物についてまとめたものである。なお、平成 22 年度に報告を行った「第 5 章 遺構」について、一部の内容の加除筆を行い、編集を行った。
- 2 本事業は、県営首里城公園整備事業に伴うもので、沖縄県土木建築部からの分任（委託）事業として沖縄県教育委員会が実施したものである。なお、発掘調査事業の総括並びに、業務調整等は所管課の沖縄県教育庁文化財課（平成 23 年度以前）が行い、発掘調査並びに、事業事務に関しては沖縄県立埋蔵文化財センターが実施した。
- 3 資料整理作業にあたり、調査体制の項目で記した方々に資料の同定・整理作業を賜った。記して謝意を表したい。
- 4 本書に掲載した緯度、経度、平面直角座標は、すべて世界測地系に基づくものである。
- 5 本報告書に掲載した地図は、国土地理院発行の 1/25,000 の地形図を使用した。
- 6 本報告書の編集は調査体制の項目で記した多くの方々との協力のもと山本正昭が行い、各章の執筆は下記のとおり行った。
上地 博：第 1～4 章、第 5 章第 5 節、報告書抄録
山本正昭：第 5 章第 1～4 節、第 6～8 節、第 6 章
田村 薫：第 5 章第 5 節、第 8 章
バリノ・サーヴェイ株式会社：第 7 章
- 7 本報告書に掲載された検出遺構の写真撮影は、上地博、本村麻里衣が行い、出土遺物の写真撮影は領家範夫と安里小弥子が行った。
- 8 本書に掲載した古写真や古地図は沖縄県立図書館や、沖縄県立博物館・美術館の許可を得て掲載した。これらについては出典を明記し、文献は巻末にまとめた。
- 9 自然科学分析はバリノ・サーヴェイ株式会社に委託した。
- 10 各章で参考・引用した文献一覧は、巻末にまとめて掲載した。
- 11 発掘調査で得られた出土遺物及び実測図、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターに保管している。

目次

序

巻頭図版

例言

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯…………… 1

第2節 調査体制…………… 1

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境…………… 4

第2節 歴史的環境…………… 4

第3章 調査の概要

第1節 調査経緯…………… 13

第2節 調査区の設定…………… 15

第4章 層序と遺構

第1節 層序と堆積…………… 17

第2節 検出遺構…………… 18

第3節 まとめと考察…………… 24

第5章 遺物（金属製品）

第1節 建具…………… 79

第5節 釘…………… 118

第2節 器物…………… 82

第6節 鋸…………… 121

第3節 飾り金具…………… 82

第7節 銭貨…………… 136

第4節 宗教具・茶道具… 98

第8節 その他金属製品…………… 136

第6章 遺物（その他の遺物）…………… 153

第7章 金属製品の科学分析…………… 156

第8章 総括…………… 173

引用・参考文献…………… 176

報告書抄録…………… 177

挿図目次

第 1 図	沖縄本島の位置図	5	第 32 図	E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14 石畳 7、溝 3、基壇 5	72
第 2 図	首里古地図の中城御殿	6	第 33 図	G・H-19 TP15・16	78
第 3 図	中城御殿跡位置図	6	第 34 図	建具	80
第 4 図	中城御殿古写真と首里古地図の重ね図	7	第 35 図	器物 1	84
第 5 図	中城御殿屋根伏図	7	第 36 図	器物 2	86
第 6 図	中城御殿間取り復元図	8	第 37 図	器物 3	88
第 7 図	平成 19～27 年度調査区図	11	第 38 図	飾り金具 1	90
第 8 図	中城御殿跡の堆積模式図	17	第 39 図	飾り金具 2	92
第 9 図	中蓋付溝の構造模式図	25	第 40 図	飾り金具 3	94
第 10 図	『首里古地図』にみる近世中城御殿跡の 土地利用（沖縄風土記刊行会 1970）	28	第 41 図	飾り金具 4	96
第 11 図	中城御殿跡 平成 20・21 年度発掘状況	29	第 42 図	宗教具・茶道具 1	102
第 12 図	主要検出遺構と屋根伏せ位置	35	第 43 図	宗教具・茶道具 2	104
第 13 図	J-14 TP1 円形石組遺構、ビット群	36	第 44 図	宗教具・茶道具 3	106
第 14 図	I・J-14 TP2、J-14 TP3 溝 2、石畳 3 ①.....	38	第 45 図	宗教具・茶道具 4	108
第 15 図	I・J-14 TP2、J-14 TP3 溝 2、石畳 3 ②.....	39	第 46 図	宗教具・茶道具 5	110
第 16 図	I-15 TP 4、J-15 TP 5 基壇 4	42	第 47 図	宗教具・茶道具 6	112
第 17 図	J-15・16 TP 7 基壇 1・3、石畳 144	44	第 48 図	宗教具・茶道具 7	114
第 18 図	K-14 溝 2、石畳 3、基壇 2	46	第 49 図	宗教具・茶道具 8	116
第 19 図	K-15 溝 1、基壇 1、石畳 1	48	第 50 図	銅角釘 1	126
第 20 図	K・L-14 溝 2・4、蓋付溝 3、石畳 2、 舗装面 2	50	第 51 図	銅角釘 2・丸釘	128
第 21 図	K・L-14 溝 2・4、蓋付溝 3、石畳 2、 舗装面 2	51	第 52 図	鉄角釘 1	130
第 22 図	I-15 TP 6	53	第 53 図	鉄角釘 2	132
第 23 図	L-15 溝 1・4、蓋付溝 1・2、舗装 面 2	54	第 54 図	鉄角釘 3・錠	134
第 24 図	K-15、L-14・15 石畳 4、金属製品溜 まり	55	第 55 図	銭貨・その他遺物 1	138
第 25 図	K-14・15 北壁、K-15 東壁	58	第 56 図	その他遺物 2	140
第 26 図	K-14・15 南壁、L-15 東壁	59	第 57 図	その他遺物 3	142
第 27 図	L-16 TP8 石畳 1、蓋付溝 1、暗渠 1	60	第 58 図	その他遺物 4	144
第 28 図	K-16 TP9	62	第 59 図	その他遺物 5	146
第 29 図	L-13 石畳 5、ビット群 ①	63	第 60 図	その他遺物 6	148
第 30 図	I・J-13 暗渠 2	66	第 61 図	その他遺物 7	150
第 31 図	H・I-13 石畳 6	69	第 62 図	その他遺物（金属製品以外）	154
			第 63 図	通し No. 291 の蛍光 X 線定性スペクトル	158
			第 64 図	通し No. 2223 の蛍光 X 線定性スペクトル	159
			第 65 図	通し No. 454 の蛍光 X 線定性スペクトル	160
			第 66 図	通し No. 279 の蛍光 X 線定性スペクトル	161

第67図 通しNo.286の蛍光X線定性スペクトル	162
第68図 通しNo.275の蛍光X線定性スペクトル	163
第69図 通しNo.262(地)の蛍光X線定性スペクトル	164
第70図 通しNo.262(加飾)の蛍光X線定性スペクトル	165
第71図 通しNo.257の蛍光X線定性スペクトル	

第72図 通しNo.282の蛍光X線定性スペクトル	166
第73図 通しNo.255(地)の蛍光X線定性スペクトル	168
第74図 通しNo.255(加飾)の蛍光X線定性スペクトル	169

図版目次

図版 1 琉球政府立博物館の建設	10
図版 2 発掘作業状況	16
図版 3 平成20・21年度 調査区遺構検出状況	34
図版 4 J-14 TP 1	37
図版 5 I・J-14 TP2、J-14 TP3 ①	40
図版 6 I・J-14 TP2、J-14 TP3 ②	41
図版 7 I-15 TP 4、J-15 TP 5	43
図版 8 J-15・16 TP7	45
図版 9 K-14	47
図版 10 K-15	49
図版 11 L-14	52
図版 12 I-15 TP 6	53
図版 13 L-15 ①	56
図版 14 L-15 ②	57
図版 15 L-16 TP 8	61
図版 16 K-16 TP 9	62
図版 17 L-13 石畳5、ピット群 ①	63
図版 18 L-13 石畳5、ピット群 ②	64
図版 19 L-13 石畳5、ピット群 ③	65
図版 20 I・J-13 暗渠2	66
図版 21 I・J-13 ①	67
図版 22 I・J-13 ②	68
図版 23 H・I-13 石畳6	69
図版 24 H・I-13 ①	70
図版 25 H・I-13 ②	71
図版 26 F・G-13 TP12・13・14 ①	73
図版 27 E・F-13 TP12・13・14 ②	74
図版 28 E・F-13 TP12・13・14 ③	75
図版 29 E・F-13 TP12・13・14 ④	76

図版 30 E・F-13 TP12・13・14 ⑤	77
図版 31 G・H-16 TP15・16	78
図版 32 埴具	81
図版 33 器物1	85
図版 34 器物2	87
図版 35 器物3	89
図版 36 飾り金具1	91
図版 37 飾り金具2	93
図版 38 飾り金具3	95
図版 39 飾り金具4	97
図版 40 県立博物館所蔵の釣り灯籠と出土資料①	98
図版 41 県立博物館所蔵の釣り灯籠と出土資料②	99
図版 42 宗教具・茶道具1	103
図版 43 宗教具・茶道具2	105
図版 44 宗教具・茶道具3	107
図版 45 宗教具・茶道具4	109
図版 46 宗教具・茶道具5	111
図版 47 宗教具・茶道具6	113
図版 48 宗教具・茶道具7	115
図版 49 宗教具・茶道具8	117
図版 50 銅角釘1	127
図版 51 銅角釘2・丸釘	129
図版 52 鉄角釘1	131
図版 53 鉄角釘2	133
図版 54 鉄角釘3・鏝	135
図版 55 銭貨・その他遺物1	139
図版 56 その他遺物2	141

図版 57	その他遺物 3	143
図版 58	その他遺物 4	145
図版 59	その他遺物 5	147
図版 60	その他遺物 6	149
図版 61	その他遺物 7	151

図版 62	その他遺物 (金属製品以外)	155
図版 63	試料 1	170
図版 64	試料 2	171
図版 65	試料 3	172
図版 66	金属製品溜まり検出状況	173

挿表目次

第 1 表	出土地別遺物集計表 (1)	31
第 2 表	出土地別遺物集計表 (2)	32
第 3 表	出土地別遺物集計表 (3)	33
第 4 表	建具観察表	79
第 5 表	器物観察表	82
第 6 表	飾り金具観察表 1	82
第 7 表	飾り金具観察表 2	83
第 8 表	宗教具・茶道具観察表 1	100
第 9 表	宗教具・茶道具観察表 2	101
第 10 表	銅製角釘類型別集計表	118
第 11 表	銅製丸釘全長別集計表	119
第 12 表	鉄製角釘類型別集計表	120

第 13 表	銅製角釘Ⅱ類全長別集計表	121
第 14 表	銅製角釘Ⅱ類全長別集計表 (30～40 mm 間)	121
第 15 表	釘観察表 1	122
第 16 表	釘観察表 2	123
第 17 表	釘観察表 3	124
第 18 表	調査区別釘出土量集計	125
第 19 表	銭貨観察表	136
第 20 表	その他金属製品観察表 1	136
第 21 表	その他金属製品観察表 2	137
第 22 表	金属製品集計表	152
第 23 表	試料	156

第1章 調査の経緯

第1節 調査に至る経緯

沖縄県土木建築部が昭和59年度に策定した『首里城公園基本計画』において、「古都首里の歴史的環境を、水系、地形、植生など自然環境の中でとらえ、今後の首里の町づくりの方向性として打ち出した“首里杜構想”のもとに、その中核となる首里城一帯について歴史的な都市公園として保全を図る」という構想を表した。昭和61年11月28日に、首里城公園計画区域約17.8haのうち、城郭内側の区域約4.0haについては沖縄復帰を記念する国の都市公園整備事業（国営沖縄記念公園首里城地区）として、復元整備されることが閣議決定され、併せて城郭外側の首里城公園区域約13.8haを県営公園事業として庁議決定され（計画区域及び、面積は昭和62年2月20日付けで建設大臣の認可を受けた首里城公園区域）、首里城跡及び、その周辺の復元整備等が具体化し、現在までに、国営首里城公園では首里城正殿を始め、多くの歴史的建造物が復元された。

県営首里城公園地区における遺構の確認調査は、沖縄県土木建築部が昭和63年度に策定した『首里城公園基本設計』に基づき公園整備を目的としたものである。県営首里城公園では平成元年度から首里城サービスエリア地区の発掘調査が実施され、その成果を受けて、平成3年度から首里杜館地区の整備が行われ、龍潭地区等の発掘調査を実施し、その後、整備が行われている。

中城御殿の過去の発掘調査は、平成4年11月3日に国営首里城公園の開園に伴って、平成4年度から平成6年度まで3次に渡って南側や東側と西側の一部の石牆並びに石垣の整備に伴う発掘調査が当時の沖縄県立博物館（現在、沖縄県立博物館・美術館）によって行われている。同地には、昭和41年11月3日から平成19年3月31日まで、本土復帰前の琉球政府が建設した沖縄県立博物館があったが、同博物館は平成18年3月31日に那覇市おもろまちへ移転の準備のために休館し、平成19年3月31日に閉館、4月1日に移転、11月3日に沖縄県立博物館・美術館として開館した。

平成19年度から実施の発掘調査は、県営首里城公園地区において、首里城周辺並びに綾門大道地区、守礼門周辺等の発掘調査や公園整備が一部完了し、公園計画で未整備であった中城御殿地区の今後の整備・活用を図るために遺構確認を行う目的で行われた。更に、建物群があった箇所における発掘調査は今回が初めてということもあり、戦後の造成土の堆積状況並びに、遺構の残存状況を確認することも重要視している。発掘調査は公園整備を目的とし、沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課から分任予算を受けて、沖縄県教育庁文化課（現文化財課）、事業実施は沖縄県立埋蔵文化財センターが埋蔵文化財の発掘調査を実施した。

第2節 調査体制

本報告書に係る発掘調査業務は、平成19～21年度に実施したもので、平成19年度調査分は、平成21年度に資料整理・報告書刊行を行ったが、一部の遺物（瓦や沖縄産無釉陶器や瓦、貝類遺体、脊椎動物遺体）について、未報告資料があることが確認された。更に、平成20・21年度調査分は、平成22年度に資料整理・報告書刊行を行ったが、時間の都合上、金属製品（鉄製品と青銅製品）と現代遺物の掲載は割愛した。

よって、平成19～21年度の未報告資料の調査報告書作成に係る資料整理・報告書刊行業務は、平成28年度に実施した。その体制は以下のとおりです。

平成 19～21 年度 発掘調査

事業主体

沖縄県教育委員会

教育長 仲村 守和（平成 19・20 年）

金武 正八郎（平成 21 年）

教育管理統括監 杉浦 友平（平成 19 年度）

岩井 健一（平成 20・21 年度）

教育指導統括監 金武 正八郎（平成 19・20 年度）

大城 浩（平成 21 年度）

事業所管課

沖縄県教育庁文化課

課長 千木良 芳範（平成 19・20 年度）

大城 慧（平成 21 年度）

文化班 班 長 識名 敦（平成 19・20 年度）

副参事兼班長 仲本 興彦（平成 21 年度）

主 事 勅使河原 朋恵（平成 19 年度）

大城 朋恵（平成 20・21 年度）

記念物班 班 長 鳥袋 洋（平成 19～21 年度）

専門員 瀬戸 哲也（平成 19～21 年度）

事業総括・事務

沖縄県立埋蔵文化財センター

所 長 名嘉 政修（平成 19・20 年度）

” 玉榮 直（平成 21 年度）

副所長兼庶務課長 瑞慶覧 康博（平成 19 年度）

総務班 班 長 嘉手苺 勤（平成 20・21 年度）

庶務課 主 査 山田 美恵子（平成 19 年度）

総務班 主 査 山田 美恵子（平成 20 年度）

庶務課 主 査 玉寄 秀人（平成 19 年度）

” 主 事 村吉 由美子（平成 19 年度）

総務班 主 事 村吉 由美子（平成 20・21 年度）

” 主 事（臨時任用職員） 弓削 典子（平成 20 年度）

” 主 査 本永 恵（平成 21 年度）

” 主 事（臨時任用職員） 中村 久仁子（平成 21 年度）

調査課 課 長 岸本 義彦（平成 19 年度）

調査班 班 長 岸本 義彦（平成 20 年度）

調査課 主任専門員 金城 亀信（平成 19 年度）

調査班 主 幹 金城 亀信（平成 20 年度）

” 班 長 金城 亀信（平成 21 年度）

調査課 主 任 上地 博（平成 19 年度）

調査班 主 任 上地 博（平成 20・21 年度）

文化財調査嘱託員 伊藝 由希、天願 瑞笑（平成19年度）
 天願 瑞笑、本村 麻里衣（平成20年度）
 天願 瑞笑、大堀 皓平（平成21年度）

発掘調査作業員 翁長博明、嘉味田千枝子、米須清太、桃原佐恵美
 久田愼子、平安名哲子、仲宗根孝、仲程亜紀（平成19年度）
 嘉味田千枝子、喜瀬 彰、呉我フジ子、佐渡山正子
 砂辺里恵、玉城初美、中塚末子、中村フサ子、平安名哲子
 宮國恵子（平成20年度）
 翁長しのぶ、嘉味田千枝子、川上益子、喜瀬 彰
 呉我フジ子、佐渡山正子、砂辺里恵、玉城初美、當眞 哲
 中塚末子、橋本圭司、中村フサ子、福地佐枝子、宮國恵子
 （平成21年度）

聞き取り協力 真栄平 房敬

平成28年度 資料整理・報告書刊行

事業主体 沖縄県教育委員会

教 育 長 平敷 昭人
 教育管理統括監 宜野座 葵
 教育指導統括監 與那嶺 善道

事業所管課

沖縄県教育庁文化財課
 課 長 萩尾 俊章
 管理班 班 長 稲嶺 盛之
 主 査 多和田 友紀
 記念物班 班 長 上地 博
 指導主事 神村 智子

事業総括・事務

沖縄県立埋蔵文化財センター
 所 長 金城 亀信
 総務班 班 長 比嘉 智博
 主 査 新里 靖
 調査班 班 長 仲座 久宜
 主任専門員 山本 正昭
 専門員 田村 薫

埋蔵文化財資料整理員 酒井若葉、鳥千香子、下地麻利恵、渡邊那津季
 當眞 香、根岸敦子、比嘉美智子、渡邊愛依

資料整理指導・助言

久保 智康（元京都国立博物館工芸室長）
 倉成 多郎（那覇市立壺屋焼物博物館）
 櫻木 晋一（下関市立大学経済学部教授）

資料整理協力者

崎原 恭子（沖縄県立博物館・美術館学芸員）

第2章 位置と環境

第1節 地理的環境

中城御殿は、次の琉球国王となる世子が暮らした屋敷である。名称の由来は、王子が王世子（王位継承者）になると、領地として中城間切及び知行され、中城王子あるいは中城御殿と呼称されたことによる。当初その建物は、17世紀前半に現首里高等学校敷地内（首里真和志町）に創建され、王府の別邸である大美御殿の東面に位置していたことから東宮とも呼ばれていた（第2図）。その後、中城御殿は明治3（1870）年に現在の首里大中町へ移転する。ここでは調査対象となる移転後の環境について記す。

中城御殿は、沖縄本島南部の那覇市首里、北緯26°13'15"、東経127°43'05"、標高約100mの台地上に位置し、地番は那覇市首里大中町1丁目1番1～3となる。

中城御殿の南は、道路を隔てて龍潭に面し、南東側に首里城を望むことができる。地形は首里城に至る南側が高く、対する北側が下る形状を成すが、敷地の大半はテラス状の比較的平坦な場所に位置しており、この北側に面する儀保町や末吉町の町並みを見渡せるほどの景観は有してない。しかし、上之御殿が建つ西側は小高くなっており、西方に広がる那覇の街や港をはじめ、遠くは慶良間・粟国諸島の鳥影を望むことができる。

この立地に関し、中城御殿の南東側に近接する首里城をもとにみることにする。首里城は、北側に虎頭山及び真嘉比川を配し、東に弁ヶ嶽及びナゲーラ川、南に安里川を擁して立地している。1713（尚敬1）年、蔡温はこの立地に関し「恭しく玉陵を観るに、国都の高処に発祖し、最も好し。」（『球陽 卷十 688号 球陽研究会編1974』）と遺している。なお、この立地を風水地理学的視点から見ると、弁ヶ嶽は発祖としてエネルギーの源泉である龍脈として捉えられている。その龍脈は虎頭山や西森、末吉の連続する山並みをとおり、西海岸へ抜けていく。そしてその先に浮かぶ慶良間諸島は錦屏という案山にあてられ、北谷・読谷の丘陵が白虎、小祿・豊見城の丘陵を青龍とする風水空間としている。つまり、龍脈から流れでる気を隅々まで巡らせることにより、国王の安泰を願ったのである（都築2005）。このように首里城の立地は、軍事・政治・経済的な実利性のみならず、風水思想の上からも葭風得水の地として優れた条件を備えているとされる。

今報告の対象となる中城御殿の造営に際しても、明治元（1868）年に久米村の地理師（風水師）である鄭良佐と儀通事親雲上ら3名を閩省（中国福州）に派遣して風水を学ばせ、建築の配置が行われたとされ（球陽 卷二十二 2206号 球陽研究会編1974）、前記した首里城の例とも調和した思想により、選定立地から設計・施工までが計画的に行われたことが考えられる。

第2節 歴史的環境

中城御殿は、国王の王子殿として、当初は尚豊王代（在位1621～1640）に綾門大道北側、現在の首里高等学校敷地内に創建された。その後、明治元（1868）年に尚泰王の王子である尚典の立太子に伴い、龍潭北側に位置する大村按司、摩文仁按司、川平親方、小祿親雲上らの宅地を合わせた敷地に移転することが取り決められた。工事は明治3年に着工、明治7（1874）年に完成し、尚典は明治8（1875）年に新殿に移転した。世子はこの御殿において生活を送るとともに執務を行った。

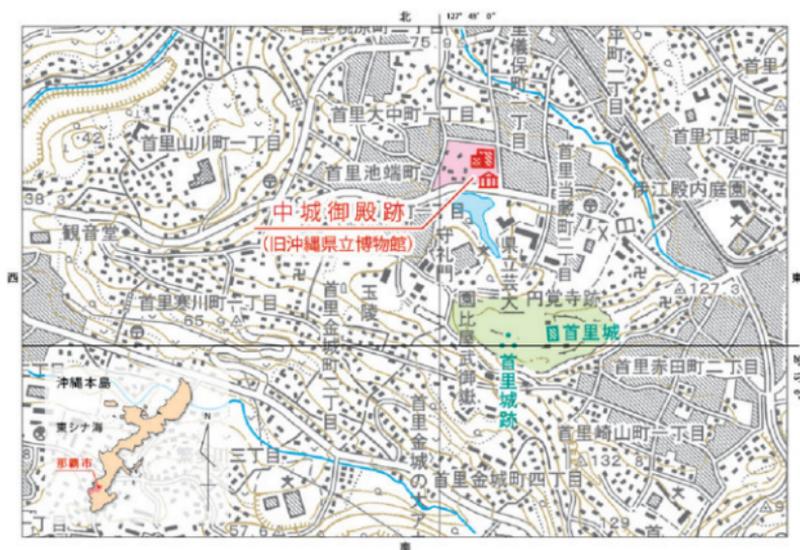
そして、明治12（1879）年の廃藩置県により琉球王国は終焉を迎えることになる。首里城は明け渡され、熊本鎮台沖縄分遣隊により占領される。これにより、それまで正殿や大美御殿等で暮らしていた国王をはじめとする王族は退去を余儀なくされ、一時的に中城御殿に移り住むことになるが、明



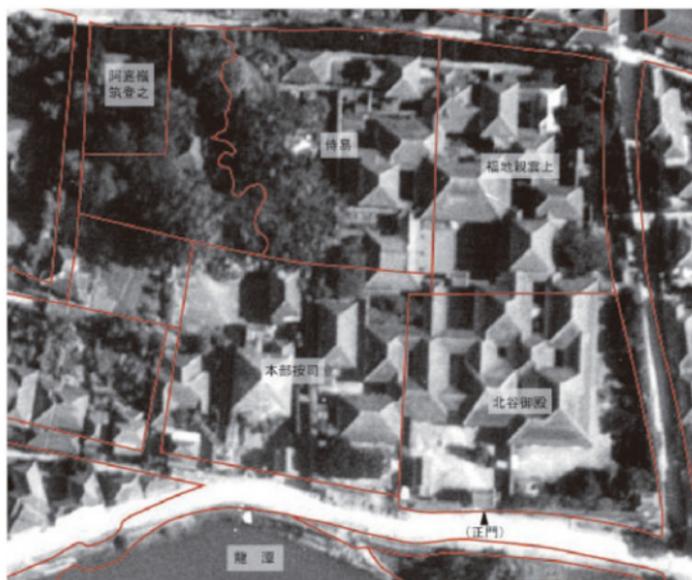
第1図 沖縄本島の位置図



第2図 首里古地図の中城御殿



第3図 中城御殿跡位置図



第4図 中城御殿古写真と首里古地図の重ね図



第5図 中城御殿屋根伏図

治 18 (1885) 年には華族令により東京に移転することになる。

その後、第二次世界大戦が始まると御殿の一部は陸軍少佐の宿舎として使用される。その際に中城御殿が所蔵する多くの宝物を分散させ、敷地内の岩陰に隠すなど避難措置を執った。しかし、昭和 20 (1945) 年 4 月、米軍の砲撃により建物は破壊されることになる。避難していた宝物類は遺されていないことから戦利品として持ち去られたことが考えられる (その一部は 1947 年にフィリピンから、1953 年にアメリカから返還)。その直後は、陸軍の機関銃陣地として使用されることで高家職員は退去させられ、終戦を迎えることになる (沖縄県立博物館 1996)。それまでの間、御殿は高家の屋敷 (高侯爵家首里邸) として、王府の伝統的なしきたりが保たれた空間であった。

終戦直後の跡地には、一時引揚者のバラックが建つが、首里市役所、首里バス会社として使用され、のちに龍潭東側にあった博物館を移転するために、琉球政府により買い上げられる (図版 1-1)。そして昭和 40 (1965) 年から翌年にかけて、米国民政府の援助により琉球政府立博物館が建設され (図版 2-2.3)、昭和 47 (1972) 年の本土復帰に伴い沖縄県立博物館に改称される。

この本土復帰から 20 年を記念し、首里城正殿を含む周辺一帯が首里城公園として開園するにあたり、その一環として中城御殿の石牆を復元する計画が浮上した。この復元に先立ち、平成 4 (1992) 年度から平成 6 (1994) 年度の 3 度にわたり石牆部分の発掘調査が実施され、石積みの根石や石組み遺構、ピット等の遺構を検出し、この成果を元に平成 4 年度に正面及び東側石牆の復元整備が行われた (沖縄県立博物館 1992、1993、1994)。

その後、博物館は開館から 40 年が過ぎ、施設の老朽化及び資料増による取蔵機能の低下に伴い、新館への移転が計画され、平成 18 (2006) 年 3 月に休館、平成 19 (2007) 年 3 月に閉館・移転し、同年 11 月 3 日、那覇市おもろまちに沖縄県立博物館・美術館が開館する。そしてこの旧館建物は、平成 21 (2009) 年の解体工事により撤去された。

博物館移転後は、平成 19 年度より跡地利用計画策定に先立ち、埋蔵文化財の基礎資料を得るための遺構確認調査が行われ、現在に至る (第 7 図)。

なお、中城御殿ではこれまでの調査により、多くの遺構がその間取りや構造を示す良好な状態で埋蔵されていることが判明している。このような中で、明治 7 年竣工当時の詳細な平面図 (中城御殿御普請板図・翻刻図) を写した古写真が発見された。これらの重要な発見から、「遺構は保存されることになり、将来的に復元整備を行うことが取り決められた (平成 24 年 1 月)。現在は中城御殿整理検討委員会 (平成 22 年 10 月より開催) により、復元整備計画から利活用についての話し合いが行われているところである。今後は、これまでの遺構確認調査から復元整備計画に合わせた発掘調査を継続して行い、復元整備の基礎資料を作成していく予定にしている。

なお、平成 4 年から平成 6 年に刊行した第 1～3 次調査の「第 II 章 遺跡の立地と概要 第 2 節 遺跡の概要」において、戦前の中城御殿の状況を知る記述があり、一部を抜粋する。

『旧中城御殿概略図』は、1940 年から 1945 年の間中城御殿に出入りして中城御殿を実見し、そこで生活する古老たちと親しく接することのできた真栄平房敬氏からの聞き取りで作図したものである。概略図を参考に御殿の内容を記すと次のとおりとなる。

敷地は約 3000 坪余、建物は米蔵や炭蔵などの別棟を除いて約 800 坪余である。御殿の主要な建物は二十数棟が連結して群立し、すべて赤瓦葺きであった。主殿は表御殿と奥御殿 (御内原) に分かれ、表は男性だけ、奥は女性だけでその接点には (鈴引き) で取次ぎがなされた。

表御殿は玄関を入ると御番所があり、その東側に御伺候間、大広間、御書院が並び内部は書院造りであった。さらに政庁の役割をもつ前之御座と取納座殿、御藏などが西側に連結していた。



1 昭和20年代の中城御殿跡



2 建設中の琉球政府立博物館



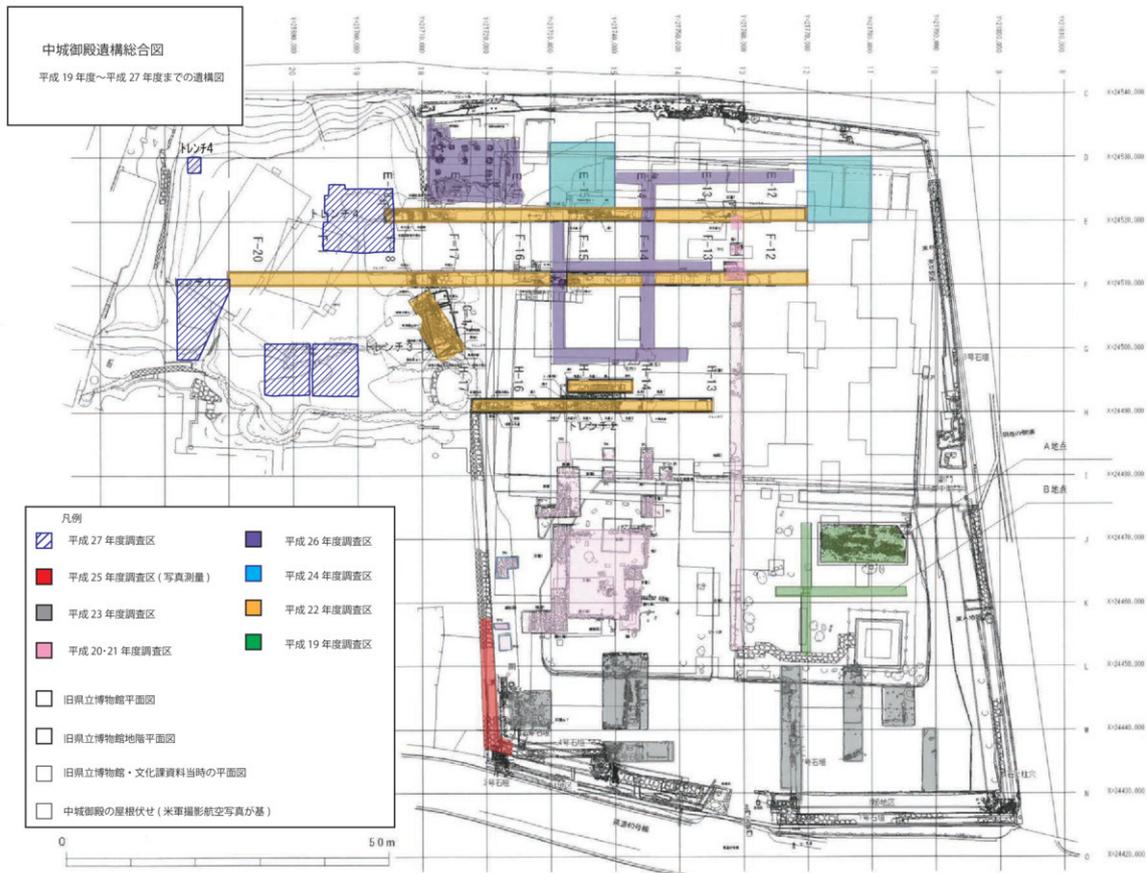
3 完成直後の琉球政府立博物館

図版1 琉球政府立博物館の建設

御殿に勤める役人は、三司官の一人が中城御殿紫官大親を兼ね、その下に大親以下46人が任じられ、さらに下代、門番などがいた。

奥御殿には、屋敷内で一番大きい建物である寝廟殿を中心にして寝殿造りを思わせるコの字型に主要な建物を配し、その回りにいくつかの建物を連結させてひとまとまりになっていた。これらの御殿の内部構造は平安・鎌倉時代の御所造りに似ていたという。

女官から下女にいたるまで数十人の婦女子が仕えていたが、明治以降は大幅な人員削減が行われ、1941年（昭和16）には男女あわせて80人余が仕えていたという。1879年（明治12）の「首里城明け渡し」の時には、国王はこの世子殿に移り、その後大美御殿や間得大君御殿からも移り住んでいたという。『……云々……』と記載がある（沖縄県立博物館1993、1994、1995）。これから敷地面積や建物の配置、屋瓦の色、居住空間、中城御殿に勤める役人等とあり、当時の歴史的背景について知ることができる。



第7図 平成19～27年度調査区図

第3章 調査の概要

第1節 調査経緯

1. 平成20(2008)年度

平成19(2007)年度に引き続き、12月1日(月)から2月27日(金)まで57日間に渡って、約400㎡の範囲で発掘調査を実施した。当該年度の調査の目的は、前年度に調査を実施した調査区の西側に位置する旧沖縄県立博物館敷地内の南西箇所と、北西にあった上之御殿の南側にある庭園内の池の背後における遺構の残存状況の確認調査を行った。

調査区内全体の草刈り作業と同時に並行しながら、調査区内でグリッド設定を行った。先ず、前年度A地点とした箇所をA地区、その西側をB地区、旧沖縄県立博物館敷地内の北西にあった上之御殿の南側にある庭園をC地区とした。それぞれ、遺構と堆積層の深度を確認するために1m四方の試掘坑を設定し、試掘を行った。なお、前年度調査を行ったA地区では、石列や溝、石敷等の建物に関連する遺構が確認されたが、発掘調査は往時に造られた中城御殿の遺構の確認調査を目的としており、記録保存の調査は行わず、同遺跡を確認した場合は遺構の露出を行い、それ以外遺跡の遺構を確認した時点で調査を終えた。なお、調査期間は2ヶ月という時間の制約があったため、平面図の実測を当該年度で実施した。

そのうちB地区内のK-14グリッドに設定した試掘坑№1の東側でコンクリート製の溝が確認された。また、B地区内のL-15グリッド内に設定した試掘坑より石敷遺構の一部が確認されたため、試掘坑№2が含まれるL-15グリッド(10m四方)を対象として掘削を開始した。

同時に、C地区内に所在する庭園の遺構の残存状況の確認も行った。庭園は残りが良く、丹念に樹木の伐採と除草を実施すると良好な状態で庭園の池を露出させた。そこで庭園内の池の北側(試掘坑№3)と、池の上部(試掘坑№4)にそれぞれ1m四方の試掘坑を設定した(№3:G-19グリッド内、№4:H-19グリッド内)。調査の進捗状況に伴って、試掘坑№3を東側に1m延長した。両方の試掘坑から遺構は確認出来なかったが、池の北側の試掘坑№3から被熱した鳩目銭や染付、貝、動物の骨等が得られた。このような遺物の出土状況と黒色の層を確認した後に、実測図と写真撮影等の記録を撮り、埋め戻しを実施した。

一方、L-15グリッドでは土層の堆積状況を確認するために東西方向に10m×1mのトレンチを設定して掘削を行った。その結果、良好な状態で遺構が検出されたことから、グリッドの境界にベルトを残しながらL-15グリッドの東西トレンチを東側に延長し、更にK・L-14グリッドの東側に南北トレンチを設定して層序の確認と堆積層の深度の確認を行った。その結果、コーラル層の下層より旧首里市役所及び、首里バスターミナルの時期のものと思われるコンクリート製の基礎やコンクリート製の溝、レンガ等が検出され、K-14グリッドの南北トレンチでは更にその下層より赤黒く焼けた焼土面や舗装面、切石のようなものを確認した。これらの遺構も中城御殿に伴う可能性があることから、トレンチの掘削から遺構面を確認する調査に切り替えた。調査区中央において、表土剥ぎを行っている最中に往時の中城御殿のものと思われる石造の溝が各グリッドにおいて確認された。これらの確認された遺構までの掘削深度は約30～50cmと浅かったため、人力で掘削を行った。

1月末までには調査範囲のほぼ全面に渡って往時に造られた中城御殿の石造の溝や石敷遺構、戦災による焼土が確認された。その後、石造の溝や石敷遺構を覆う焼土を掘削すると、ガラス玉や金属製品が大量に検出された。特に、K-14グリッドの石造の溝付近より多量のガラスや希少な金属製品が検出された。ガラス玉はあまりにも多量で掘削によって、全てのガラス玉を取り上げることが不可能であったため、サンプリングした土を篩掛けし、ビーズを収集した。また、K・L-15グリッドにおいて、層序観察用の畦を掘削した際に、旧首里市役所の遺構の直下から金属製品が集中して検出されたため、実測図と写真撮影等の記録を撮り、遺物を取り上げた。

2月中旬頃には遺構の検出が完了し、記録を撮る作業を行い、終了後は次年度も引き続き調査を実施する予定だが、遺構を保護砂で保護し、その上からブルーシートで覆い、保護して平成20(2008)年度の調査を完了した。

2. 平成21(2009)年度

平成20(2008)年度から継続して6月2日(火)から10月30日(金)までの78日間に渡り、約250㎡の範囲で調査を行った。平成20(2008)年度調査の結果を受け、大規模に遺構が残されることが分かった中城御殿の遺構残存範囲の把握を目的として、K・L-14・15の周辺を対象に調査を開始した。調査面積は合計で約250㎡となった。

まず昨年度調査区の周囲に2m×2mの試掘坑を5箇所設定して遺構の確認を行った結果、平成20(2008)年度に検出された石敷・石溝遺構の続きがほぼ未破壊の状態で残されていることが分かった。また協門付近L-16の試掘坑からは傾斜した石敷遺構と被熱した舗装面が検出され、中城御殿当時の建物区画が復元可能なほどの遺構残存状況が見込まれるに至った。そこで遺構残存範囲を確認するために昨年度調査区の北側・西側に徐々に離れながら試掘坑を随時設定していき、遺構の確認を行った。最終的には計16箇所の試掘坑を設定した。この試掘の結果、旧県立博物館の南西部のほぼ全域に渡って遺構が包蔵することが確認された。また中城御殿の遺構が検出されなかった2つの試掘坑からは、中城御殿旧表土より下位の地層より近世期と思われる遺構や造成層が検出された。

調査中盤には、旧県立博物館建物の中庭に該当するE・F-13にも3つの試掘坑を設定して人力で掘り下げを行った。その結果、中城御殿当時のものとみられる石溝・基壇や旧表土、中城御殿以前のものとみられる造成層が検出された。

調査後半にはG-13からL-13に旧県立博物館敷地内を南北に貫く60m×2mのトレンチを設定し、重機によって表土を除去して遺構の確認を行った。その結果トレンチのほぼ全面に渡って石敷遺構や暗渠といった遺構や中城御殿当時の旧表土が検出され、旧県立博物館建物の下にも遺構が包蔵されることが確認された。しかし調査期間が限られていたこともあり、検出状況の図化・写真記録に留め、遺構の完掘作業は行わずに現地保存して調査を終了した。10月30日に発掘調査は終了したが、11月29日には現地説明会を行い平成20(2008)・21(2009)年度の調査成果を報告し、のべ244名の見学者が訪れた。現地説明会終了後、遺構に砂を敷いて保護したのち、3月に重機により埋め戻して調査を終了した。

第2節 調査区の設定

1. グリッド設定

発掘調査を実施する前に調査区の設定に伴って、平成18(2006)年度に沖縄県土木建築部都市計画・モノレール課が測量業者へ測量の委託を行った際の4級基準点21-4($X = 24,435.973$, $Y = 21,719.010$)と21-5($X = 24,424.239$, $Y = 21,763.968$)が県道29号線沿いの歩道上に設置されていることを確認した。

調査区については、4級基準点を基準に平成19(2007)年度に調査区内にL-14($X = 24,450.000$, $Y = 21,750.000$)を新設した。それを基準とし、10m間隔でラインを設定し、方位に併せて、南北ラインにアルファベット(・・・J～O・・・)、東西ラインに算用数字(・・・7～24・・・)を用いた名称のラインでグリッドを設定した。標記方法はJ-10、K-10等とした。

2. 調査区設定

平成20(2008)年度

平成19(2007)年度に設定したグリッドに沿って、K-L-14・15グリッドに調査区を設定した。しかし、その当時、旧沖縄県立博物館の建物の解体前で、K-15グリッドの北西際に中庭の緑石と樹木があったため、この場所を避ける形の調査区となった。また、庭園付近は遺構が確認される可能性が高い場所を前提として、任意に試掘坑を設定した。

平成21(2009)年度

前年度に残されたK-15北西際とともに、設定したグリッドに従いながら平成20(2008)年度の北側に2m×2mの試掘坑を設定した。試掘坑は調査の進展に伴って繋がるなどしたため、結果的に図のような形となっている。また跡地中央部での遺構残存状況を確認するため、13ラインに沿うようにF～Lまでの南北60m、東西2mのトレンチを設定した。

3. 資料整理の経過

発掘調査で得られた遺物や遺構図、写真等は調査終了後に全て沖縄県立埋蔵文化財センターへ移動し、発掘調査報告書の刊行に向け、資料整理作業を実施し、金属製品以外は平成22年度にまとめて報告書を刊行した。

今回、平成22年度の報告書から外した金属製品の資料整理作業について、出土遺物の洗浄は現場の雨天時にほぼ終了していたことから、注記(ナンバーリング)を先に開始した。今回、報告書に掲載する予定の金属製品について、未洗浄のものはアルコールで洗浄作業を入念に行った。その後、順次、分類や接合、集計、図化対象遺物の抜き出しを行って、遺物の実測やデジタルトレース、手書きのトレース、図版作成、写真撮影等を行った。また、資料整理作業中に金属製品の専門家に鑑定及び、同定を行って頂いた。なお、青銅製品の耳杯の自然科学分析及びクリーニング及び、青銅製品の産地同定をパリオ・サーヴェイ株式会社へ委託した。

報告書の刊行については、図版(実測図と写真等)や表、原稿執筆後に文字原稿をデジタル化し、デジタルによる原稿を完成させた。それに伴って、指名競争入札によって、落札した印刷業者と契約を行って、データ入稿を行い、報告書を刊行した。

資料整理後の遺物や図面、写真等は全て沖縄県立埋蔵文化財センターの収蔵庫や記録保存室で保管し、外部機関や研究者等の閲覧の対応や貸出等の活用が図れるようにしている。



1 調査区設定作業状況



2 表土掘削作業状況



3 遺構検出作業状況 (1)



4 遺構検出作業状況 (2)



5 職場体験学習実施状況



6 壁面図作成状況



7 遺構図作成状況



8 掘削作業終了後状況

図版 2 発掘作業状況

第4章 層序と遺構

第1節 層序と堆積

平成20・21年度調査区は、中城御殿の遺構・旧表土より上の堆積が中心であったため、ほとんどが戦後の堆積であった。戦後の造成は客土が中心であったため、現地記録では多種多様な堆積が記録されるに至った。

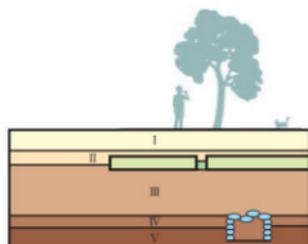
ここでは有効とみられる時期区分によって大別し、今次調査範囲の堆積状況について報告する。

I層 戦後から現代までの堆積をまとめてI層とした。I層は大きく2つの堆積に分けられる。上層は平成21年4月の旧県立博物館解体工事において舗装されたアスファルト・コーラル層で、下層は旧沖縄県立博物館や旧首里市役所等に伴う造成層である。造成層はII層と客土とが攪乱した混雑土層で、混ぜられる客土によって場所ごとに大小の土質の違いがみられる。

層中には旧首里市役所のレンガ積み遺構やコンクリート溝が残っている。また出土遺物は中城御殿に伴うとみられる瓦や陶磁器をはじめ、戦時中の弾丸、米軍統治下時代のジュース瓶や1セントコインなども出土している。

II層 II層は遺構直上に堆積する焼土・炭層や側溝内を埋める瓦層が該当する。焼土・炭層は層中に溶解した金属製品や炭化木材が含まれることから、戦時中における中城御殿焼失時のものと断定される。次に側溝内を埋める瓦層は、遺構との間に上記の焼土・炭層を挟む。出土遺物には多量の瓦をはじめ、陶磁器や稀少性の高い金属製品、多量なガラス玉の一括出土など、多くの特徴的な遺物がまとめて包含する。また弾丸などの戦時中とみられる遺物は出土するが、米軍統治下時代の遺物はみられないことから、中城御殿焼失の直後に瓦礫を側溝内に片付けたことによって形成された層とみられる。

本来検出時より厚く堆積していたとみられるが、戦後の開発によってI層に攪乱されたことによって、明確な堆積は遺構直上のみに残されたと推定される。以上の状況から、II層の年代観は1945年頃と目される。



- I層：戦後の造成層（戦後～現代）
- II層：焼土層、溝内覆土等（戦中・戦後直後）
- III層：中城御殿当時の遺構・旧表土、中城御殿造営時の早世土
- IV層：中城御殿以前の遺構・旧表土・造成層（近世）
- V層：泥岩（クチャ）層・赤土（マーヅ）層（中世・近世もしくは地山）

第8図 中城御殿跡の堆積模式図

Ⅲ層 中城御殿の遺構やその当時の旧表土、及び中城御殿造営時の造成土層をⅢ層としてまとめた。旧表土は瓦礫が平面的に散布する状況、あるいは平坦で填圧を受けた赤土にビット群が残るような状況から推測した。年代的には中城御殿の移築造営が着工される1870年から、中城御殿焼失直前の1945年までが考えられる。

Ⅳ層 Ⅲ層より下位で検出される填圧を受けた赤土・コーラル互層や、出土遺物に近代のものが含まれない造成層をⅣ層とした。TP 1・6・12・13・14において確認され、年代的には近世が想定される。遺構にはTP 1から円形石組遺構やビット群が検出されている。遺物はタイ産褐釉陶器、明朝系赤瓦・灰瓦などが出土している。

Ⅴ層 TP 1において検出された。無遺物の赤土層と、直上にみられる同じく無遺物層の灰褐色粘土層とのセット関係が認められる。TP 1円形石組遺構はこのⅤ層を掘り込まれて造られる。本層は無遺物層であることを含めて地山の様相をなすが、TP12では赤土の整地面が検出されていることから、結論は岩盤の検出がなされるまで慎重を期したい。

第2節 検出遺構

遺構は、中城御殿当時の遺構と、それ以前の遺構とに大別できる。以下にテストビット（TP）毎にその状況を示す。なお、遺構内出土遺物の集計表は第1～8表に示した。

1. J-14 TP 1（第13図、図版4）

堆積 I・Ⅲ・Ⅳ・Ⅴ層が認められる。表土から約80cm下まではI層が厚く堆積する。Ⅲ層最上面の南西際にはTP 2・3で検出された石畳3と同一の遺構とみられる石盤状の石が検出されているが、覆土に焼土や炭層は一切認められないことからⅡ層はI層に飛ばされたものとみられる。石畳の下には褐色の粘質土層が堆積し、中城御殿の遺構との層位関係や若干の包含遺物からⅢ層に目される。さらにその下に無遺物層の暗褐色粘質土層が堆積し、層中に遺構を包蔵するためⅣ層と目される。その下には無包含の明褐色粘質土層が堆積し、この土を掘り込んで遺構が構築されることからⅤ層とした。地山の赤土（マージ）層とみられる。

遺構 TP 1は中城御殿当時では酒御蔵であった場所に当たるが、ここからは2つの時期の遺構が検出されている。Ⅲ層からは上記のように中城御殿の石畳とみられる石が検出されているが、かなり大きいことから礎石の可能性もあり判然としない。

一方でⅣ層からはビット群と円形石組遺構が検出された。ビット群はTP 1東側に検出された計12口のビットである。いずれのビット覆土からも遺物はほとんど出土せず、またビットに規則的な配列もみられないことから、植栽痕と想定される。円形石組遺構はⅤ層を掘り込み、内側に面の作られた琉球石灰岩を円形に4段積んで構築されている。天井部には板状の礫が水平に積まれ、さらに中ほどの深さで再度水平に礫が敷かれている。この状況から、円形石組遺構は一度蓋をされたのち、さらに上に再構築された可能性が挙げられる。底面はⅤ層の赤土を固く填圧して床面を形成している。埋土中からは中国産白磁や薩摩焼、沖縄産施釉陶器、明朝系瓦などの遺物が出土したが、製品以外には多量の魚骨片が包含されており、この点からゴミ捨て坑（シーリ）の可能性が考えられる。試掘坑の設定上で検出された部分のみを完掘し、残

り部分は未検出の状態で見地保存した。また掘削した遺構埋土は全てサンプルとして回収している。

首里古地図によれば TP 1 は本部按司もしくは侍易の屋敷区画内に該当しており（第 10 図）、近世琉球における高位の家柄の生活像を窺わせる遺構として注目される。

2. I・J-14 TP 2、J-14 TP 3 の層序と遺構（第 14・15 図、図版 5・6）

層序 TP 2・3 には I・II・III 層が認められた。現地表面より約 40cm は I 層が堆積し、層中には現代の製品と共に中城御殿のものとみられる多量の遺物が包含している。石畳・側溝底石直上には焼土・炭層が薄く堆積しており、戦時中における中城御殿焼失時のものとみられる。溝内は焼土・炭層の上に瓦層が溝内を埋め、瓦をはじめとした多量の遺物が出土する。III 層は遺構以外で TP 2 北側に認められ、中城御殿造営時の造成土とみられる。

遺構 I-J-14 TP 2・3 は酒御蔵の西隣で、TP 2 は新御殿と酒御蔵を結ぶ通路部分に当たるとされる。ここからは K-14 から繋がる蓋のつかないタイプの溝（溝 2）とその東側に石畳（石畳 3）が検出されている。中城御殿当時の建物配置から、酒御蔵に隣接する石畳・側溝とみられる。TP 2 の中間付近から北側ではこの状況と一致するように溝幅が半分になるとともに石畳が一段高くなっている。溝西側の縁石も同じ位置を境に形状が変化する。この箇所は上述のように建物間を結ぶ通路に当たるとされ、検出遺構と一致した状況を呈している。

また TP 2 南側の溝の縁石には直線的な擦痕が残されており、蓋のようなものが設置されていた痕跡と考えられる。溝 2 内は、北側の TP 2 から中国産・本土産の色絵・染付や所謂スキャンマカイが出土する。また TP 3 からは TP 2 と同様の遺物に加え、イギリス産陶器の鉢や陶質の土管が出土している。

3. I-15 TP 4、J-5 TP 5 の層序と遺構（第 16 図、図版 7）

層序 TP 4・5 は I・III 層が認められる。III 層は TP 5 西側に残る基壇 4 と、造成土とみられるクチャ・赤土層が認められる。残る箇所は戦後の破壊を受け、多量の琉球石灰岩礫やコンクリート塊が含まれる I 層のみが堆積する。

遺構 TP 4 は新御殿の下、TP 5 は漆喰壁が配置された箇所に当たる。検出遺構は TP 5 の東西際に基壇とみられる切石（基壇 4）が認められるのみである。基壇 4 は TP 7 基壇 3 と東西方向で直線的に一致することから同一の遺構とみられる。

4. I-15 TP6（第 22 図、図版 12）

堆積 I 層・III 層・IV 層が認められる。I 層は II 層の土と客土が混ざり、瓦片などの遺物が多量に包含する。最下にはコンクリート壁もみられることから、戦後から現代にかけての造成層とみられる。III 層はコンクリート壁の下から検出され、出土する遺物も僅かとなることから中城御殿の造成層と評価した。IV 層は粘質土層と混土礫層が互層となって 1.5 m 以上堆積しているが、安全のために掘削を途中で中断したためにどの程度の深度まで堆積するのか不明である。おそらく岩盤に局地的な落ち込みがあり、それを造成時に埋め立てたことによって深く堆積したものとみられる。遺物は褐釉陶器などが僅かに出土する。

遺構 TP 6は新御殿付近の漆喰壁が配置される箇所であるが、上記のように戦後の擾乱の影響により、元位置を留める遺構は検出されなかった。

5. J-15・16 TP 7 (第17図、図版8)

堆積 I層とⅢ層が認められる。I層は客土とⅡ層の混泥土層で現在の地表面から約40cm堆積する。多量の琉球石灰岩片が混入する混泥土層で、土中からは現代の製品とともに中城御殿当時のものとみられる遺物が多量に包含する。

Ⅲ層はTP 7西側のJ-16グリッドに当たる箇所において検出される。中城御殿の遺構とほぼ同じ深度に堆積する灰褐色粘質土層(クチャ層)で、中城御殿の造成層とみられる。また同じ程度の大きさの礫が粗い密度で堆積している。この状況はK-16TP 9にも認められる。

遺構 TP 7は高御蔵の東隣部分に当たり、遺構には石畳1の北側部、基壇1・3が検出されている。石畳1はL-15から南北に伸びる石畳で、中城御殿当時の建物配置からは高御蔵に隣接する石畳とみられる。基壇1はK-15から南北に伸びる石列遺構である。石畳1より大きい方形の切石が使われ、石畳1より10cm程度高くなっている。また北端にはL字状の凹みが残り、切石の上に何らかの構造物が設置されていたことを窺わせる。一方で基壇3は幅の狭い切石を列状に並べており、類似するTP 5基壇4と同一の遺構とみられる。基壇1は門と井戸を結ぶ漆喰壁、基壇3は新御殿に関わる基壇と考えられる。

6. K-14 (第18・25・26図、図版9)

堆積 I層・Ⅱ層が認められる。I層からは多量の遺物が包含するが、様々な客土が混じる。またその下層には戦後の首里市役所のものと思われるレンガの敷かれる遺構が検出されている。Ⅱ層は、L-14と同じものである。

遺構 K-14は2つの御蔵の中間部分に当たる。ここからは溝2と基壇2が検出された。溝2はK-14南側でS字状に曲がるが、この箇所は水流が止まらないように底石が斜めに設置され、縁石にも高低差が作られている(C-C)。今次調査で検出された溝のうち、直角でないカーブはこの箇所のみである。覆土中からは多種多様な遺物が出土した。陶磁器には中国産白磁・色絵・染付・褐釉陶器、本土産色絵・染付・陶器、沖縄産施釉・無釉陶器、西洋陶器が得られた。また陶磁器以外では煙管や陶管、漆製品などが出土している。これらの中には有田焼の色絵や西洋陶器といった上級の製品が含まれているが、その背景には御蔵が隣接していることが考えられる。また基壇2・石畳3と接する箇所でも右に分岐するが、破壊を受けており詳細は不明である。

基壇2はK-14北側に東西方向で設置される、幅広い切石を並べた遺構である。K-15基壇1と直線的に一致し、構造上も類似することから同一の遺構とみられる。

7. K-15 (第19・25図、図版10)

堆積 I層とⅡ層が認められる。Ⅱ層は石畳の抜けた部分に認められる灰褐色粘質土層で、中城御殿の造成層とみられる。その上には戦後の造成層である混泥土層のI層が堆積し、層中にはK-14のものと同様とみられるレンガの敷かれる遺構が検出されている。

遺構 K-15は御蔵と、高御蔵の中間部分に当たる。ここからは溝1、石畳1、基壇1が検出されている。溝1は屈曲部にのみ蓋石が確認され、構造は蓋石3類が用いられる。そのすぐ東側で北方向と東方向へ分岐する。北方向へ分岐した溝は、TP6で確認できないため短い溝とみられる。西側縁石は階段状になっており、東側縁石と高さが一致することから蓋を受けるための構造とみられる(F-F)。一方、東方向の溝は西側に下傾する構造となっているが、戦災で東側が破壊されているため、中城御殿往時の構造かどうか判然としない。L-15と同様、溝1の西側に石畳1が伴うが、K-15南側にかけて西側縁石と石畳がなく底石も傾いている状況になっている。おそらく溝1東側分岐部分と同様に、戦災で破壊されたものとみられる(H-H)。

基壇1はJ-15 TP6から繋がる幅広の切石が並ぶ遺構で、方形に区画されている。構造上の特徴や区画から、K-14基壇2と同一の遺構と目される。

中城御殿の間取りや屋根伏せからは、溝1・石畳1は御蔵西側の通路、基壇1は御蔵北側にあったとされる漆喰壁に関連する遺構と考えられる。

8. L-14 (第20・21・26図、図版11)

堆積 I層とII層が認められる。I層は客土を主体とする混雑土層で、琉球石灰岩片を中心に多量の近代・現代の遺物が包含している。II層は遺構直上に堆積する焼土・炭層である(K-14南壁断面図参照)。

遺構 L-14は中城御殿当時では御蔵・取納座部分に当たる。ここからは溝2・4、蓋付溝2・3、石畳2、舗装面2が検出された。溝2はK-14より続き、西側に曲がるが2m先でさらに南に直角に曲がる。蓋が付かず弧を描く屈曲部と、蓋が付き直角に曲がる屈曲部の2つの屈曲部が認められる。遺物には数千点にも及ぶガラス玉がまとまって出土したほか、金属製の耳杯などの特異な遺物が得られている。中城御殿の間取りや屋根伏せからは、溝2・石畳2は2つの御蔵の中間の石畳道と推定される。

一方で溝4はL-14南端に検出され、部分的に底石と南北両縁石が残ることから溝として取り扱った。北隣には舗装面2が検出されている。舗装面2は溝4と石畳2・蓋付溝2の間に位置している。溝4・舗装面2は中城大親の離れ屋敷・取納座と御蔵の間を通る道とその側溝と目される。

蓋付溝3は溝2から東に分岐した溝の途中から出現する。蓋の構造は2類が用いられる(第9図)。戦後のコンクリート壁建設によって一部が破壊されているが、蓋石・側溝ともに保存状態は良好である。注目されるのは蓋付溝が石畳2の範囲外より始まることで、側溝と石畳との構造上の関係性を窺わせる箇所である。蓋付溝3は御蔵と取納座の間に位置しており、蓋が付いて暗渠となるのは両建物の通用の邪魔にならないことを意図したものである。

9. L-15 (第23・24・26図、図版13・14)

堆積 I層とII層が認められる。I層はいずれの場所にもみられる混雑土層で、多量の遺物が含まれる。II層は遺構直上に堆積する焼土・炭層で、L-15の東側に残されていた。

遺構 L-15は御蔵・中城大親の屋敷が位置するが、遺構は溝1・4、蓋付溝1・2、暗渠1、石畳1・4、舗装面2、金属製品溜まりが検出された。溝1は幅の狭い蓋の付かない溝で、西に

石畳1が隣接することから石畳道の側溝であると判断される。水流は北から南に向かい、暗渠1へと流れる構造となっている。石畳1は脇門から御蔵の西を通り、門Fへと至る石畳道と推定される。溝4はL-14から続く遺構で、蓋付溝2との間に舗装面2が検出されている。ことから、溝4は舗装面2の側溝とみられる。蓋付溝1はL-15南側にみられ、全長は不明である。水は南から北へ向かい、暗渠1へと流れる構造となっている。西に石畳1が隣接しており、石畳1の側溝であるとみられる。蓋の構造は唯一左右両方の縁石に受けをもつ1類である(第7図)。蓋付溝2は東西方向に約10m通る遺構で、平成20・21年度調査において検出されたうちで最も長い蓋付溝である。水流は東から西へと向かい、暗渠1へと流れる構造となっている。蓋石は一部で失われているものの、残存状況は概ね良好である。

暗渠1は溝1、蓋付溝1・2の結節点にあり、石畳1の下を北西方向に向かっている。各溝から流れる水の合流地点となっており、おそらく龍潭に排水する仕組みとするとみられる。溝3・4を除く溝の水は、最終的にこの暗渠1へと流れる構造になっている。

金属製品溜まりはL-15の北東側にある土坑状の穴に、複数の大形金属製品が折り重なった状態で出土したものである。土坑内覆土は1層のものであることから、戦時中に形成された穴に廃品となった製品を投げ込んだものと考えられる。付近には石畳4が検出されるが、破壊を受けており全容は不明な状態となっている。

10. L-16 TP 8 (第27図、図版15)

堆積 I層とII層が認められる。I層は客土に中城御殿の遺物が混ざった戦後の造成層である。II層は舗装面1の直上に薄く堆積する焼土・炭化物層で、炭化物はまだ土壌化が進んでおらず年輪が残る。

遺構 中城御殿当時の石畳1、舗装面1、暗渠1が検出されている。舗装面1は石畳が下傾した先にみられるが、当時の写真から舗装面は中城御殿内壁の外側を通る道と想定される。従ってこの境界線に中城御殿の内壁があった可能性が高い。

11. K-16 TP 9 (第28図、図版16)

堆積 I層とIII層が認められる。I層は客土に中城御殿の遺物が混ざった戦後の造成層である。III層はJ-15・16TP7と同じく、大きい礫が雑然と含まれるクチャブロック層が堆積する。

遺構 K-16は高御蔵の南西際部分に当たるが、ここから遺構は検出されなかった。

12. L-16 TP10

堆積 I・III層が認められる。I層は客土に中城御殿の遺物やコンクリートブロックが混ざった戦後の造成層である。その下には中城御殿当時の遺構が検出される。

遺構 東側で舗装面が検出され、検出レベルなどから舗装面1とみられる。なおI層の崩落が激しいため、図化記録は行っていない。

13. L-16 TP11

堆積 I層のみ認められる。I層は客土に中城御殿の遺物やコンクリートブロックが混ざった戦後の造成層である。なおI層の崩落が激しいため、図化記録は行っていない。

遺構 石牆下から石牆の根石が検出されているが、崩落が激しく、詳細な観察は行えなかった。

14. L-13 (第29図、図版17～19)

堆積 I・II・III層が認められる。II層は石畳遺構の周囲に確認され、瓦片と小礫片で成る、戦後もなく戦災で破壊された瓦礫を整地した瓦礫層とみられる。III層は明褐色で粘質の赤土層で、平坦に整地される。遺構直下のレベルであることから、中城御殿の造成土とみられる。

遺構 石畳5とピット群が検出されている。石畳5は元位置を留めるものの半壊した状態である。なおトレンチ南端にも石畳がみられるが、破損状態が激しく元位置を留めるか不明であったことから遺構としなかった。ピット群はIII層を掘り込んだもので、南北方向におよそ直線的であるが、間隔は不規則であることから、植栽痕と判断した。なおピット群は検出のみで、覆土の掘削は行っていない。

15. I-13 (第30図、図版20～22)

堆積 I層・II層・III層が認められる。南側に設けたサブトレンチの堆積からは、小礫の混ざる粘質土層であるIII層の上に、填圧を強く受ける瓦礫層が乗ることが分かる。瓦礫は戦災で破壊された瓦や石造遺構の残骸とみられることから、それぞれIII層が中城御殿の造成層、II層が戦中・終戦直後の造成層であるとみられる。

遺構 暗渠2が検出された。これは石敷の下に空洞が認められたことによる。内部の掘削は行っていない。

16. H-13 (第31図・図版23～25)

堆積 I層とII層が認められる。II層は遺構周囲で確認される瓦小片と礫小片が密に堆積する瓦礫層で、終戦直後の造成層とみられる。

遺構 石畳6が検出された。トレンチ東側は元位置を留めており、北側には石畳の縁石が残される。しかしトレンチ西側と中央南側は破壊され、石畳の切石が数点残るのみである。

17. E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14 (第32図・図版26～30)

堆積 I層からIV層が確認された。II層はTP12で焼土が検出されているのみである。III層は中城御殿の遺構の下に堆積する。TP13・14では下層から多くの遺物が包含し、上層は赤土とコーラル層が平坦に填圧を受けている状況が認められる。またTP12ではIII層下より赤土とコーラルが版築状に堆積した層が検出され、TP14 III層上面と同様の工法であることから、III層以前の旧表土とみなしIV層とした。TP14からはTP12 IV層とほぼ同じレベルから瓦溜まりが検出され、さらにその下よりコーラル層が検出されたため、これらもIV層と評価した。

遺構 2つの時期の遺構が認められる。この場所は中城御殿の御内原に当たるが、Ⅱ層の遺構にはTP12より石畳7、TP13より溝3、TP14より基壇5が検出されている。溝3は底にコンクリートが敷かれており、中城御殿が機能する当時からコンクリートが使われていた可能性を窺わせる。またⅣ層の遺構には瓦溜まりが認められる。瓦溜まりはTP14北東際のみで極めて範囲が狭く、瓦が集中的に廃棄された跡とみられる。

18. G-19 TP15 (第33図・図版31)

堆積 Ⅰ層とⅢ層が認められる。Ⅰ層は約70cmに渡って堆積し、東壁以外ではコンクリート壁が検出されている。Ⅲ層はⅠ層でみられたコンクリートがなくなることから中城御殿の造成層とみなした層である。宮古式土器や中国産染付などの陶磁器をはじめ、16点の無文銭が一括して出土している。

遺構 検出されなかった。

19. H-19 TP16 (第33図・図版31)

堆積 Ⅰ層・ⅢもしくはⅣ層・Ⅴ層が認められる。Ⅰ層は森林下に堆積する腐植土層で、戦後のものである。Ⅱ層は検出されていない。Ⅰ層の下の層はⅣ層の傾斜を埋め、整地することを企図した堆積と推察されるが、遺物が包含していないため年代が不明でⅢ層かⅣ層か判然としない。Ⅴ層は他の試掘坑でも確認される粘質の暗褐色土層で無包含層である。

遺構 検出されなかった。

第3節 まとめと考察

1. 遺構の検出状況

以上より、今次調査では中城御殿当時とみられるⅢ層と、それ以前とみられるⅣ層の2つの時期の遺構が認められた。特にⅢ層では広範囲にわたって多岐の遺構が戦中・戦後の破壊を免れ、今日まで土中に残されていた。各層ごとの検出遺構は以下の通りである。

Ⅲ層	溝・・・・・・・・・・9基	Ⅳ層	円形石組遺構・・・・・・・・1基
	石畳・・・・・・・・・・7基		ビット・・・・・・・・・・12口
	基壇・・・・・・・・・・4基		瓦溜まり・・・・・・・・・・1箇所
	舗装路・・・・・・・・・・2基		
	ビット・・・・・・・・・・13口		
	金属製品溜まり・・・・・・1箇所		

2. Ⅳ層の遺構

遺構の年代的位置付け

前年度報告でも中城御殿以前として検出遺構が報告されたが(沖縄県立埋蔵文化財センター2010)、今次では同一の試掘坑から層位的に確認されたことにより、中城御殿以前の遺構が包蔵する

ことが確かであることが理解された。また円形石組遺構は石造技術においても首里城などでみられるものに近く、方形に切られる中城御殿の切石とは差異がみられる。これらの状況から、おそらく近世に比定される遺構と考えられる。

遺構の評価

首里城跡周辺の近世遺跡は、これまで円覚寺跡などで調査成果があるものの、土族の屋敷跡の調査成果は得られてこなかった。中城御殿跡の地は近世では北谷御殿・本部按司屋敷などがあったことが首里古地図にあり（第10図）、明確に土族の屋敷跡が残されることが確認されたことになる。今次調査では極めて断片的な調査のみであるが、近世土族の生活像を復元する端緒となり得る遺構であると理解される。

3. III層の検出遺構（第9図）

溝

全9基の溝が検出され、全て方形の琉球石灰岩切石が用いられていた。今次調査ではI・J・K・L-14、K・L-15と広い範囲で検出され、石畳や舗装面とセット関係であることに加え、残される古写真から道の側溝であることが分かる（沖縄県立博物館1992）。これら側溝は、その構造から蓋の付かない溝（溝1～4）、蓋の付く溝（蓋付溝1～3）、他に遺構の下に造られるもの（暗渠1・2）に細分される。水流はそれぞれ御寝廟のある北から南に流れ、最後は暗渠1に流れるように設計される。また蓋石の設計構造にも機能によって以下の3種が使分けられている（第9図）。

- 1類：長方形の石盤状で長軸の左右に縁石に乗せる凹みが作られるもの。蓋付溝1に用いられる。
- 2類：1類よりは長軸長と短軸長が近い長方形の石盤で、長軸側に片側のみ縁石に乗せる凹みが作られる。蓋付溝2・3に用いられる。
- 3類：ほぼ正方形の石盤で、左右に縁石に載せる凹みが作られる。また蓋を持ち上げられるように、上下が台形状に切られている。蓋付溝2の直角に曲がる箇所と溝2の直角に曲がる箇所に用いられている。

このように蓋石も側溝の機能や場所に合わせて数種のもが製作されており、中城御殿の石造遺構の多様性のみならず、当時の石造技術を窺える資料でもある。



第9図 中蓋付溝の構造模式図

石畳

全7基が検出され、全て多角形の琉球石灰岩切石が用いられる。遺される古写真から、中城御殿内の石畳道であることが確認される。左右どちらかに蓋の付かない溝が側溝として機能し、石畳とセット関係となることが理解される。

基壇

方形で他の遺構より大きい切石が用いられるもの（基壇1・2）と、幅の狭い切石によるもの（基壇3・4）とに分けられ、基壇1・2と基壇3・4は同一の遺構であるとみられる。古写真より建物・漆喰壁の基壇であることが理解される（沖縄県立博物館1992）。

舗装面

2箇所で検出された。細かく砕いた琉球石灰岩を敷き、填圧して舗装したもので、首里城跡などで同様の舗装面が確認されている。古写真にも記録されており、これによると中城御殿内縁部を一周する道であることが分かる。

ビット群

L-13にのみ認められ、計13口が検出されている。検出のみで覆土掘削は行っていないが、ビット同士の位置関係から植栽痕とみられる。

金属製品溜まり

K-15のグリッド交点付近で検出され、土坑状の穴から銅製の香炉や花瓶などがまとまって出土している。この穴からは他の1層と同様に瓦片なども多く出土していることから、意図的な掘り込みではなく爆弾などによって形成された穴に、周囲に散らばる破損品を一括して廃棄したものと考えられる。

遺構と建物配置（第12図）

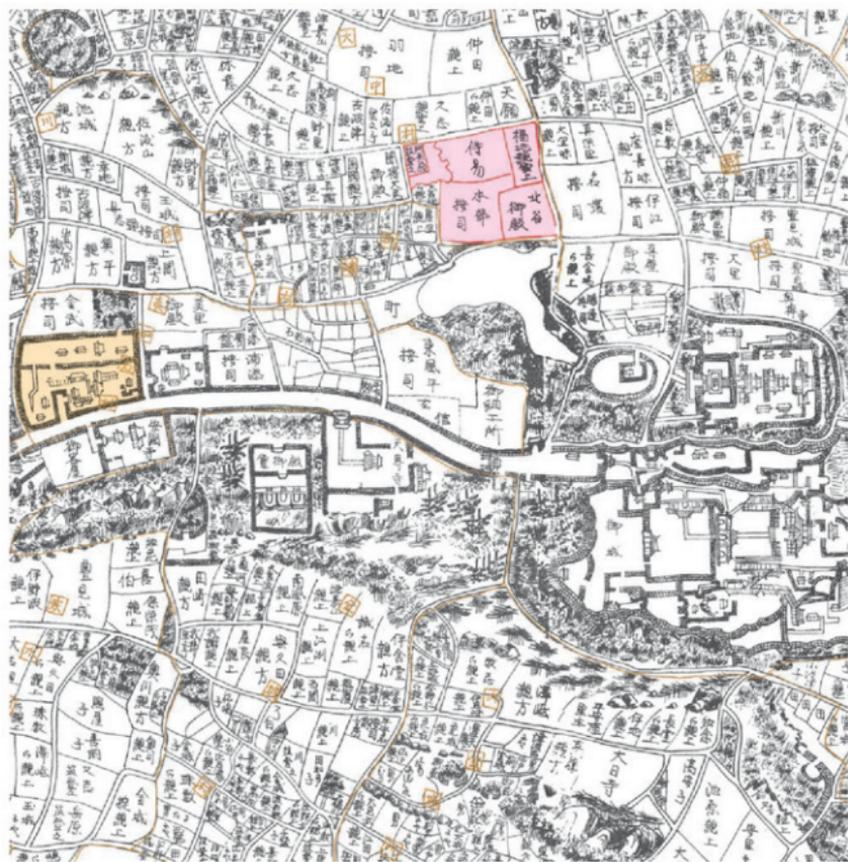
中城御殿の遺構は、写真記録が残されているという近代遺跡ならではの特性により、かなり精度の高い機能復元が可能である。そこで、当時の航空写真と聞き取り調査から作成した旧中城御殿の間取り図（以後「間取り図」とする）を参考に、今次調査において検出された主要な遺構の機能について考察を加えたい。

石畳は概ね建物間に位置し、古写真からも建物間に石畳道が記録されていることから、検出された石畳が古写真にも写されている石畳道であることが容易に理解される。また「間取り図」からは、石畳1が新御殿付近の門から御蔵・高御蔵間、中城大親屋敷を通り、同じく古写真から建物外縁部の道であることが確実視される舗装面1を通して脇門へ至る石畳道であることが推定される。また溝1が石畳1の側溝であることも古写真に記録される石畳と側溝の関係性をみ限り明らかである。石畳2・舗装面2は、前者が御蔵と取納座を結ぶ石畳道、後者は全てが残されていないものの石畳2から続き取納座・中城大親屋敷を抜けて石畳1に合流する通路であったことが窺える。蓋付溝1は石畳1と舗装面1の、蓋付溝2は舗装面2と御蔵の通用を阻害しないために蓋付溝となっていたとみるのが妥当であろう。また同様に、蓋付溝3は取納座と御蔵の通用を阻害しないためと考えられる。以上は「間取り図」と検出遺構の位置関係が比較的判然としたことによる解釈であったが、対して石畳4は御蔵

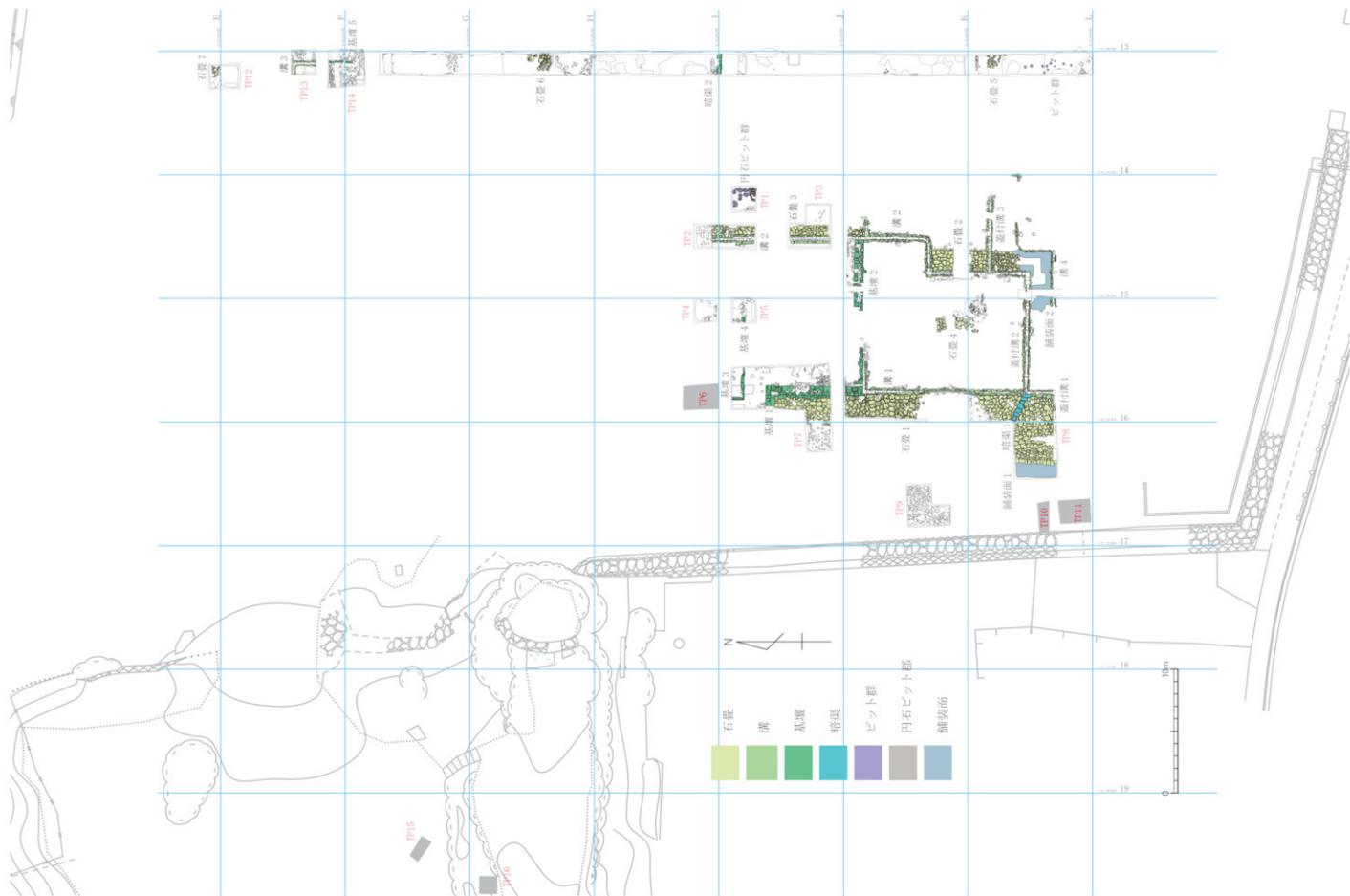
の中心部に位置しており「間取り図」との整合性が掴めない。実際は御蔵の中央部に石畳道が敷設されていたのだろうか。

一方で2種類の基壇もそれぞれ「間取り図」との照合によって概ねその機能を把握することができた。基壇1・2は蔵区画と大御庭や御寝所・新御殿といった住居区画を区切る漆喰壁の基壇であることが推定される。基壇3は「間取り図」との整合性が判然としなかったために機能の推定には至らなかったが、これも門F付近の中庭と住居区画とを仕切る壁の基壇と想定される。

以上のように、今次調査において元位置を留めた礎石や礎石抜け穴、柱穴は全く検出されず、確定的な建物配置を検討する遺構は得られなかった。しかし検出された遺構からは御蔵周辺の建物配置を想定することが可能である。また溝内では他の遺跡ではみられない宝物クラスの遺物が多数出土していることから溝内遺物は御蔵内の収蔵品であった可能性が高く、いずれも近代の琉球王家を理解する上で極めて重要な遺構であると考えられる。



第10図 『首里古地図』にみる近世中城御殿跡の土地利用（沖縄風土記刊行会 1970）



第11図 中城御殿跡 平成20・21年度発掘状況

第2表 出土地別遺物集計表(2)

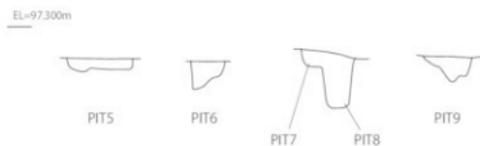
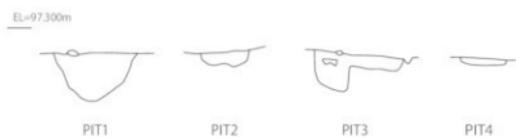
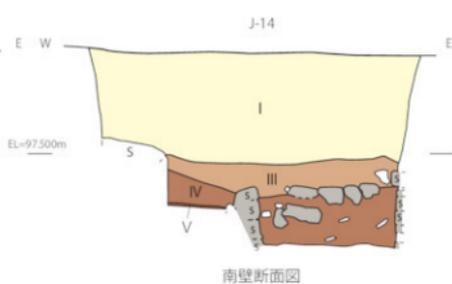
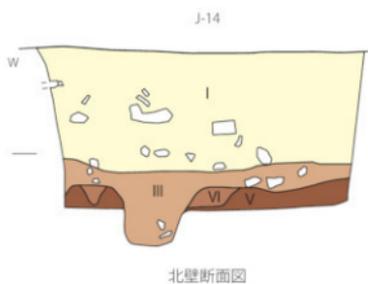
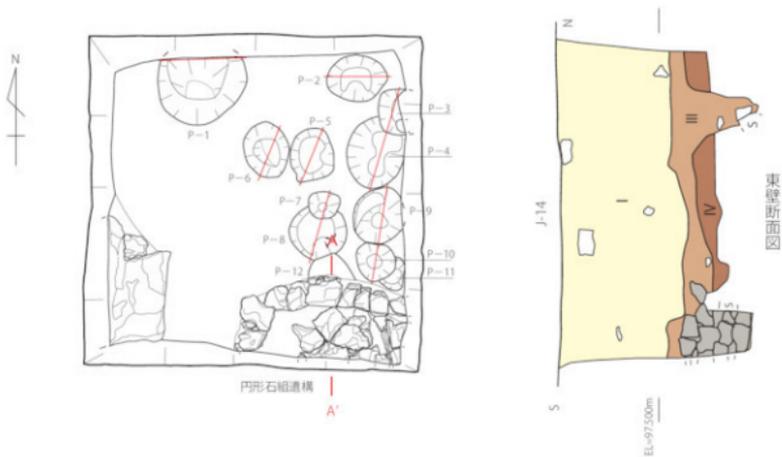
遺物・遺構	F14		F15		F16		F17		F18		F19		F20		F21		F22		F23		F24		F25		F26		F27		F28		F29		F30		F31		F32		F33		F34		F35		F36		F37		F38		F39		F40		F41		F42		F43		F44		F45		F46		F47		F48		F49		F50		F51		F52		F53		F54		F55		F56		F57		F58		F59		F60		F61		F62		F63		F64		F65		F66		F67		F68		F69		F70		F71		F72		F73		F74		F75		F76		F77		F78		F79		F80		F81		F82		F83		F84		F85		F86		F87		F88		F89		F90		F91		F92		F93		F94		F95		F96		F97		F98		F99		F100		F101		F102		F103		F104		F105		F106		F107		F108		F109		F110		F111		F112		F113		F114		F115		F116		F117		F118		F119		F120		F121		F122		F123		F124		F125		F126		F127		F128		F129		F130		F131		F132		F133		F134		F135		F136		F137		F138		F139		F140		F141		F142		F143		F144		F145		F146		F147		F148		F149		F150		F151		F152		F153		F154		F155		F156		F157		F158		F159		F160		F161		F162		F163		F164		F165		F166		F167		F168		F169		F170		F171		F172		F173		F174		F175		F176		F177		F178		F179		F180		F181		F182		F183		F184		F185		F186		F187		F188		F189		F190		F191		F192		F193		F194		F195		F196		F197		F198		F199		F200		F201		F202		F203		F204		F205		F206		F207		F208		F209		F210		F211		F212		F213		F214		F215		F216		F217		F218		F219		F220		F221		F222		F223		F224		F225		F226		F227		F228		F229		F230		F231		F232		F233		F234		F235		F236		F237		F238		F239		F240		F241		F242		F243		F244		F245		F246		F247		F248		F249		F250		F251		F252		F253		F254		F255		F256		F257		F258		F259		F260		F261		F262		F263		F264		F265		F266		F267		F268		F269		F270		F271		F272		F273		F274		F275		F276		F277		F278		F279		F280		F281		F282		F283		F284		F285		F286		F287		F288		F289		F290		F291		F292		F293		F294		F295		F296		F297		F298		F299		F300		F301		F302		F303		F304		F305		F306		F307		F308		F309		F310		F311		F312		F313		F314		F315		F316		F317		F318		F319		F320		F321		F322		F323		F324		F325		F326		F327		F328		F329		F330		F331		F332		F333		F334		F335		F336		F337		F338		F339		F340		F341		F342		F343		F344		F345		F346		F347		F348		F349		F350		F351		F352		F353		F354		F355		F356		F357		F358		F359		F360		F361		F362		F363		F364		F365		F366		F367		F368		F369		F370		F371		F372		F373		F374		F375		F376		F377		F378		F379		F380		F381		F382		F383		F384		F385		F386		F387		F388		F389		F390		F391		F392		F393		F394		F395		F396		F397		F398		F399		F400		F401		F402		F403		F404		F405		F406		F407		F408		F409		F410		F411		F412		F413		F414		F415		F416		F417		F418		F419		F420		F421		F422		F423		F424		F425		F426		F427		F428		F429		F430		F431		F432		F433		F434		F435		F436		F437		F438		F439		F440		F441		F442		F443		F444		F445		F446		F447		F448		F449		F450		F451		F452		F453		F454		F455		F456		F457		F458		F459		F460		F461		F462		F463		F464		F465		F466		F467		F468		F469		F470		F471		F472		F473		F474		F475		F476		F477		F478		F479		F480		F481		F482		F483		F484		F485		F486		F487		F488		F489		F490		F491		F492		F493		F494		F495		F496		F497		F498		F499		F500		F501		F502		F503		F504		F505		F506		F507		F508		F509		F510		F511		F512		F513		F514		F515		F516		F517		F518		F519		F520		F521		F522		F523		F524		F525		F526		F527		F528		F529		F530		F531		F532		F533		F534		F535		F536		F537		F538		F539		F540		F541		F542		F543		F544		F545		F546		F547		F548		F549		F550		F551		F552		F553		F554		F555		F556		F557		F558		F559		F560		F561		F562		F563		F564		F565		F566		F567		F568		F569		F570		F571		F572		F573		F574		F575		F576		F577		F578		F579		F580		F581		F582		F583		F584		F585		F586		F587		F588		F589		F590		F591		F592		F593		F594		F595		F596		F597		F598		F599		F600		F601		F602		F603		F604		F605		F606		F607		F608		F609		F610		F611		F612		F613		F614		F615		F616		F617		F618		F619		F620		F621		F622		F623		F624		F625		F626		F627		F628		F629		F630		F631		F632		F633		F634		F635		F636		F637		F638		F639		F640		F641		F642		F643		F644		F645		F646		F647		F648		F649		F650		F651		F652		F653		F654		F655		F656		F657		F658		F659		F660		F661		F662		F663		F664		F665		F666		F667		F668		F669		F670		F671		F672		F673		F674		F675		F676		F677		F678		F679		F680		F681		F682		F683		F684		F685		F686		F687		F688		F689		F690		F691		F692		F693		F694		F695		F696		F697		F698		F699		F700		F701		F702		F703		F704		F705		F706		F707		F708		F709		F710		F711		F712		F713		F714		F715		F716		F717		F718		F719		F720		F721		F722		F723		F724		F725		F726		F727		F728		F729		F730		F731		F732		F733		F734		F735		F736		F737		F738		F739		F740		F741		F742		F743		F744		F745		F746		F747		F748		F749		F750		F751		F752		F753		F754		F755		F756		F757		F758		F759		F760		F761		F762		F763		F764		F765		F766		F767		F768		F769		F770		F771		F772		F773		F774		F775		F776		F777		F778		F779		F780		F781		F782		F783		F784		F785		F786		F787		F788		F789		F790		F791		F792		F793		F794		F795		F796		F797		F798		F799		F800		F801		F802		F803		F804		F805		F806		F807		F808		F809		F810		F811		F812		F813		F814		F815		F816		F817		F818		F819		F820		F821		F822		F823		F824		F825		F826		F827		F828		F829		F830		F831		F832		F833		F834		F835		F836		F837		F838		F839		F840		F841		F842		F843		F844		F845		F846		F847		F848		F849		F850		F851		F852		F853		F854		F855		F856		F857		F858		F859		F860		F861		F862		F863		F864		F865		F866		F867		F868		F869		F870		F871		F872		F873		F874		F875		F876		F877		F878		F879		F880		F881		F882		F883		F884		F885		F886		F887		F888		F889		F890		F891		F892		F893		F894		F895		F896		F897		F898		F899		F900		F901		F902		F903		F904		F905		F906		F907		F908		F909		F910		F911		F912		F913		F914		F915		F916		F917		F918		F919		F920		F921		F922		F923		F924		F925		F926		F927		F928		F929		F930		F931		F932		F933		F934		F935		F936		F937		F938		F939		F940		F941		F942		F943		F944		F945		F946		F947		F948		F949		F950		F951		F952		F953		F954		F955		F956		F957		F958		F959		F960		F961		F962		F963		F964	
-------	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	-----	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--	------	--



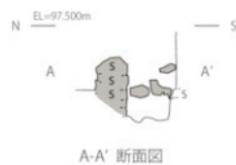
図版3 平成20・21年度 調査区遺構検出状況



第12図 主要検出遺構と屋根伏せ位置



ビット断面図



第 13 図 J-14 TP1 円形石組遺構、ビット群



J-14 TP 1 遺構検出状況及び北壁断面



円形石組遺構 検出状況



円形石組遺構 半裁断面

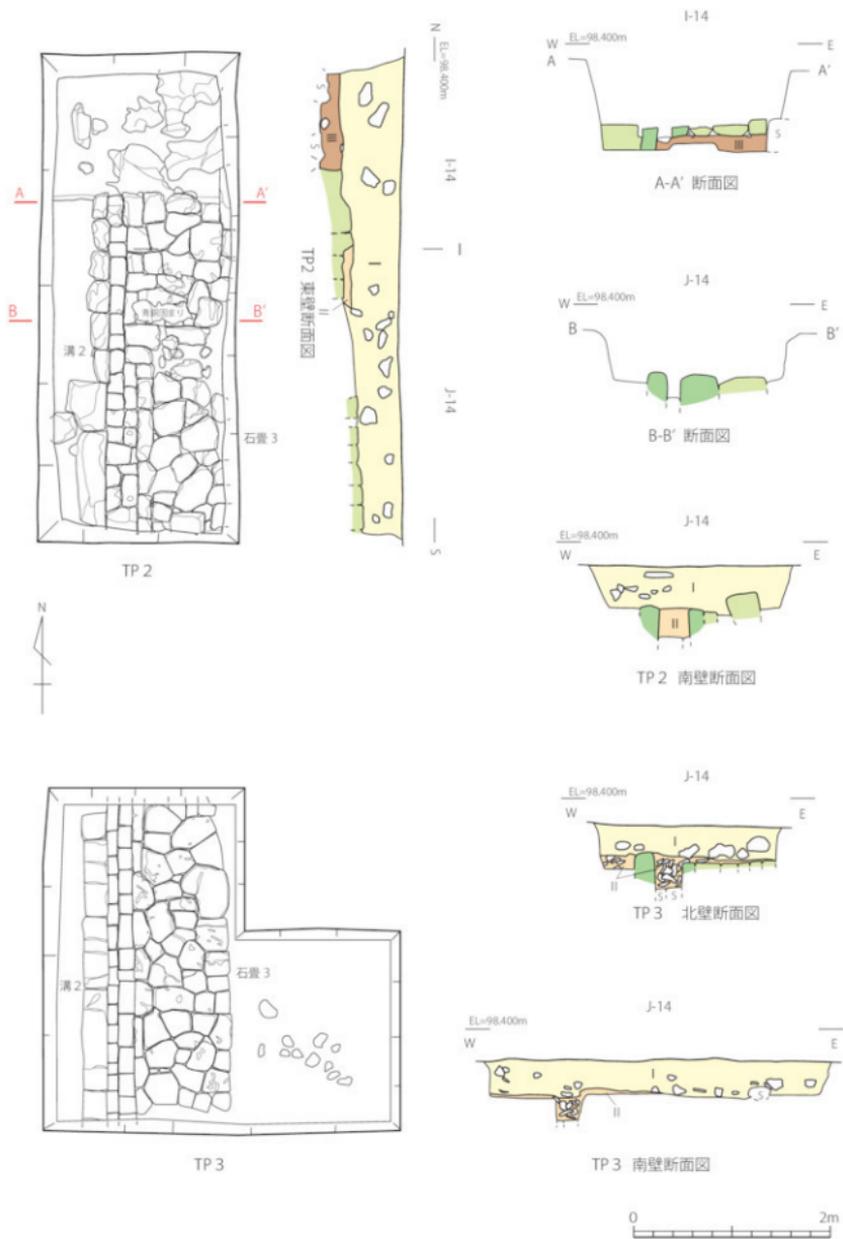


円形石組遺構 完掘状況

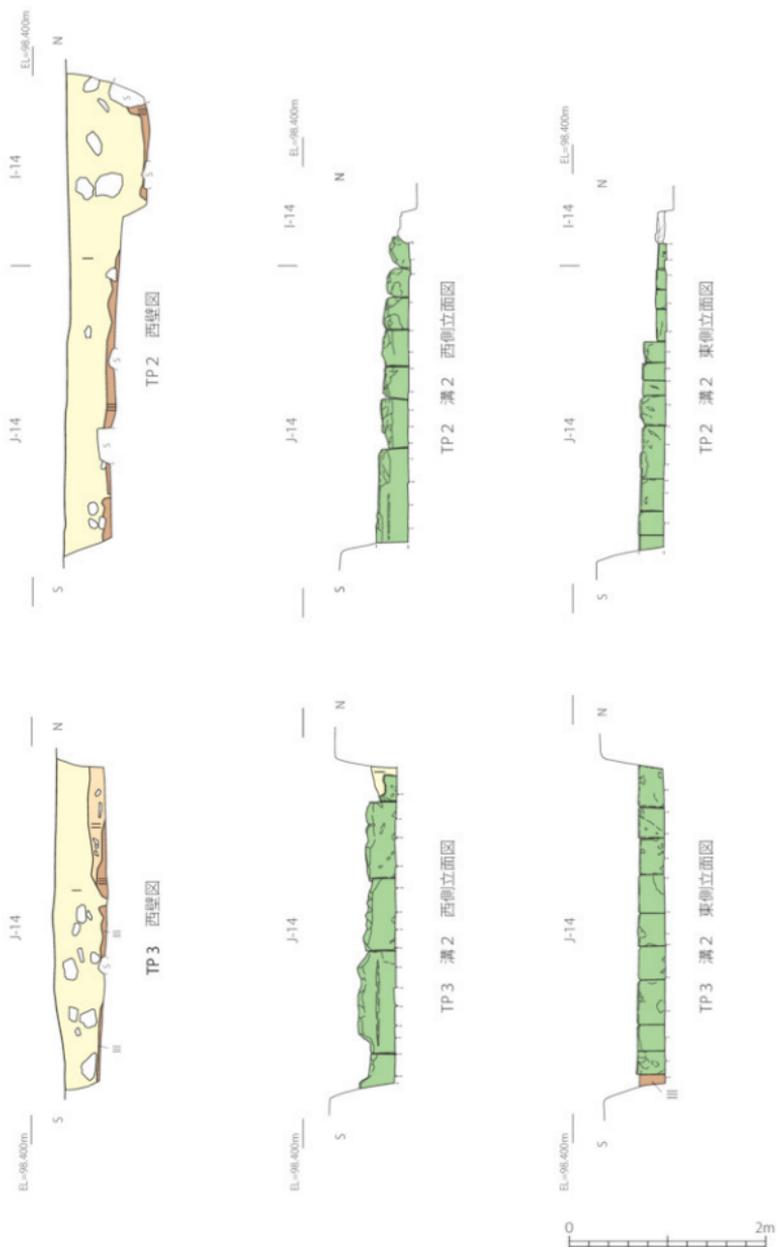


ビット群 半裁断面

図版4 J-14 TP 1



第14图 I·J-14 TP2、J-14 TP3 溝2、石疊3 ①



第15图 1·J-14 TP2、J-14 TP3 溝2、石疊3②



I・J-14 TP 2 J-14 TP 3 遺構検出状況（北から）



TP 2 東壁（北側）



TP 2 東壁（中央）



TP 2 東壁（南側）



溝2 立面（北から）



TP 2 北壁



TP 2 南壁



TP 3 南壁



TP 3 西壁 (南侧)



TP 3 西壁 (中央)



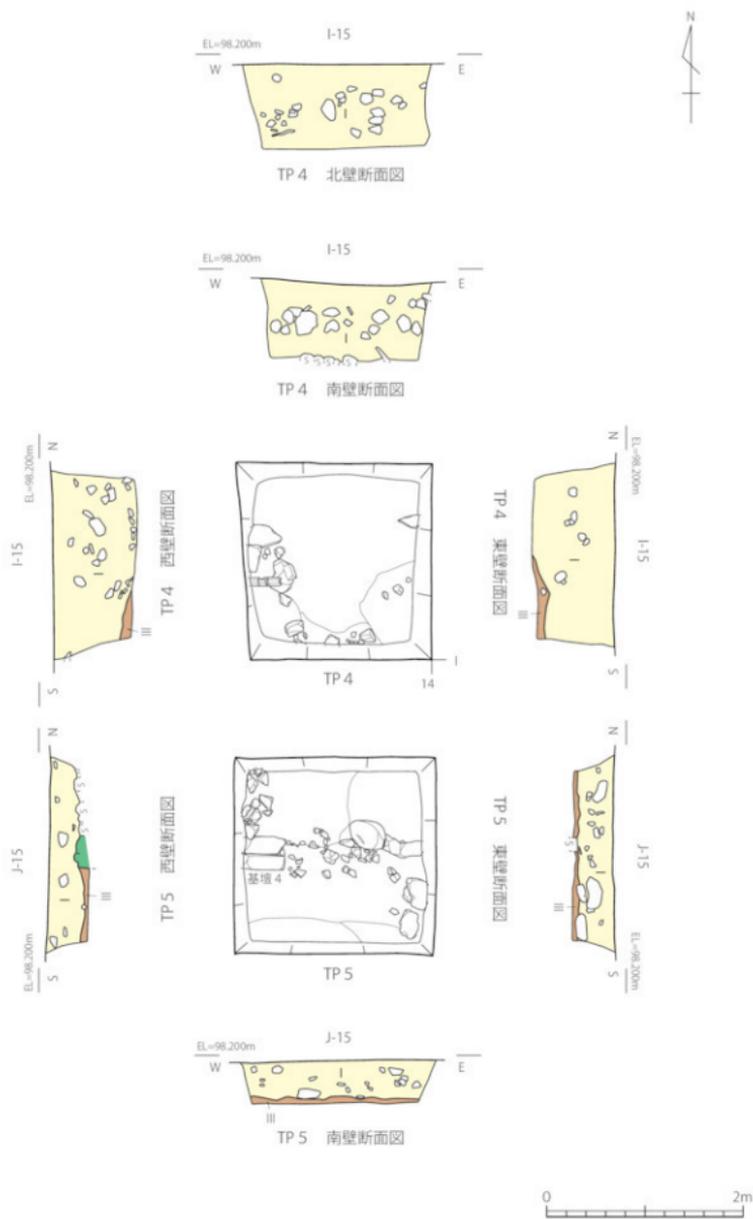
TP 3 西壁 (北侧)



TP 3 東壁 (北侧)



TP 3 北壁



第16图 I-15 TP 4、J-15 TP 5 基址4



I-15 TP 4、J-15 TP 5 遺構検出状況（北から）



TP 4 北壁



TP 4 東壁



TP 4 西壁



TP 5 北壁



TP 5 東壁

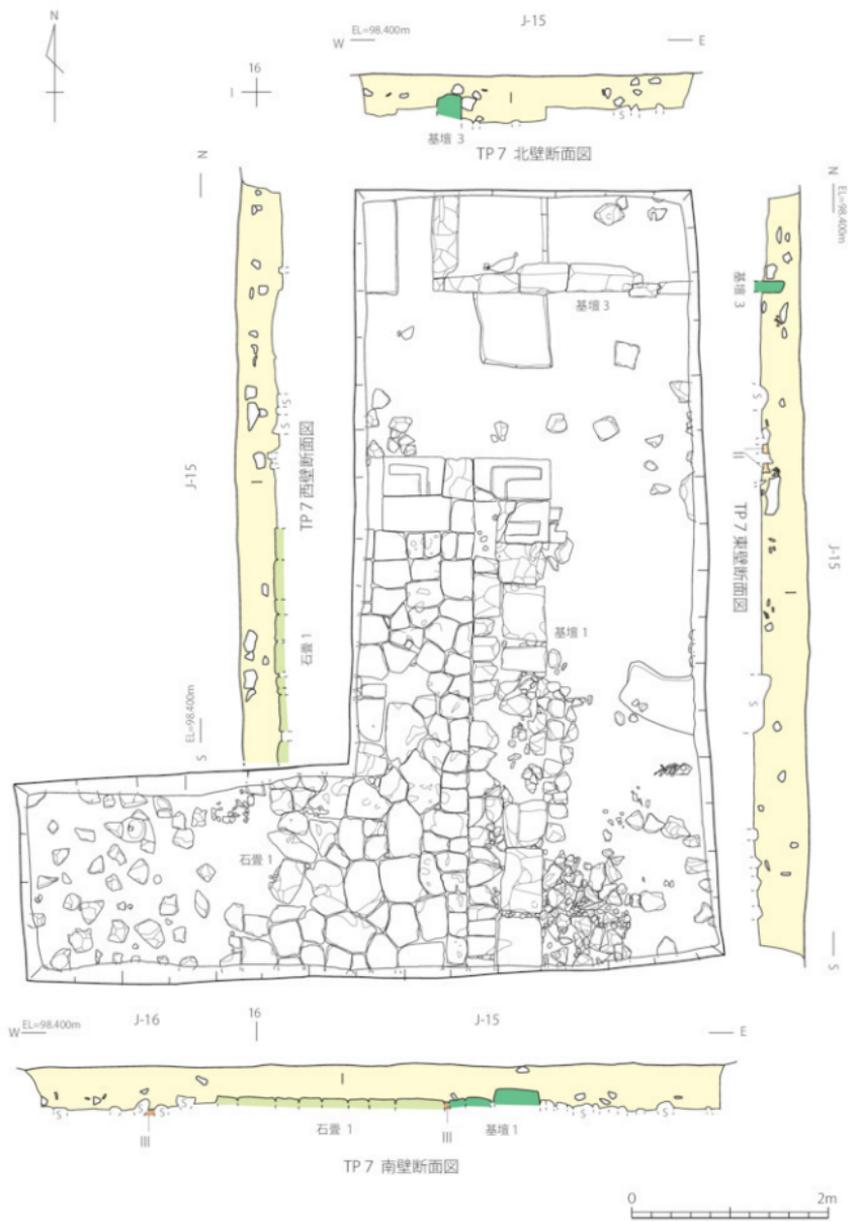


TP 5 西壁



TP 5 南壁

図版7 I-15 TP 4、J-15 TP 5



第 17 图 J-15·16 TP 7 基壇 1·3、石置 1



J-15・16 TP 7 遺構検出状況（北から）



基壇1・3 石畳1（北から）

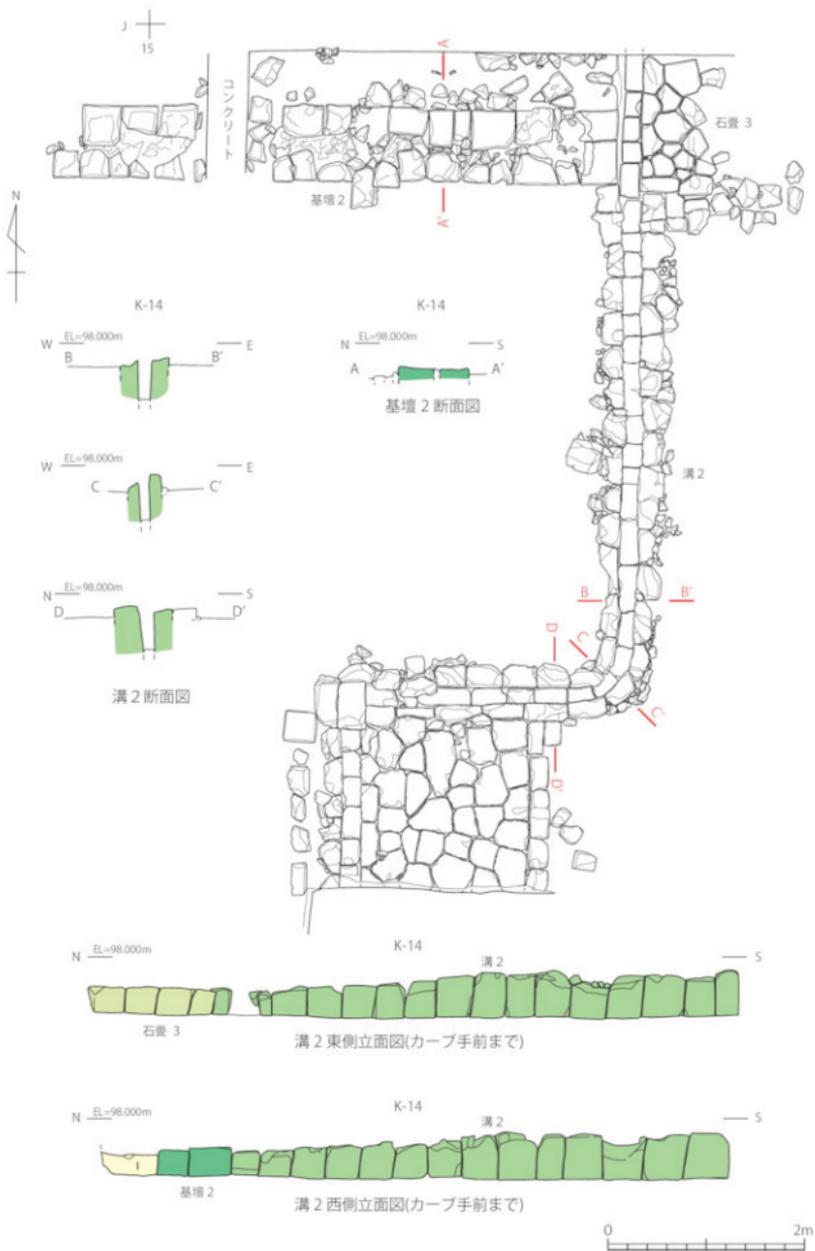
図版8 J-15・16 TP7



基壇1（東から）



基壇1直上 肥前産染付皿出土状況



第 18 図 K-14 溝 2、石畳 3、基壇 2



K-14 遺構検出状況（北から）



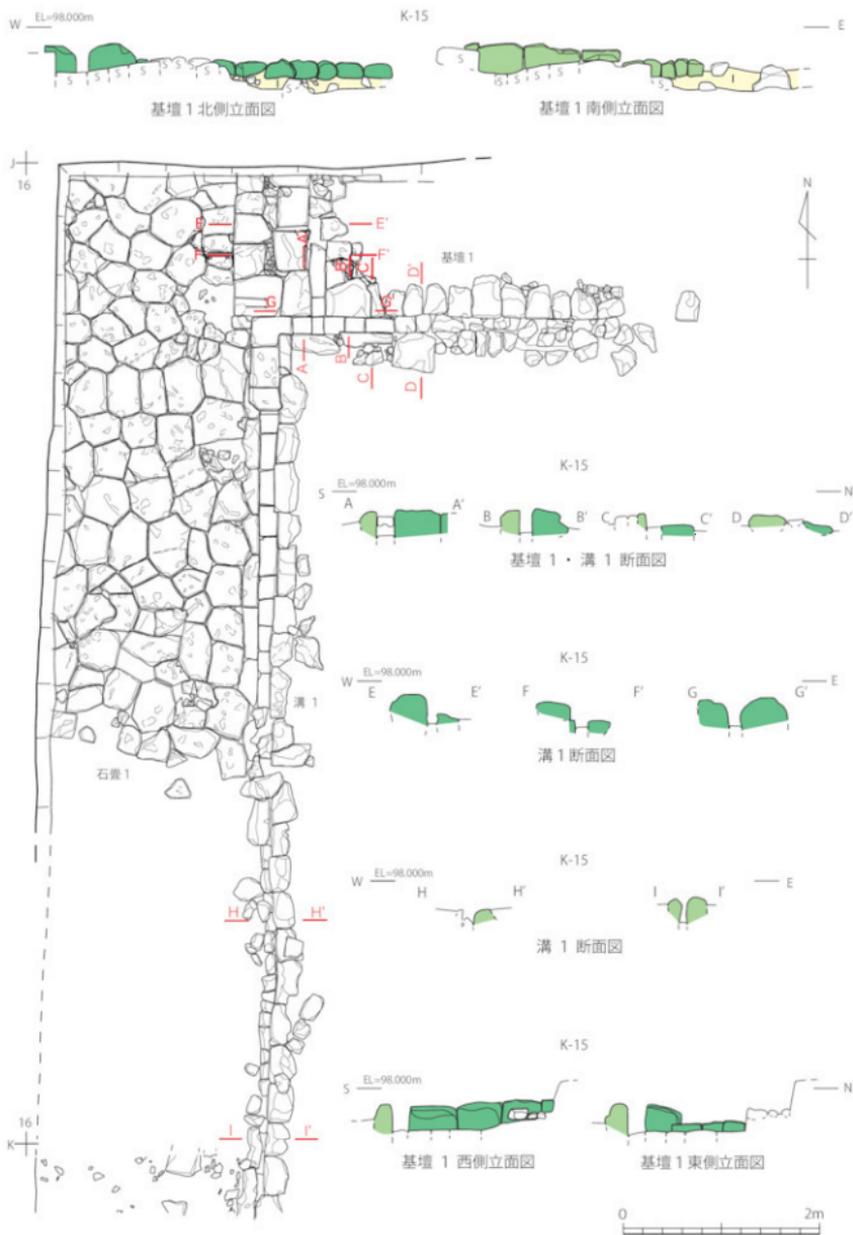
溝2・基壇2断面（南から）



溝2内 ガラス玉一括出土状況
図版9 K-14



溝2（北から）



第19图 K-15 溝1、基壇1、石畳1



K-15 遺構検出状況（北から）



K-15 東壁



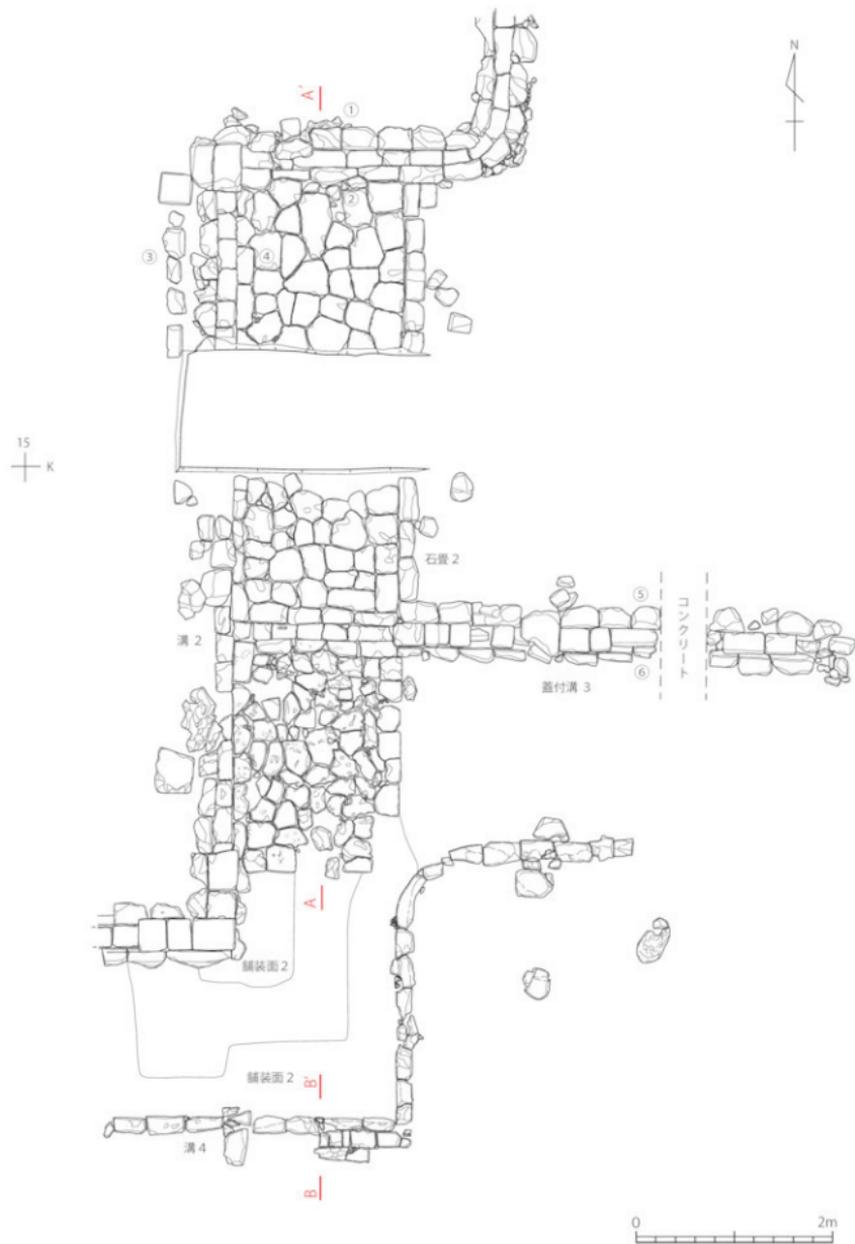
K-15 北壁断面（溝1部分）



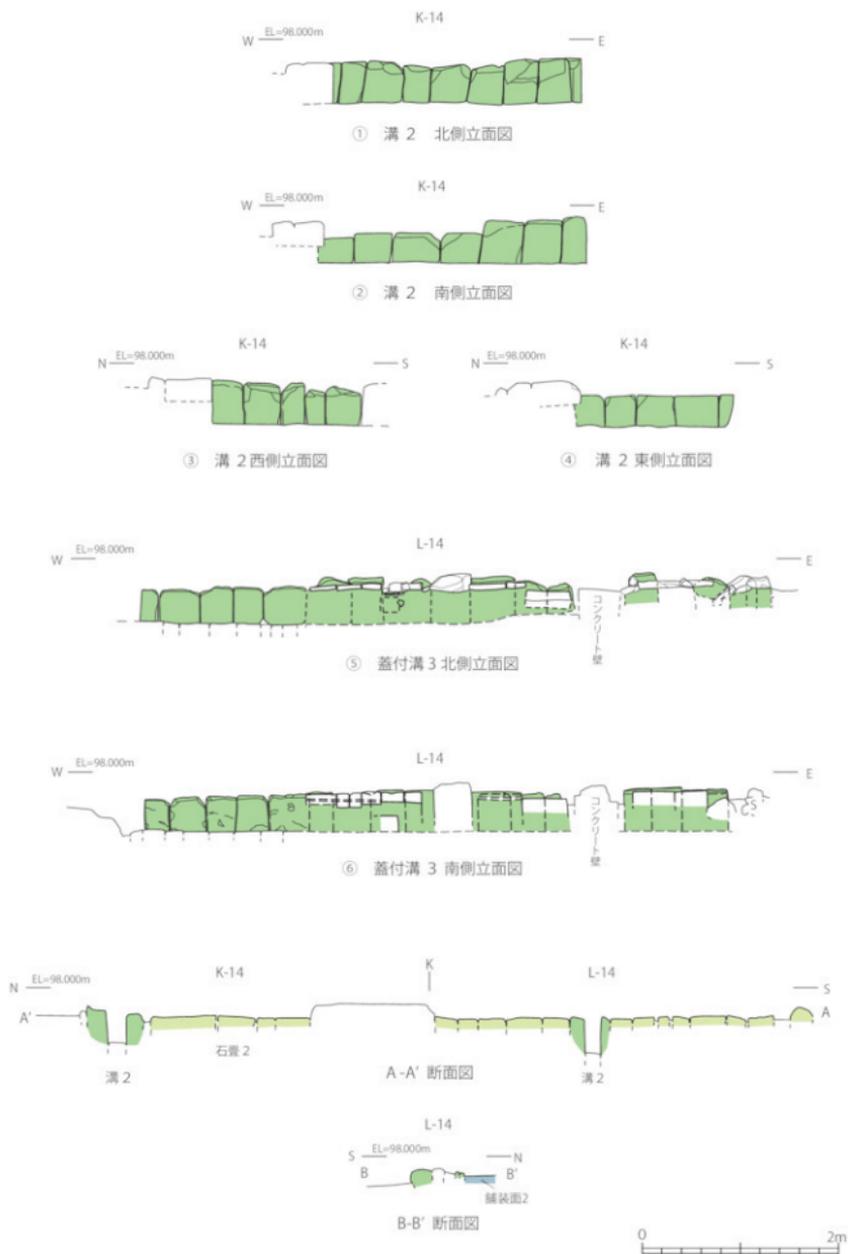
K-15 南壁
図版 10 K-15



K-15 溝1 北壁断面部分



第20図 K・L-14 溝2・4、蓋付溝3、石畳2、舗装面2



第21図 K・L-14 溝2・4、蓋付溝3、石畳2、舗装面2



L-14 遺構検出状況（北から）



L-14 北壁



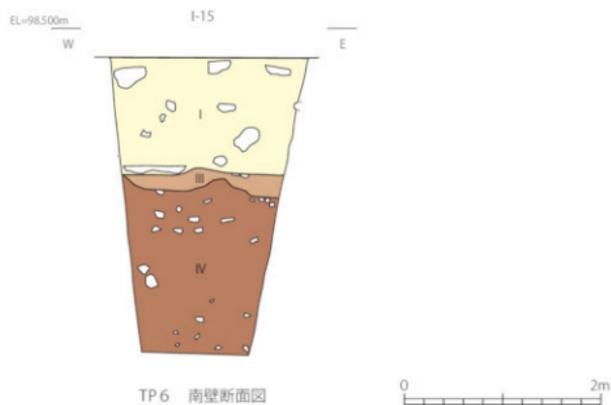
蓋付溝 3（北東から）



L-14 西壁



蓋付溝 3（西から）



第22图 I-15 TP 6



TP 6 南壁

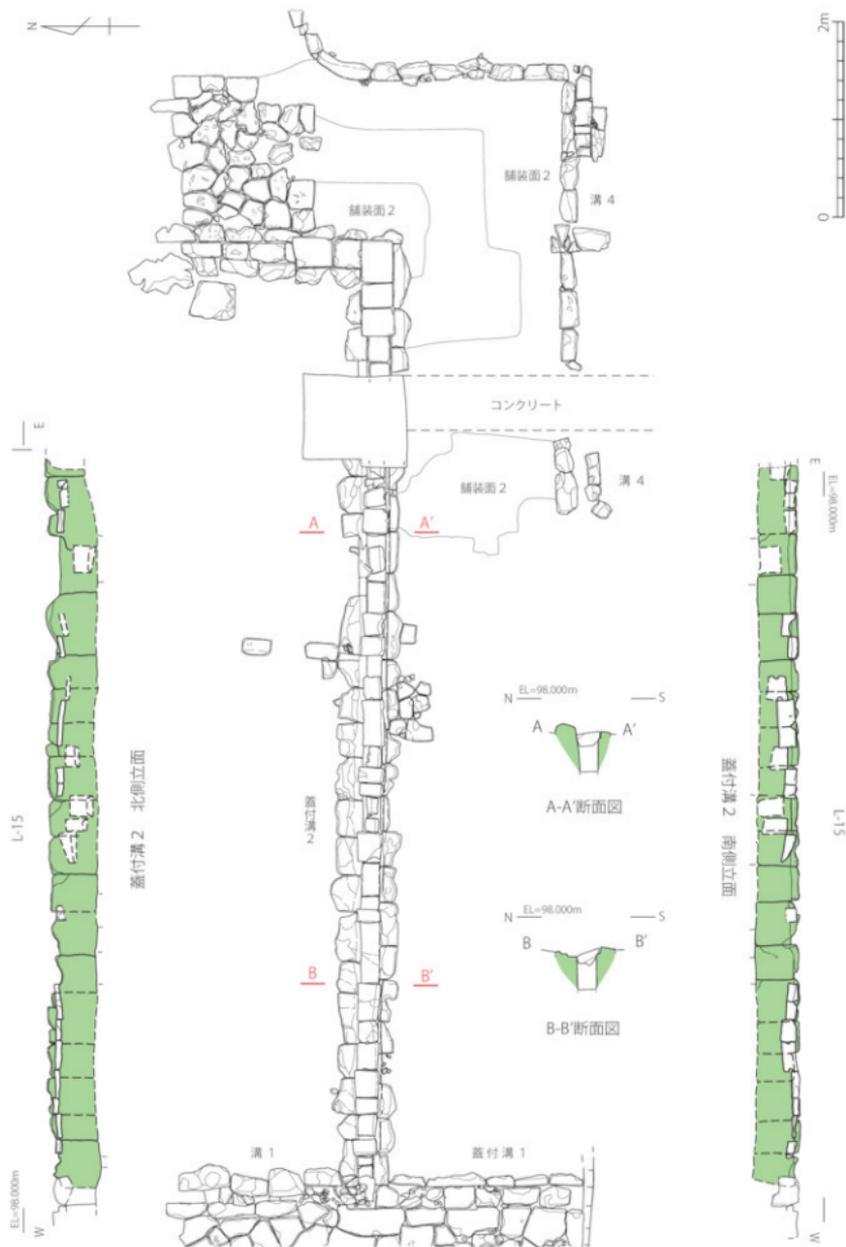


TP 6 IV層 中国産褐釉陶器壺出土状況



TP 6 IV層 中国産褐釉陶器壺出土状況

图版 12 I-15 TP 6



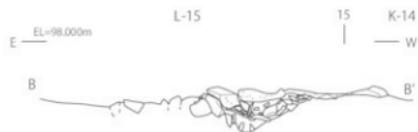
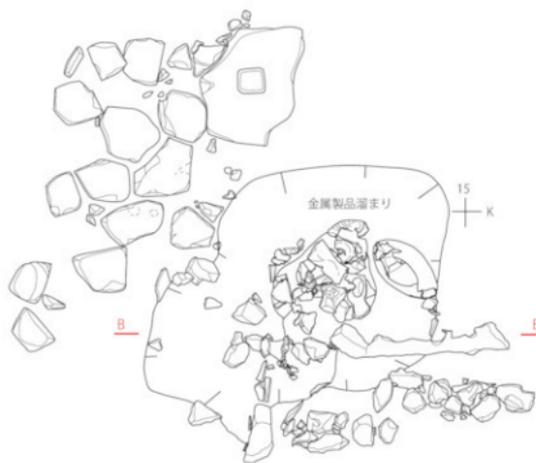
第23図 L-15 溝1・4、蓋付溝1・2、舗装面2



石畳 4 断面



石畳 4



金属製品溜まり断面



第24図 K-15、L-14・15 石畳4、金属製品溜まり



L-15 遺構検出状況（北から）



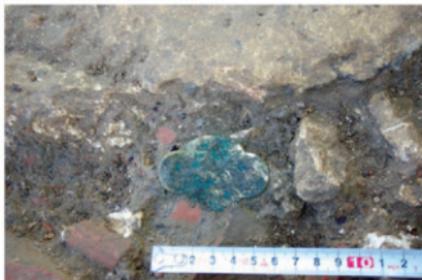
L-15 北壁



溝1 石畳1（北から）



L-15 東壁



石畳1 金属製品出土状況



L-15 蓋付き溝 2 (東から)



金属製品溜まり検出作業状況



金属製品溜まり検出状況



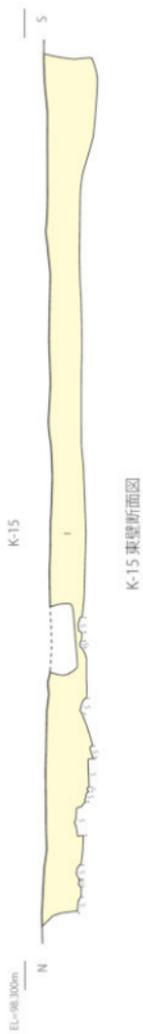
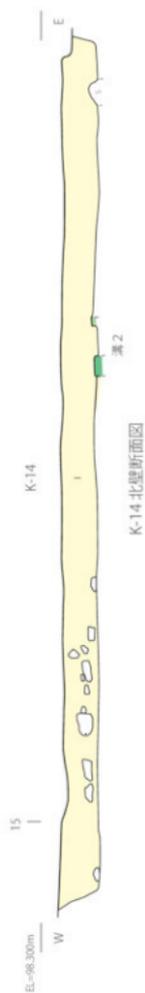
L-15 遺物出土状況



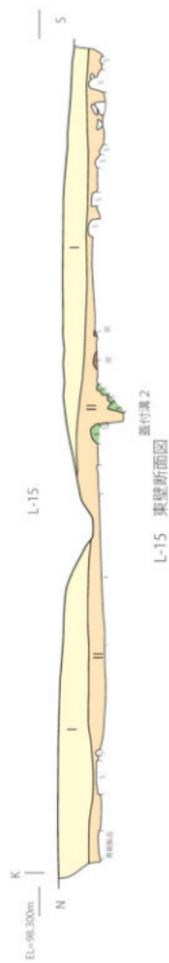
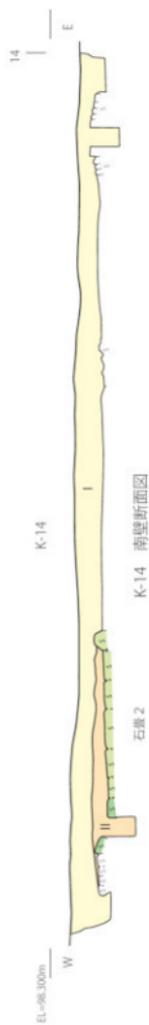
蓋付溝 2 断面① (東から)



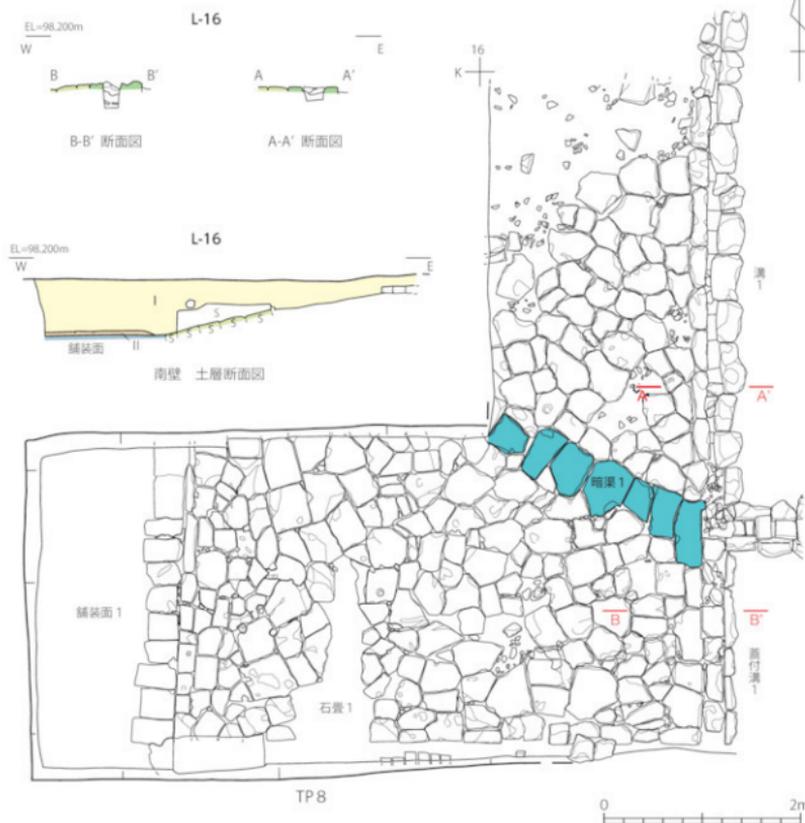
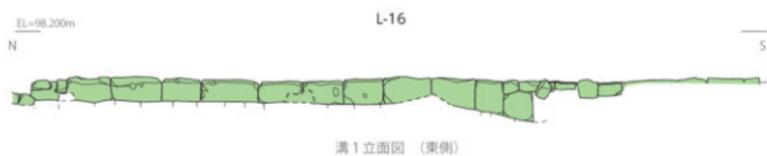
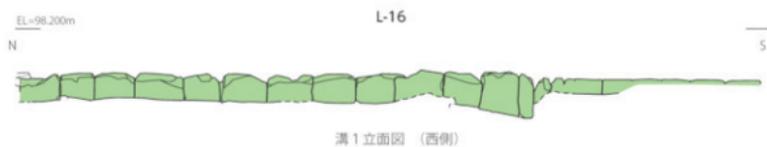
蓋付溝 2 断面② (西から)



第25図 K-14・15北壁、K-15東壁



第26圖 K-14・15 南壁、L-15 東壁



第27図 L-16 TP8 石畳1、蓋付溝1、暗渠1



L-16 TP 8 遺構検出状況（西から）



L-16 石畳1傾斜部・舗装面1検出状況（北から）



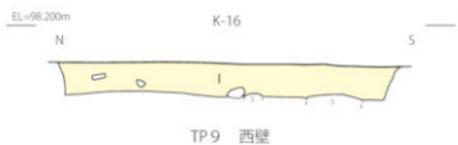
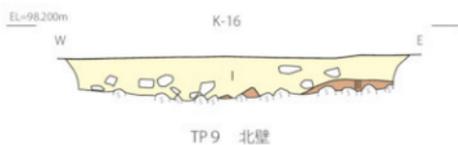
L-16 ベルト断面（西から）



L-16 炭化物出土状況（東から）



L-16 暗渠1（東から）



第28図 K-16 TP9



TP 9 遠景 (西から)



TP 9 北壁

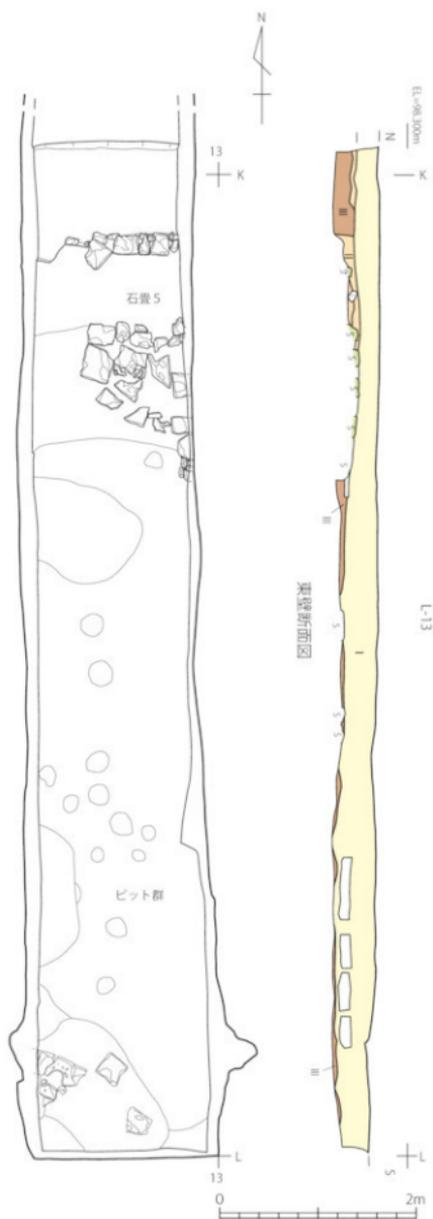


TP 9 完掘状況 (南から)



TP 9 西壁

図版 16 K-16 TP 9



図版 17 L-13 石畳5、ピット群①

第29図 L-13 石畳5、ピット群①



L-13 ビット群南側



L-13 ビット群北側
図版 18 L-13 石畳5、ビット群 ②



L-13 石畳5南側



L-13 石畳5北側

図版19 L-13 石畳5、ピット群③



图版 20 I·J-13 暗渠 2
第 30 图 I·J-13 暗渠 2





J-13 サブトレ付近



J-13 サブトレ東壁
図版 21 1・J-13 ①



I-13 暗渠付近



I-13 暗渠付近 (北側)

図版 22 I・J-13 ©



图版 23 H・I-13 石畳6

第31图 H・I-13 石畳6





I-13 北側



H-13 石疊 6

図版 24 H・I-13 ①

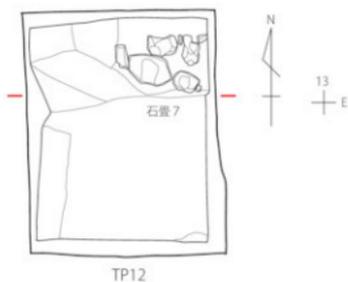


H-13 石畳 (南側)

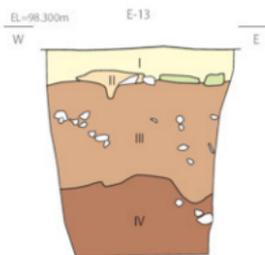


遺構検出作業風景

図版 25 H・I-13 ②



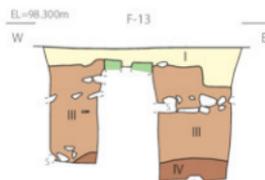
TP12



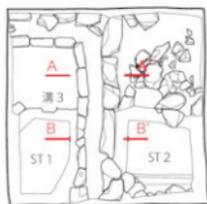
TP12 北壁断面図



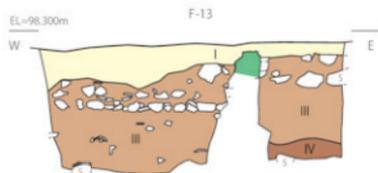
溝3断面



TP13 南壁断面図

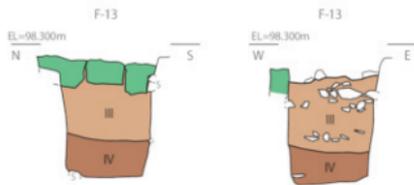


TP13



TP14 北壁断面図

TP14



ST3 西壁断面図

ST3 南壁断面図



第32図 E・F-13 TP12、F-13 TP13、F・G-13 TP14 石叢7、溝3、基壇5



F・G-13 TP13・14 遺構検出状況（北から）



TP14 ST 2 北壁



TP14 III層 管（ジューファー）出土状況



TP14 ST 2 II層 遺物出土状況



TP14 ST 2 III層 遺物出土状況



TP14 IV層 瓦溜まり検出時（東から）



TP14 IV層 瓦溜まり完掘時（東から）

図版 27 E・F-13 TP12・13・14 ②



TP14 サブトレ 2 III層 遺物出土状況



TP12 IV層 遺物出土状況 (北西から)

図版 28 E・F-13 TP12・13・14 ③



TP12 北壁



TP12 東壁

図版 29 E・F-13 TP12・13・14 ④



TP13 溝4 完掘状況 (南から)

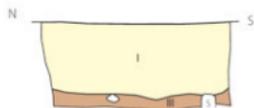


TP13 溝4 断面

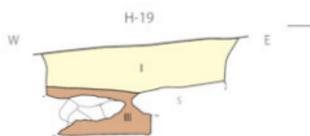
図版30 E・F-13TP12・13・14 ⑤

EL=101.500m

G-19



TP15 東壁断面図



TP16 北壁断面図



第33図 G・H-19 TP15・16



TP15 遺物出土状況（東から）



TP15・16 遠景（北東から）



TP16 完掘状況（東から）

図版31 G・H-16 TP15・16

第5章 遺物（金属製品）

本章での報告対象の金属製品は1835点であり、出土した殆どが破片資料であることと、経年劣化による破損が見られることから、用途不明のものが大半を占めている。これらの中でも本章では原形が窺えるものを優先的に報告する。

銅製品は比較的、原形を留めているものが見られる一方で鉄製品は錆化が進行しているものも多く、釘、鏝以外に原形を留めているものはほとんど確認することができなかった。とくに銅製品では飾り金具類で鍍金と細やかな彫金が施されるものを多数見ることができ、かなり大型の製品も10点以上見られた。これらの製品は主に首里城跡や円覚寺跡等で出土している遺物に共通点を見出せることから、中城御殿が首里王府と密接に関連する施設であったことを示す重要な遺物であると言える。

また、真鍮製の飾り金具や把手が確認されていることも注目される。真鍮製品は主に煙管の雁首や吸口、簪にほぼ限られていたが、中城御殿からはそれ以外の製品で真鍮製が確認されたことは、やはり他の遺跡とは性格が異なる遺跡であるといえる。

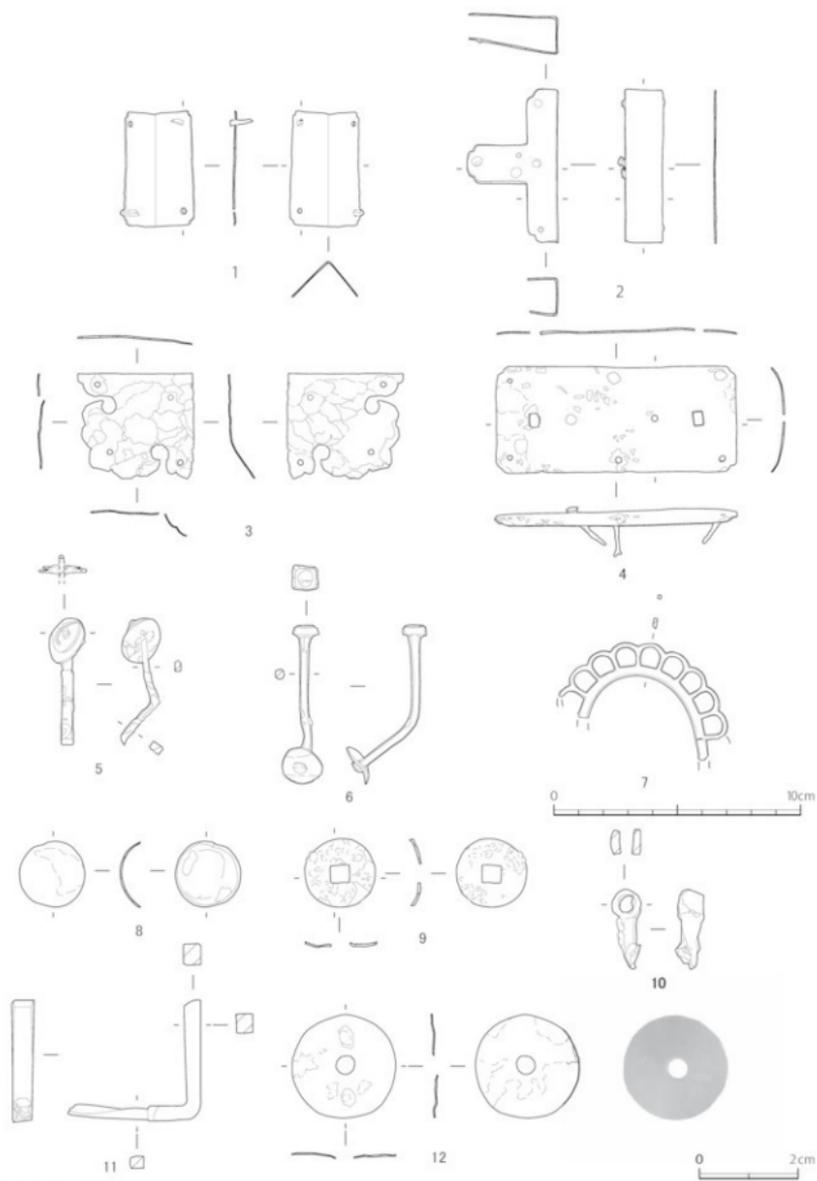
金属製品はそれぞれ用途ごとに銅製品は建具、飾り金具、器物、宗教具・茶道具、煙管、簪に、鉄製品は釘、鏝に分類し、1点のみを報告するものに関してはまとめて、その他に分類した。また、用途不明であるが、文様が施される破片資料は全て飾り金具として報告する。

第1節 建具

緑金具や座金具、軸釘、吊金具、襖の取っ手等、建物に関係すると思われる金具をここで対象とした。また、調度品に付属すると思われる緑金具は第8節でまとめて報告した。

第4表 建具観察表

探検番号 採取番号	番号	材質	器種	重量(g)	グラッド・層	所見
第34区 図収32	1	銅製品	緑金具	10.5	K-14 II層溝2内	角部が角欠きされた板状の銅板を十字に折り曲げている。また、銅を透す小孔が四隅に開けられている。芯部が方柱状となる縁が2か所の孔に残っている。文様は見られない。
第34区 図収32	2	銅製品	留め具	17.44	K-14 I層	板材等を繋ぐための留め具。十字に折り曲げた銅板を十字状に曲げ、十字状となる。銅を留める孔が裏表面には2か所開けられている。角部は2つの円弧をモチーフとした角欠きがなされている。厚さ約1mm。
第34区 図収32	3	銅製品	緑金具	7.5	K-14 II層溝2内	床飾りや襖などの調度品の端部に取り付く緑金具か。板状製品を花形に縁取り、4か所の小孔が開けられている。文様は見られない。厚さ約1mm。
第34区 図収32	4	銅製品	板状製品	37.3	L-16 I層 I層	襖子に取り付く板状製品か。方孔が2か所、円孔が6か所開けられる。円孔には縁が3か所残る。角部は角欠きがなされる。文様は見られず、縁部は弓形状に屈曲する。縦約4.4cm、横約9.8cm、厚さ約3mm。
第34区 図収32	5	銅製品	軸釘	10.5	L-15 I層	折れ曲がっているがほぼ、定形である。径の異なる2枚の座金具が付属している。端部は外側へ大きく反る。
第34区 図収32	6	銅製品	吊り具	8.2	L-15 I層	端部は方形状の芯が見られ、もう一方の端部は円盤状の芯となり、打痕が見られる。厚さ約1mmの座金具が附属している。芯部の断面形は楕円状となる。
第34区 図収32	7	銅製品	引手金具	6.7	K-15 I層	引手金具の菊形。花弁は透かしとなり、内側の引手部は楕円形状となる。厚さ約3mm。
第34区 図収32	8	銅製品	円盤状製品	0.7	L-14 I層	円盤状製品。文様は見られない。銅の芯部か。直径約1.2cm。
第34区 図収32	9	銅製品	座金	0.7	K-14 I層	中央に正方形の孔が見られる。文様は見られず、断面形は弓形状となる。直径約1.4cm。
第34区 図収32	10	銅製品	吊り金具?	0.9	L-15 II層溝2内	吊り金具若しくは取っ手に付属する釘か。断面は楕を取り付けるための孔が開けられる。
第34区 図収32	11	銅製品	軸釘	4	L-14 II層溝内	十字状に折れており、端部には反りが見られる。
第34区 図収32	12	銅製品	座金	1.3	K-14 I層石敷	文様は見られず、中央に真円形の孔が開けられている。直径約2.1cm、厚さ約1mm。



第34图 建具



图版 32 建具

第2節 器物

蓋、取っ手、瓶が見られる。蓋が最も多く確認されており、バリエーションも多く見られる。取っ手は器物に附属するものを主に対象とした。

第5表 器物観察表

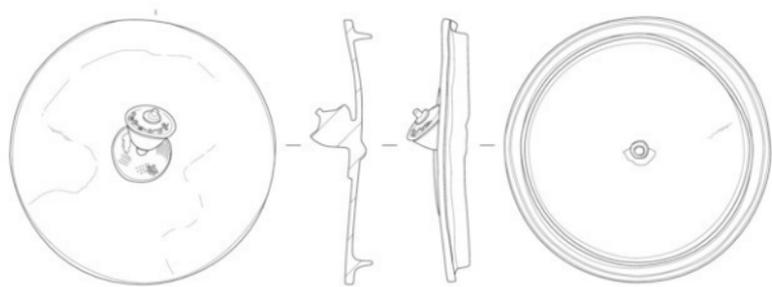
標記番号 採取番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	写真
3345R 3345C3	13	銅製品	蓋	210	E-14 II層溝2内	底中央の編みが中央に取り付く。編みの上面には溝をきき連続文が、編みと蓋本体の接合部にははねによる文様が施される。草花文と思われるが、層により不明となる。やや厚みがあり、断面形はほぼ平坦である。裏面には深い溝があり編みを留める紐と部が見られる。
3345R 3345C3	14	銅製品	蓋	84	E-14 II層溝2内	編みは茶色球状となり、編みと蓋本体との間には突起を咬ましている。円形と扇形の透かし文様が見られることから、蓋の蓋である可能性が推測される。高さ3.7cm、直径9.9cm。
3345R 3345C3	15	銅	蓋	83.1	I-14 TP2北1層	葉形の蓋か。編みは円柱状となり、蓋甲部がくぼむ。外側へ広がる溝が見られる。一部が錆化により変形しているが、ほぼ原形を保っている。高さ3.7cm、直径9.9cm。
3345R 3345C4	16	銅製品	蓋	270	E-14 II層	甲部は扁平で端部は窪みを持たせてから上方向へ傾斜に反る。縁は平坦に仕上げ、裏面には小さな溝が付き、裏面中央には紐の痕跡が見られることから、甲部中央に編みが取り付けられていたものと思われる。一部、歪みが見られる。直径は11.9cm、厚さは甲部端で0.6cm、端部で0.4cmとなる。
3345R 3345C4	17	銅製品	蓋	170	I-14 I層	2次の火を受けており変形している。甲部と内面にはそれぞれ段が見られ、甲部の外縁近くは4条の溝が見られる。中央部あたりと端部の厚さは3mmで、底面部の厚さは5mmとやや厚みを持つ。直径は16cm。
3345R 3345C4	18	銅製品		279	I-15 II層ドク一部	底または瓶の底面部か。縦割により大きく変形しているが、底辺りに開く、方形の溝状になると思われる。縦割に半円状の突起が突き出され、その内部に横位の沈線が見られる。厚さは5mmで突起の幅は7mm、大きく開く側下部が一線見られる。
3345R 3345C4	19	銅製品	取っ手	40.6	E-14 II層	断面形状等に取り付く取っ手か。楕円形状に凹曲し、両端には長さ約3cmの紐が付く。中央部分の断面形状は直径7mmの円形状となり、両端近くは直径5mmとやや小さくなる。端部は紐が外れないように傘状に肥厚する。有線付きの紐は銅板を曲げて成形している。
3345R 3345C5	20	銅製品	蓋	40.5	I-15 II層ドク一部	方形の蓋か。縁が曲がり、一部が欠損しているものの、全体は腐りつつも、厚さは3mmで、内外面共に文様は見られない。また、直径5mm前後の茶色円孔が2か所に見ることができ、縦14.8cm、横26.5cm、縁の厚さは13.6cm。
3345R 3345C5	21	銅製品	取っ手	285	E-14 II層溝2内	大型の器に付き取っ手で、端部が凹曲している以外にはほぼ原形を保っている。持ち手部分の断面形状は縦位の方形状となり、端部は横位の方形状となる。両端部には詰め込みのための小型の突起が見られ、片側には縦1.6cm、横1.3cm、幅0.5cmの、方形状の突起が取り付けられている。

第3節 飾り金具

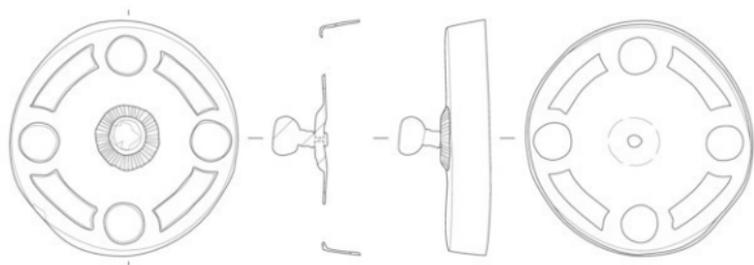
主に彫金が施される金具を中心に取り上げた。八双金具には鍍金が施され、また細かな彫金で唐草文が描かれているものが多数みられる。

第6表 飾り金具観察表1

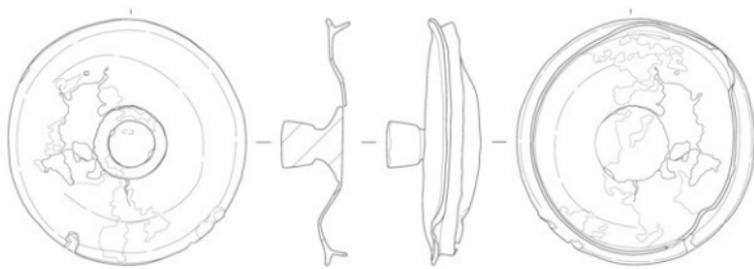
標記番号 採取番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	写真
3345R 3345C6	22	銅製品	座金	13.8	E-14 II層	窪付き座金。座金の縁辺部を銅板状に録取り菊花の弁先を表す。弁先の突起は丸く収め、中間の沈線は施されない。新の先端は二又状に分かれている。窪みの厚みは2.2mmで窪の直径は1.6cm、窪の厚さは17mm。
3345R 3345C6	23	銅製品	座金	9.5	E-14 I層	窪付き座金。座金の縁辺部を銅板状に録取り菊花の弁先を表す。弁先の突起は尖り、中間を尖り沈線が見られる。新の先端は二又状に分かれている。座の厚みは5mm、窪の直径は2.3cm、窪の厚さは17mm。
3345R 3345C6	24	銅製品	座金	7.2	E-14 II層	窪付き座金。文様は見られない。楕円形状の窪が付く。新の先端は二又に分かれ、さらに小さな直径7.2cmの座金が付く。座の厚みは2mmで窪の直径は2.1cm、窪の厚さは7mm。
3345R 3345C6	25	銅製品	座金	5.3	表採	菊雷で中央に長方形の孔が開けられる。花弁は内開りであらわされており、縁辺部は銅板状となる。僅かに窪みが見る。厚みは2.2mm。
3345R 3345C6	26	銅製品	座金	11.1	I-14 TP3II層溝2内	窪付き座金。座金の縁辺部を銅板状に録取り菊花の弁先を表す。
3345R 3345C6	27	銅製品	棒状製品	25.1	I-14 II層	くの字状に曲がる直径5mmの棒状製品で端部は傘状に肥厚する。両端には大小の菊雷の座金がそれぞれ2つ付く。座金は棒状製品の端部が表面になるように取り付けられていることから、把手としての可能性は低いものと思われる。
3345R 3345C6	28	銅製品	板状製品	14.5	E-14 II層溝2内	楕円と菊雷が取り付け付く板状製品。縁部は厚さ2mmで縁辺部に円孔が5か所、見られる。また端部が直角に折れ、長方形上の方形が縁位に開けられている。裏面には厚状の銅板が編みと端部で接合し、もう一方の端部は銅板の円孔から突出している。断面の一部のみ。



13



14



15



第35图 器物1



-



-



13



-



-



14



-



-



15



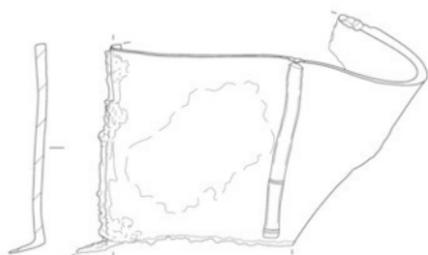
图版 33 器物 1



16



17



18



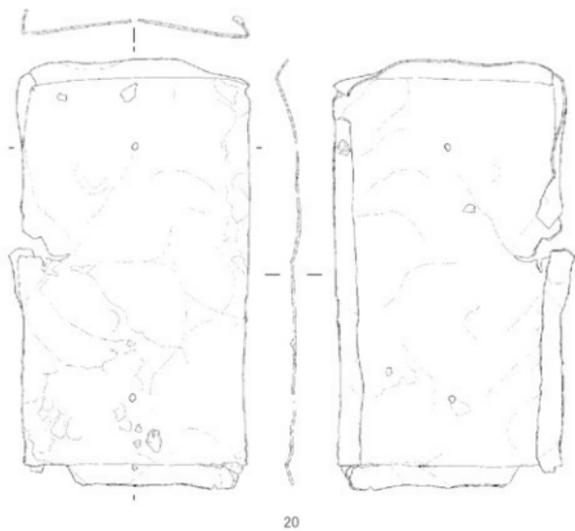
19



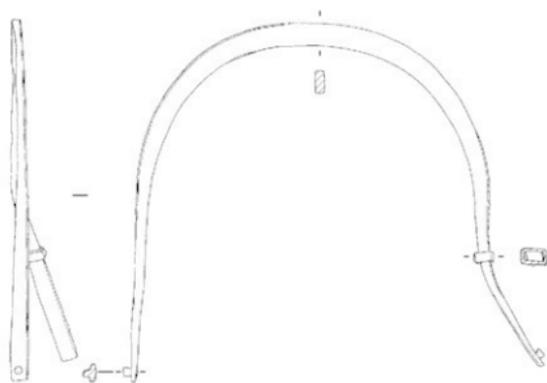
第36图 器物2



图版 34 器物 2



20



21





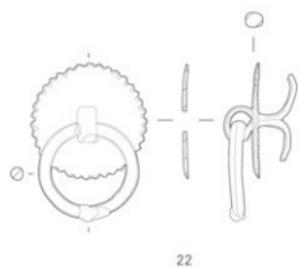
—
20



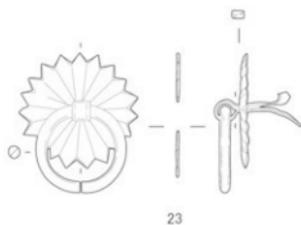
—
21



图版 35 器物 3



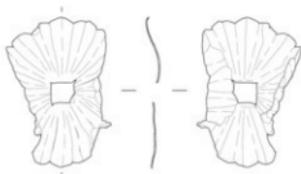
22



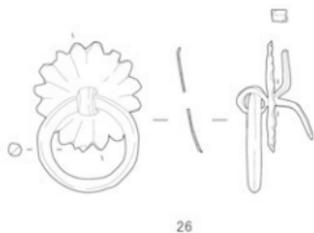
23



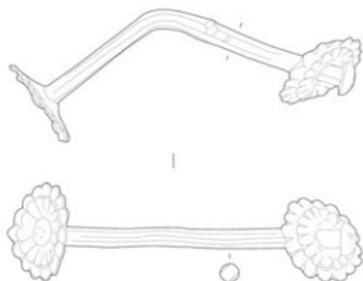
24



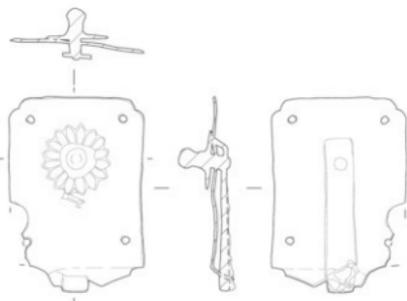
25



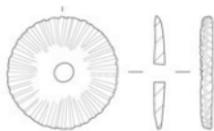
26



27



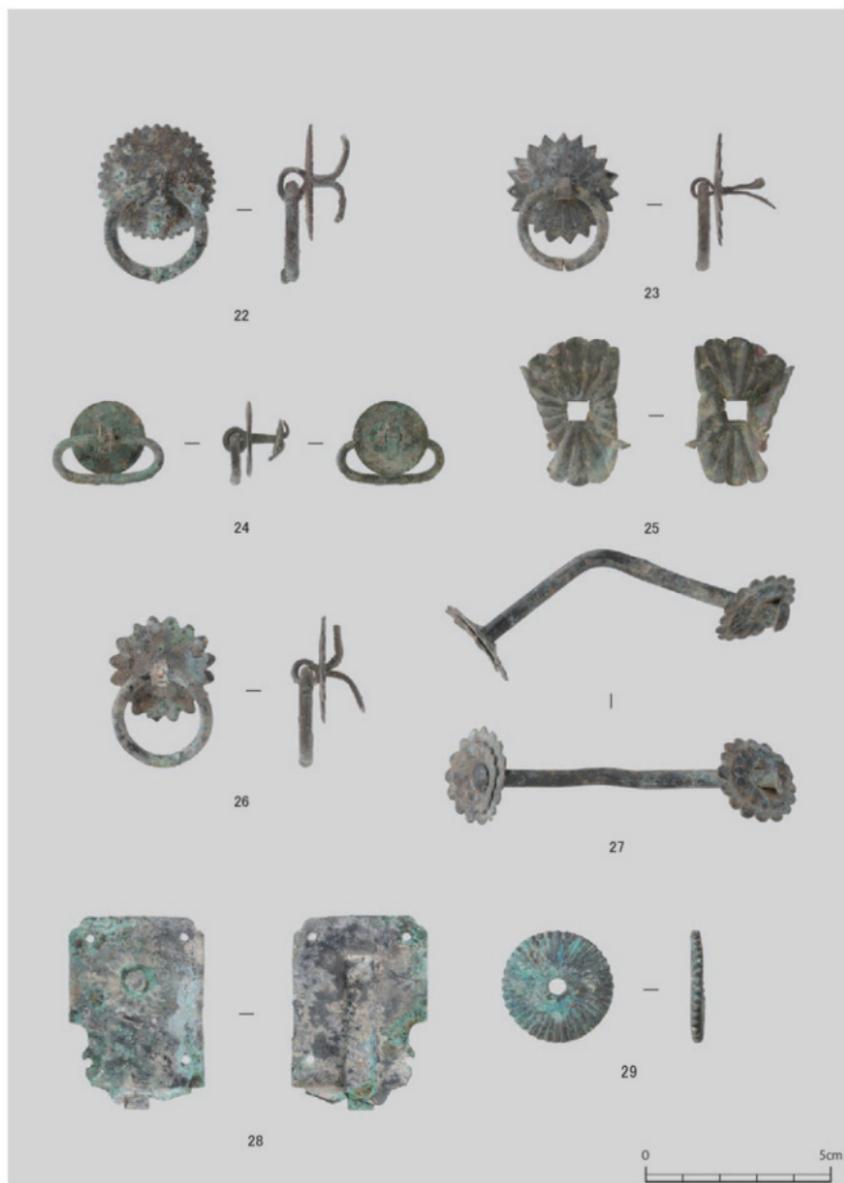
28



29



第38図 飾り金具1



図版 36 飾り金具 1



30



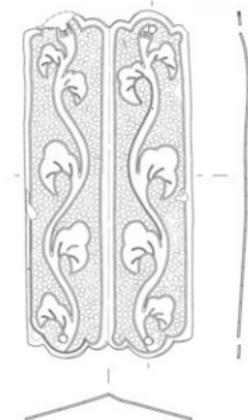
31



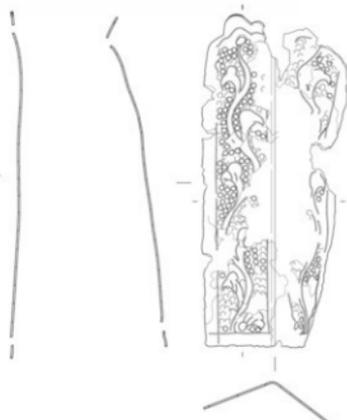
32



33



34



35



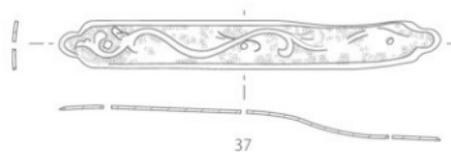
36



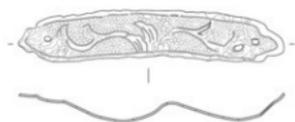
第39図 飾り金具2



図版 37 飾り金具 2



37



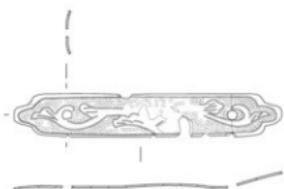
38



39



40



41



42



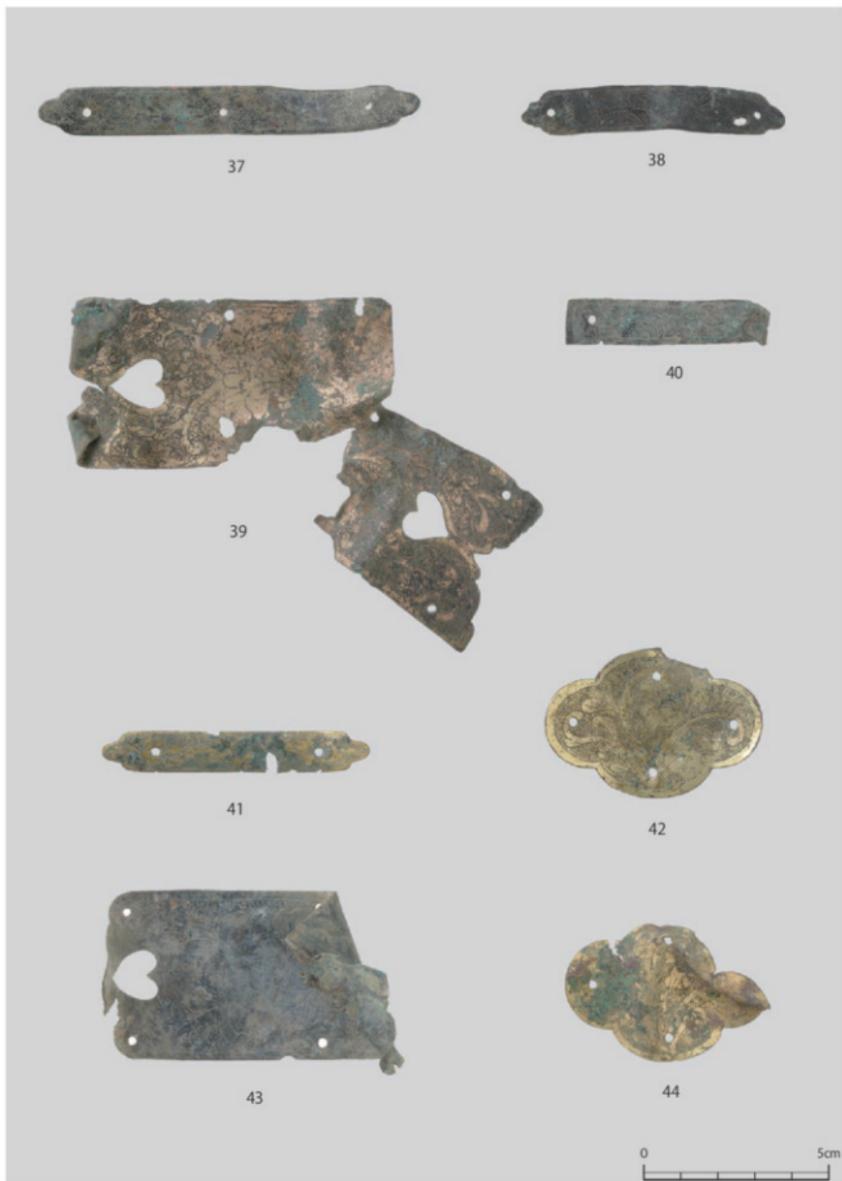
43



44



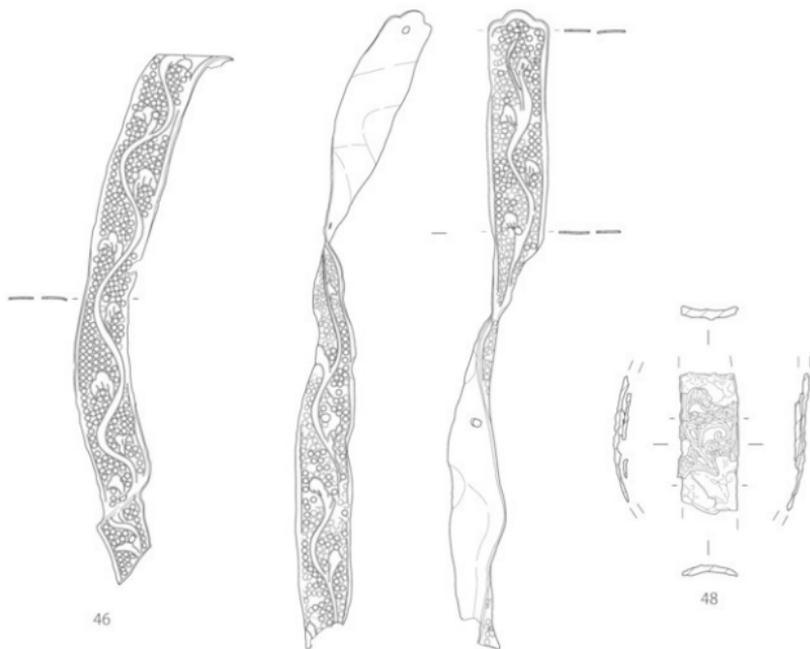
第40図 飾り金具3



図版 38 飾り金具 3



45



46

47

48

0 5cm

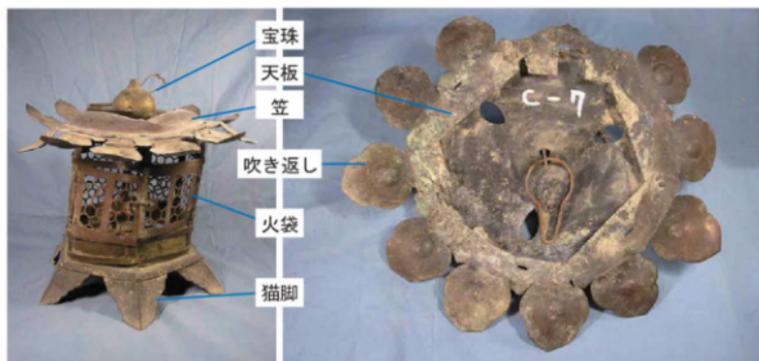
第41図 飾り金具4



図版 39 飾り金具 4

第4節 宗教具・茶道具

本節では祭祀に使用された道具類や寺社内において配置される道具を宗教具として、香炉や灰匙といった茶道具に類するものをまとめて本節で報告する。釣り灯笼については各部位が出土しており、とりわけ残存率の高いものを今回報告する。また、今回未報告ではあるが幅5mm前後の短冊状の銅板が大量に出土している。これらは釣り灯笼の火袋の透かし金具片であるものと考えられる。



1 (参考) 釣り灯笼全景と笠と吹き返し取り付け状況 (沖縄県立博物館所蔵)



2 火袋の内部 (1)



3 火袋の内部 (2)



4 火袋金具



5 火袋金具と出土資料

図版 40 県立博物館所蔵の釣り灯笼と出土資料①



1 宝珠と宝珠受け金具



2 宝珠と出土資料



3 吹き返しと出土資料



4 天板と出土資料



5 猫脚



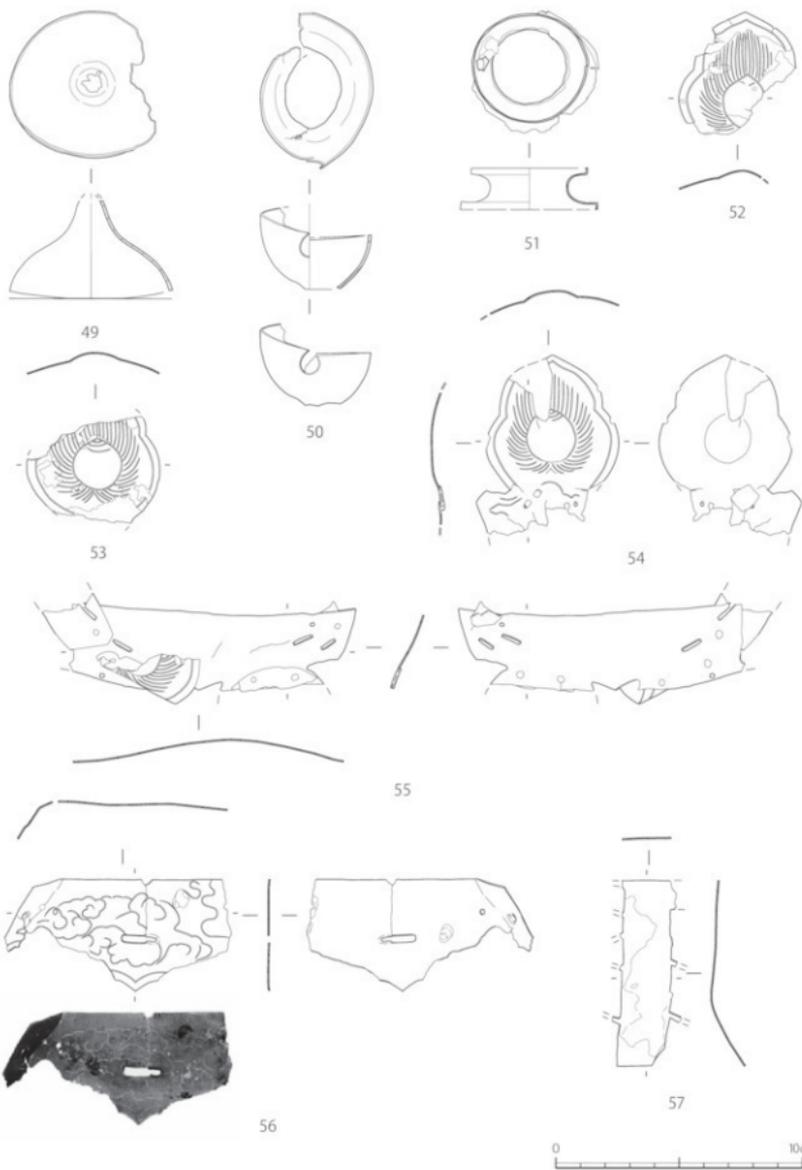
6 猫脚と出土資料

第8表 宗教具・茶道具観察表1

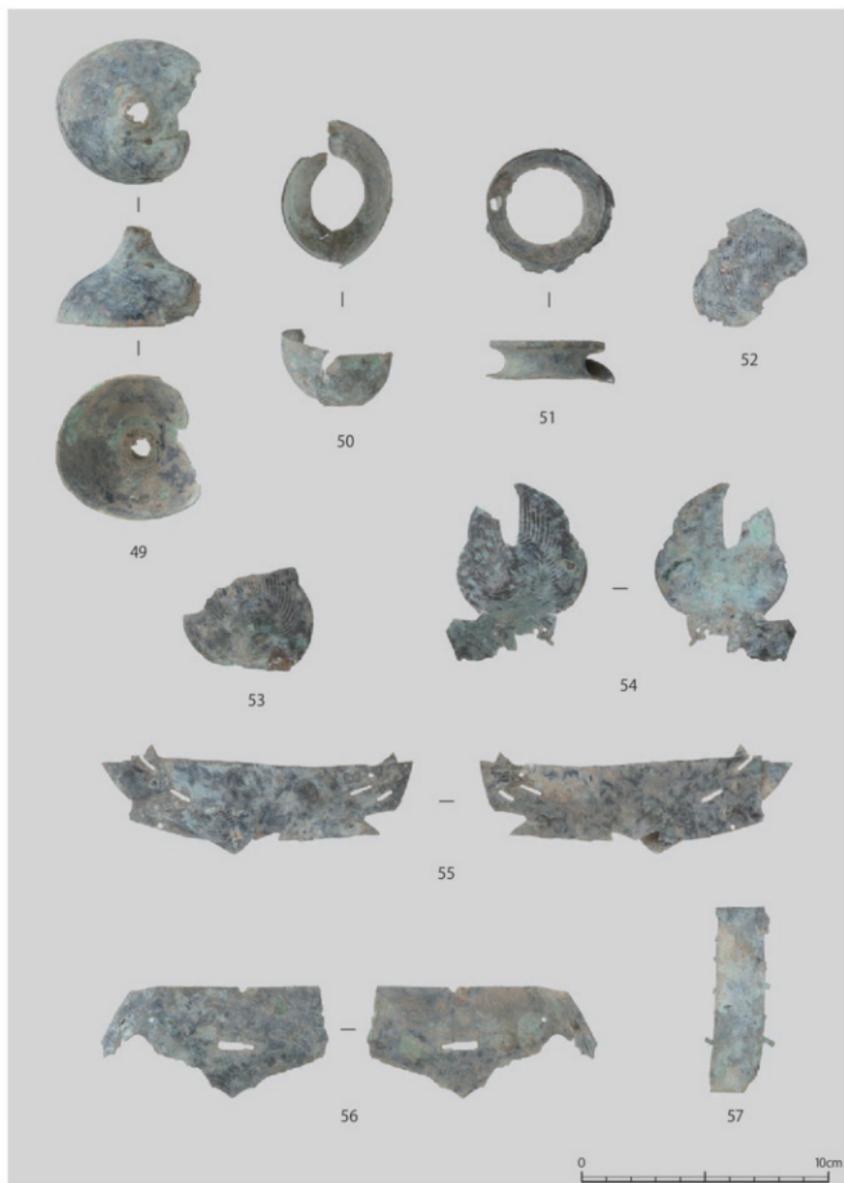
標記番号 収取番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所産
第42図 収取42	49	銅製品	釣灯籠	23.5	K-14 I層	釣り灯籠の頂部に附属する宝珠の上半部、鋳造品で一部、欠損している。厚さ1.5mm。
第42図 収取42	50	銅製品	釣灯籠	17.4	K-15 I層	釣り灯籠の頂部に附属する宝珠の下半部、鍍銀しているもの、全部を焼うことができる。下面は水平に切られ、側面には高さ3mmの円孔が開けられている。厚さ1.5mm。
第42図 収取42	51	銅製品	釣灯籠	21.6	K-14 I層	釣り灯籠の宝珠を受ける器台で下部は大きく歪み、欠損している。受け口は直口となり、縁やかくびれ部に移行する。下部の接続部も歪みに折れている。上部の直径は4.7cmで下部の直径は5.6cm
第42図 収取42	52	銅製品	釣灯籠	3.8	K-14 I層	釣り灯籠の笠に付く吹き返し。欠損が著しいが、全部は焼うことができる。宝珠状の銅板で表面には大抵宝珠文が毛彫りで施される。宝珠の部分を実体的に見せるために、少し盛り上げている。厚さ1mm。
第42図 収取42	53	銅製品	釣灯籠	6.4	K-14 I層	釣り灯籠の笠に付く吹き返し。先端部と基部は欠損している。第42図52とは同一形態である。厚さ1mm。
第42図 収取42	54	銅製品	釣灯籠	8	K-14 I層	釣り灯籠の笠に付く吹き返し。第42図52,53とは同一形態である。基部には別の銅板に留めるための円孔が見られるのと、吹き返しに取り付けていた銅板の一部が残る。厚さ1mm。
第42図 収取42	55	銅製品	釣灯籠	21.5	K-14 I層	釣り灯籠の吹き返しを取り付けるための木板で、第42図52,53,54とは同一形態の吹き返し板で留められている。何れの端部にも新留めの円孔がけられており、幅3cm、厚さ1mmの銅板を複数枚、繋ぎ合わせていることが窺える。また、長方形上の孔が2ヶ所ずつ端部に開けられている。これらは火袋の金具を留めるための孔と思われる。
第42図 収取42	56	銅製品	釣灯籠	10.2	K-14 I層	釣り灯籠の吹き返しを取り付けるための木板、大きく欠損しているため全部は焼えない。横位の方孔が1ヶ所と直径1mmの円孔が2ヶ所見られる。また、毛彫りによる雲文が全面的に施されている。厚さ1mm、重量10.2g
第42図 収取42	57	銅製品	釣灯籠	10.4	K-14 I層	釣り灯籠の火袋。亀甲の透かし文を区分する仕切りで、両側には透かし文の一部が取り付く。厚さ1mm。
第43図 収取43	58	銅製品	釣灯籠	11.2	K-14 I層	釣り灯籠の火袋に付く、飾り金具を留める軸。断面はく字状となり、上部はく字状の銅板と幅9mmの銅板が新で留められている。厚さ1mm、幅1.5cm。
第43図 収取43	59	銅製品	釣灯籠	4	K-14 I層	釣り灯籠の火袋。上部の横間部分には花巻、下部の挿出し部分には亀甲の透かし文様が見られる。花巻には毛彫りで線が施されている。厚さ1.5mm。
第43図 収取43	60	銅製品	釣灯籠	5.6	I-14 I層	釣り灯籠の火袋。上部の横間部分の透かしによる花巻文、下部の亀甲文と思われる金具が見られるが、変形が著しい。厚さ1.5mm。
第43図 収取43	61	銅製品	釣灯籠	10	未探	釣り灯籠の火袋に付く、飾り金具を留める軸。六角形状が取り付く銅板が新で留められており、六角板の中央には直径2mmの円孔が開けられている。火袋の扉を留める飾り軸と考えられる。厚さ1.5mm。
第43図 収取43	62	銅製品	釣灯籠	50.2	K-15 I層	釣り灯籠の地板で大きく変形している。火袋の金具を留めるための、長方形の孔が1ヶ所見られる側面には線が2ヶ所、留められている。
第43図 収取43	63	銅製品	釣灯籠	7.4	K-14 I層	釣り灯籠の頂部。毛彫りによる牡丹唐草文が全面的に施されている。花弁は大きく、そして葉は細く施される。小さい魚や子を縦列打ちで空白部を留める。18～19世紀における日本本土の意匠と類似する。厚さ1mm。
第43図 収取43	64	銅製品	長瀬花瓶	710	I-15 II層トウ一層	長瀬花瓶の胴部。大きく変形し、欠損しているが全部は焼える。口縁部は玉縁状に肥厚し、肩部から縁やかくびれ部に移行する。胴は大きく張り、胴部は底部にかけて窄まる。肩部には突起が1ヶ所見られる。底部近くで外側へ少し張り、口縁部から肩部にかけては粒文が、胴部には波線文が毛彫りで施される。整列資料として内閣府立博物館所蔵の長瀬花瓶がある。
第44図 収取44	65	銅製品	火袋	24.5	K-14 I層	変形し、柄は欠損している。先は丸く、つばは浅い。全体的に厚みは1mm以下と薄く、表面には凹凸が見られる。
第44図 収取44	66	銅製品	香炉	185.3	K-14 I層	大型香炉の胴。雲文に象られており、内部には漢文が深く刻まれている。本体部と接続した蓋面を有し、接合部は丸く収める。鋳造品。

第9表 宗教具・茶道具観察表2

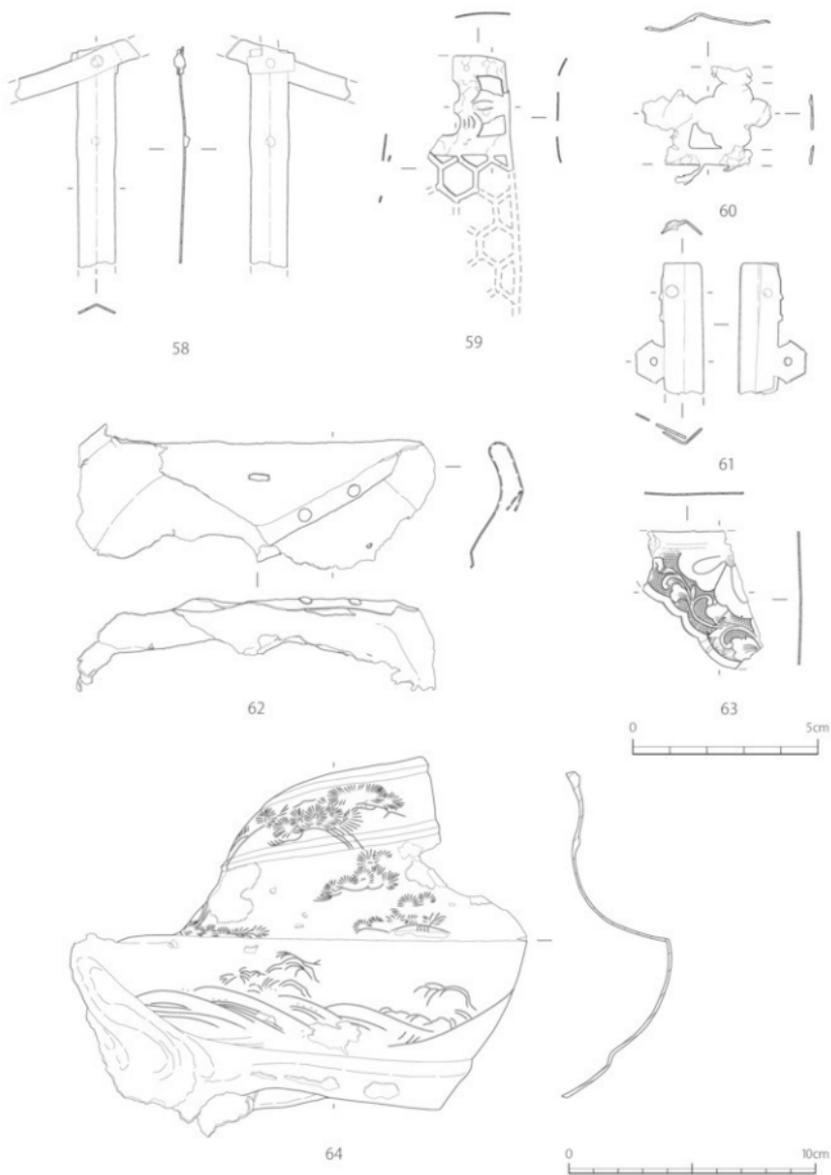
標記番号 国庫番号	番号	材質	器種	重量(g)	グッド・層	所見
第44国 国庫44	67	銅製品	花瓶	38.2	I-14 T2北1層	花瓶の一部が、ほとんど欠損しているため、全形は窺うことができない。不規則な雷文が内側に刻まれる。また、雷文上には肥厚帯が見られる。沖繩県立博物館・美術館蔵の龍耳花瓶に類似する。
第44国 国庫44	68	銅製品	香炉	100	I-15 II層下ウ一拵	香炉の一部が、変形が著しくほとんど欠損しているため、全形は窺うことができない。龍形香炉の底部もしくは胴部と考えられる。幅広の溝が見られる。
第44国 国庫44	69	銅製品	長照花瓶	2325	I-15 II層下ウ一拵	口縁部、胴下部からは欠損している。ラッパの状に広く開き、口縁部で段を有しており、直口する。口唇部は平坦となり、内縁する。文様は見られない。口径36.5cm。
第44国 国庫44	70	銅製品		975	J-14 T19 II層	かなり変形し、破損も著しいため、全形を窺うことができない。箱蓋状の製品または香炉の一部か。側面はふくらみを有しており、底部は平坦となる。底面は内側に染っており、正面は面を有する。文様は見られない。
第45国 国庫45	71	銅製品		630	I-15 II層下ウ一拵	かなり変形し、破損も著しいため、全形を窺うことができない。長方形の箱状製品で香炉の一部か。口縁部への立ち上がりは高く、大きく開く。口唇部は平坦となり、底面は2〜3段となる。
第45国 国庫45	72	銅製品		661.8	J-14 T19 II層	高熱による融解で変形し、破損も著しいため、全形を窺うことができない。箱形の大型香炉の一部か。破損により高部に分類されており、それぞれの場合が変形しているため、接合はできない。中央には横位で幅広の溝が染、そして底部には縦位で浅めの溝が見られる。土は開き、口縁部は平坦になる。
第46国 国庫46	73	銅製品	鏡子	154.6	I-15 II層下ウ一拵	長柄付鏡子。全体的に変形が著しい。容器は内側へ逆三角形に肥厚し、口唇部は平坦となる。柄受け部には切り込みが見られ、断面が長方形となる1字状の金具が差し込まれる。柄を受ける金具は雷文状に縁取られており、中央下部と高部の折れ目所に銅が張り付く。銅にはそれぞれ彫金が付されており、容器の内側は細文様を遺して、容腔と固定している。文様は容腔の外側に彫金文がもたらされておられ、小さな魚ヶ子を忠実に充填打ちしている。柄を受ける金具にも同様の文様が施される。首里城跡宮の内側からも類似資料が出土している(沖繩県立博物館文化財センター2009)。
第46国 国庫46	74	銅製品	耳笥	52.2	K-14 II層	双耳で高台付。薄手で作りで輪口縁部は直口。胴部は縁から膨らみを有し、高台は高く、板金を覆った型で高に転行する。文様はもともとある牡丹草文を胴部中央に置き、口縁部には左右による溝部を、胴下部には花弁の縁部文を飾り、高台にも草文文が彫られる。耳は厚さ3mmの板金を切出し、身に転行けされる。また、耳は左右対称の花巻草形で表面と上に用形と縁が彫られる。口径6cm、高さ5cm、器高4.7cm。
第47国 国庫47	75	銅製品	香炉	4460	I-15 II層下ウ一拵	依形の大型香炉か。高熱による融解で大きく変形し、破損も著しい。口縁部は直口し、口縁部近くに雷文帯が内彫りで彫られる。内側面には溝部状の縁取文が見られる。底面には厚さ3mmの板金を覆った型で底に転行けた高台が付く。
第48国 国庫48	76	銅製品	香炉	6080	I-15 II層下ウ一拵	大型の香炉。大きく変形し、破損しており、全形は窺えない。高台に膨らみを有する袋状の香炉であると推測される。胴上部には花巻状の文様を縁取り、それを本体に重ねて文様としている。1つの花弁に半葉状の突起が2つ見られる。
第49国 国庫49	77	銅製品	香炉	326.7	I-15 II層下ウ一拵	大型の香炉の口縁部か。大部分が欠損しており、全形は窺えない。口縁は内縁しており、直縁部に及び。縦位で膨らむ突起が見られ、その隣に胸状の溝が付く。溝からは本体を貫通させて、内面を覆って留めている。第46国庫73と同一体であると思われる。
第49国 国庫49	78	銅製品	香炉	3060	I-15 II層下ウ一拵	大型の香炉。高熱による融解で大きく変形、破損しており、全形は窺えない。胴部が膨らみ有する袋状の香炉で正面には1葉の縁位が中心に、そして、そこから側面まで2葉の溝が横位に走っている。底面は平らで、胴部と高台7cmの円孔が開けられている。内面には縁取が縁位により着している。第49国庫77は同一個体であると思われる。



第42図 宗教具・茶道具1



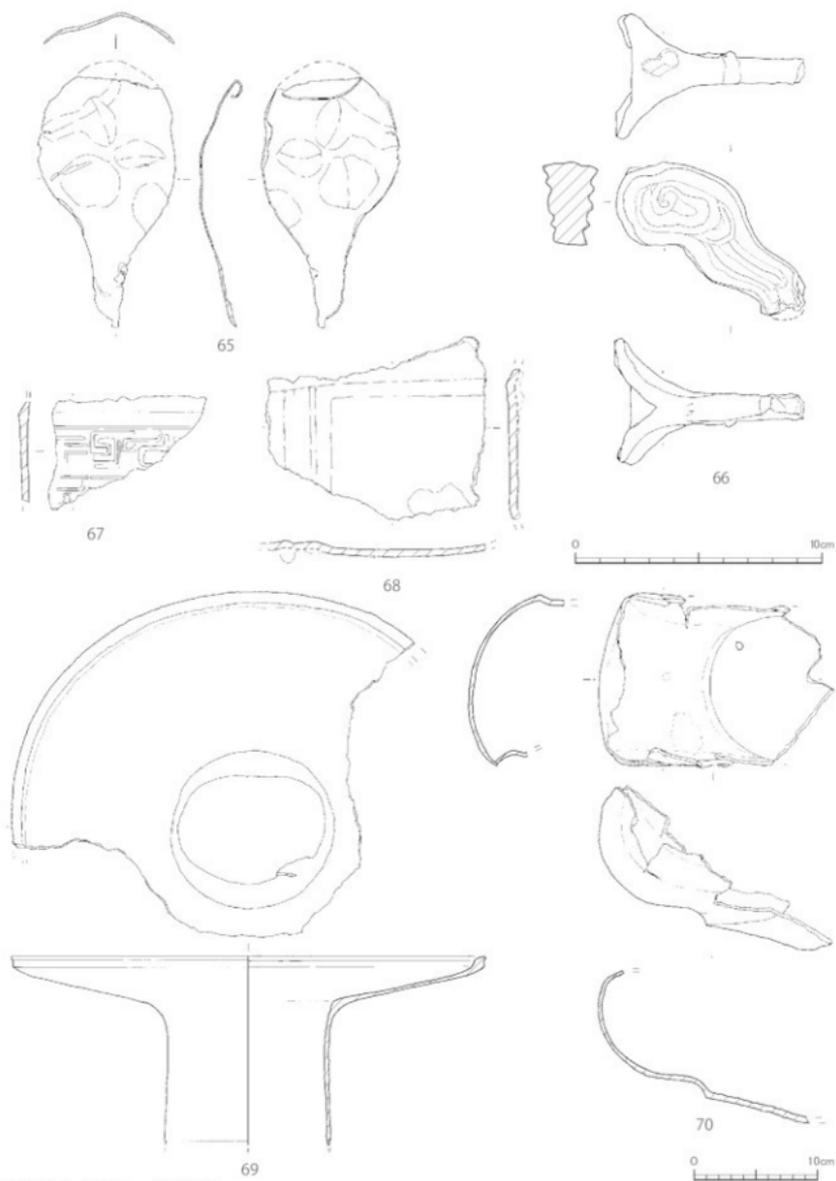
图版 42 宗教具・茶道具 1



第43図 宗教具・茶道具2



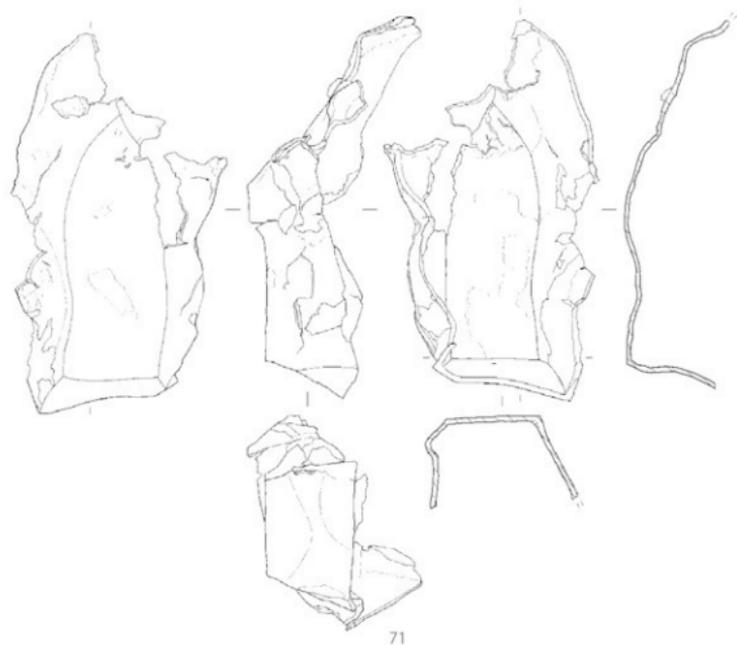
图版 43 宗教具・茶道具 2



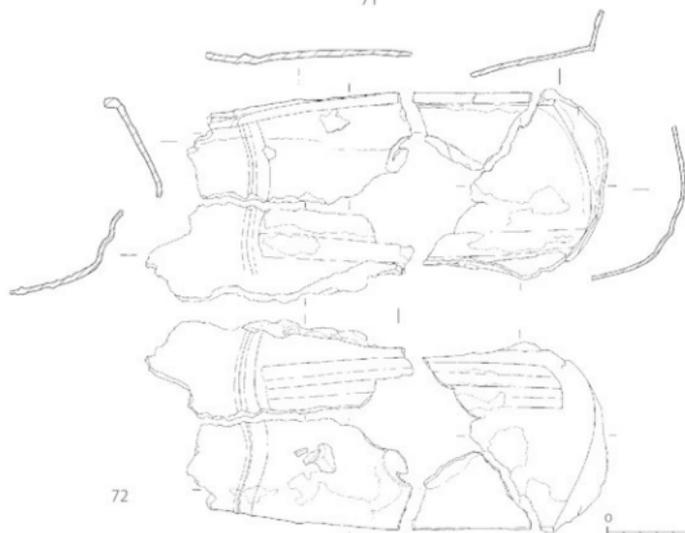
第44図 宗教具・茶道具3



图版 44 宗教具・茶道具 3



71



72

0 10cm

第45図 宗教具・茶道具4



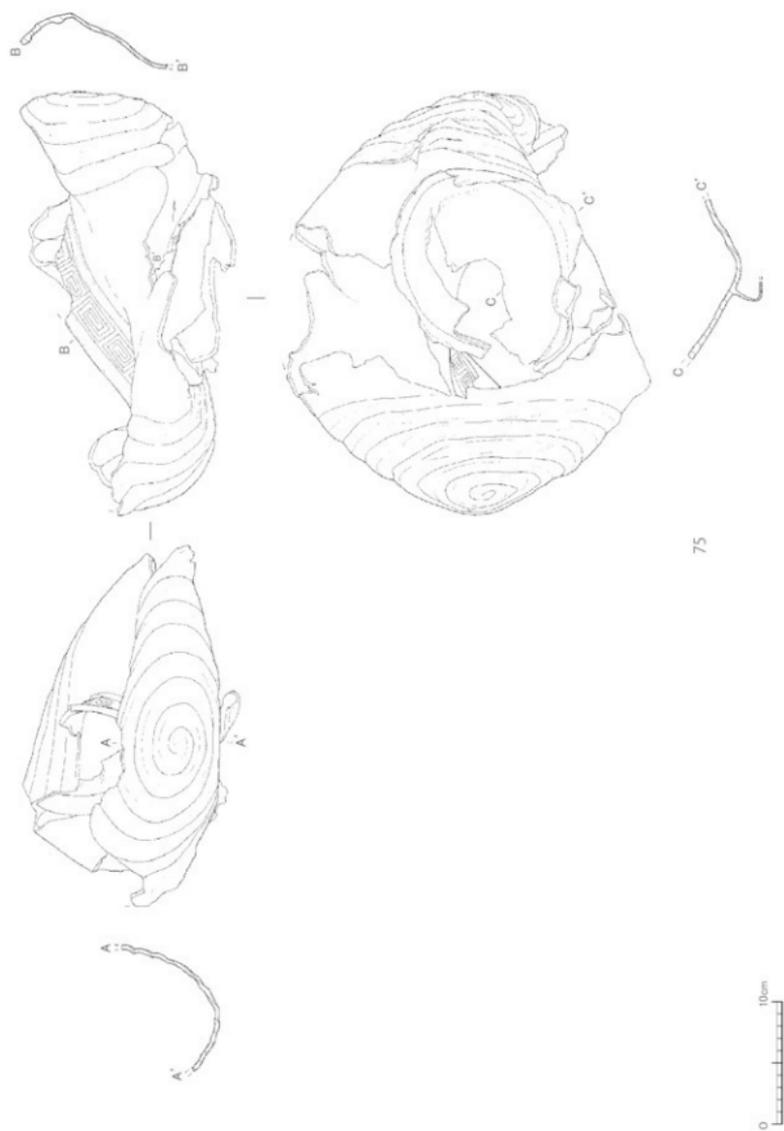
图版 45 宗教具・茶道具 4



第46図 宗教具・茶道具5



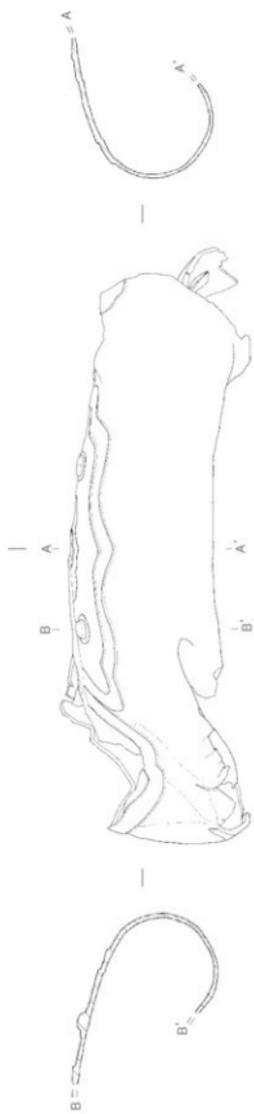
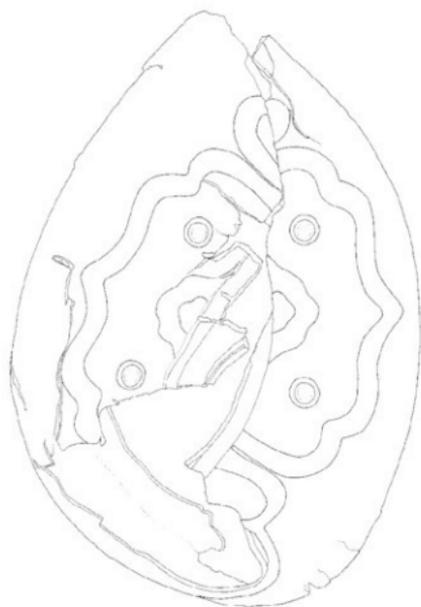
図版 46 宗教具・茶道具 5



第47图 宗教具・茶道具6



图版 47 宗教具・茶道具 6



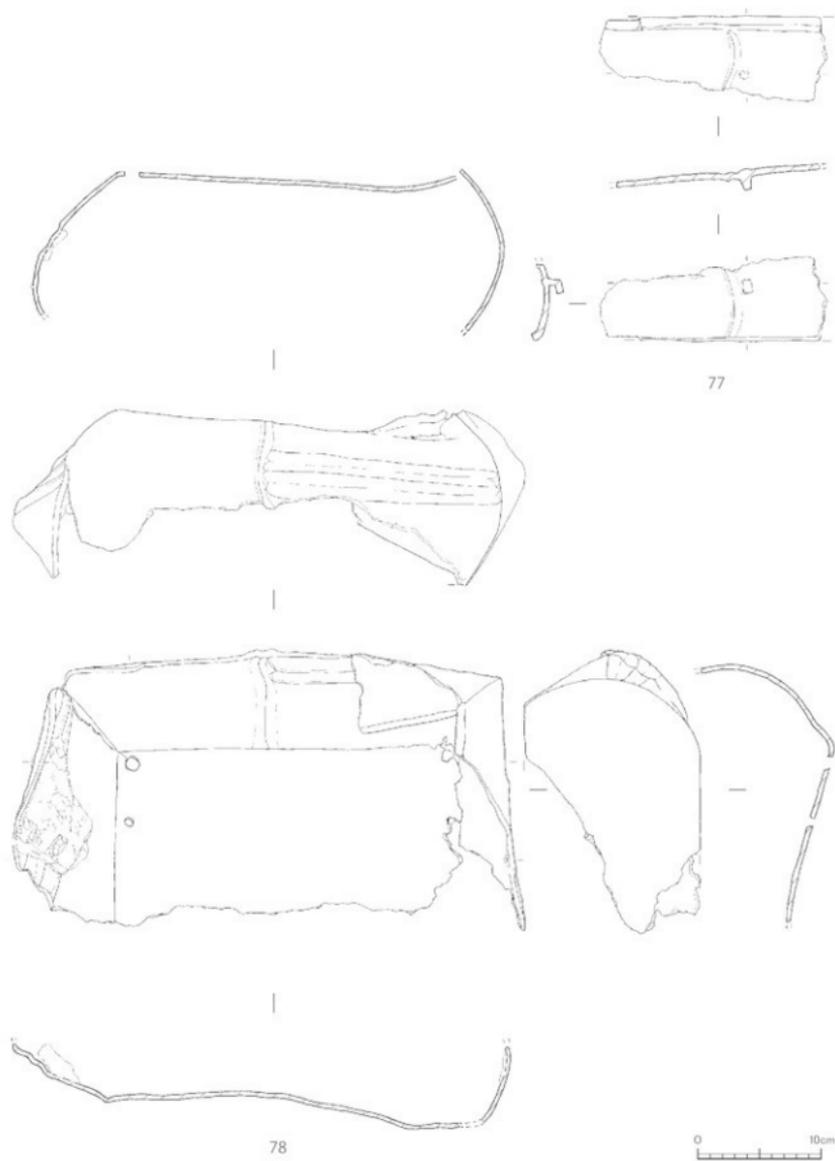
76



第 48 図 宗教具・茶道具 7



图版 48 宗教具·茶道具 7



第49図 宗教具・茶道具8



图版 49 宗教具・茶道具 8

第5節 釘

角釘、丸釘などの木材に打ち付けて固定する、先端の尖る棒状の道具を釘とした。釘に含める遺物は992点出土しており、鉄製のものは583点で、銅製のものは409点出土している。以下に銅製釘、鉄製釘の順に紹介する。個別の観察については、銅製釘は第15～17表、鉄製釘は第17表に記載した。

1 銅製釘

銅製釘に含めるものは、角釘が326点、丸釘が83点出土している。全形を窺えるものは角釘284点、丸釘50点あり、鉄製釘と比べて状態の良好なものが多い。その中から形態的特徴的なもの、錆の少ないものなどを角釘は35点、丸釘は26点図化した。

(1) 角釘

完形で得られた資料を対象に、銅製の角釘を頭部の形状別に分類した。

I類：正面視での頭部が軸部より一回り幅広くなるもの。上面視が方形状となり、軸部断面も方形状になる。頭部が明確に造られているかどうかで細分した。

I-1類：頭部を幅広く造り出しているもの。鍛造時の敲打により頭部付近の軸部に稜が形成される。稜のある軸部断面が隅丸方形状になる。稜のある軸部より以下の断面は方形状となる。

I-2類：頭部周辺の軸部断面が方形状になるもの。頭部を幅広く形成したのか、II類を打ち付けた際に頭部が潰れたものかの判別は難しい。

II類：正面視での頭部と軸部の幅がほぼ変わらないもの。上面視は方形状となり、軸部断面も方形状になる。

III類：頭部を曲げて逆L字状に造るもの。頭部と軸部の径が変わらないものが多く、L字状に曲がる部分の背は角が立つ。正面視では頭部と軸部の幅が変わらず、上面視は長方形で、軸部断面は方形状になる。

IV類：頭巻き釘とされるもので、頭部は軸部に比べて薄く幅広で、正面視では頭部が軸部より幅広くなる。頭部が軸部に対して垂直に立ち上がるものも一部あるが、丸みを帯びて曲がるものが多い。頭部先端は薄く尖る。

その他：掛軸等を掛ける為の軸釘や、軸部に孔のあく、器具を掛けるための釘など、建築物に直接関係しないと考えられる釘。

第10表 銅製角釘類型別集計表

類型	全長								合計
	10~20㎜	20~30㎜	30~40㎜	40~50㎜	50~60㎜	60~70㎜	70~80㎜	100~110㎜	
I-1		2	2	3	13	4			24
I-2		1	3	4	12	10			30
II	1	5	175	9	6	10	1		207
III	3		1		1			1	6
IV	2								2
合計	6	8	186	18	32	24	1	1	234

I類

I類はI-1、I-2類共に全長約20～70mmの範囲に分布し、特に50～60mmのものが多い。鉄製のI類と比べると小型のものも多く、使用目的が異なることが考えられる。

II類

全長10～80mmの間に分布するが、そのほとんどは全長30～40mmに集中する。一定の規格を持って造られたものと考えられる。

III、IV類は点数が少なく、傾向について具体的なことを述べることはできない。

(2) 丸釘

軸部断面が円形となるものを丸釘とした。全長の差はある程度あるものの、頭部が丸みを持ち、軸部から端部にかけて徐々に細く尖るものがほとんどであり、形態的に大きな違いは見られない。丸釘に含める83点の内、全形の窺える48点を対象に全長、頭部径を比較したところ、全長10～20mm、頭部径3～5mmの幅に集中した。一定の規格を持って造られている傾向にあり、全長も短いものが多いことから、飾り鉾としての使用が考えられる。

第11表 銅製丸釘全長別集計表

頭部径 全長	3～4mm	4～5mm	5～6mm	6～7mm	7～8mm	8～9mm	合計
10～20mm	20	9	1				30
20～30mm	3	3	2		1		9
30～40mm	3	1	1			1	6
40～50mm		1					1
50～60mm		1	1				2
合計	29	15	5	0	1	1	48

2 鉄製釘

鉄製釘に含めるものは、角釘356点、丸釘220点、鏝7点が出土している。丸釘については、明らかに現代の遺物がほとんどで、錆による浸食によって図化に堪えないほど脆弱なものが多いため、図化は行わなかった。鉄製の角釘も錆による劣化の著しいものも多く、全形を窺えるもの201点の内、17点を図化した。

(1) 角釘

完形で得られた資料を対象に、鉄製の角釘を頭部の形状別に分類した。

- I類：正面視での頭部が軸部より一回り幅広くなるもの。上面視が方形状になり、軸部断面も方形状になる。錆による頭部の腐食が強いものが多いため、頭部を幅広く造り出しているのか、II類を打ち付けた際に頭部が潰れたのか、判別は難しい。
- II類：正面視での頭部と軸部の幅がほぼ変わらないもの。上面視は方形状となり、軸部断面も方形状となる。頭部を平坦に造るか、斜めに造るかで細分した。
 - II-1類：頭部を平坦に造るもの。上面視は方形状、軸部断面も方形状となる。
 - II-2類：頭部を斜めに造るもの。上面視は方形状、軸部断面も方形状となる。
- III類：頭部を曲げて逆L字状に造るもの。L字状に曲がる部分の背は角が立つ。正面視では頭部と軸部の幅が変わらず、上面視は長方形状で、軸部断面は方形状となる。

今回の調査では出土しなかった。

Ⅳ類：頭巻き釘とされるもので、頭部は軸部に比べて薄く幅広で、正面視では頭部が軸部より幅広くなる。頭部が軸部に対して垂直に立ち上がるものも一部あるが、丸みを帯びて曲がるものが多い。頭部先端は薄く尖る。

その他：掛軸等を掛ける為の軸釘など、建築物に直接関係しないと考えられる釘。

第 12 表 鉄製角釘類型別集計表

全長 \ 類型	全長														合計	
	10~20mm	20~30mm	30~40mm	40~50mm	50~60mm	60~70mm	70~80mm	80~90mm	90~100mm	100~110mm	110~120mm	120~130mm	130~140mm	140~150mm		150~160mm
I			1	2		4	6	5	5	1	4	4	1	1	1	35
Ⅱ-1				3	4				13	5	2	9	14	3		54
Ⅱ-2				1	1	2			5	3	1	1				14
Ⅲ			5	14	9	6	4	6		3	1	1				45
合計	0	5	15	18	11	16	12	16	18	7	15	19	4	1	2	182

I 類

全長約 30 ~ 160mm の間に分布。全長 60 ~ 130mm の中型のものが比較的多い。小型の釘を必要とする調度品から、建具として使用する大型釘まで、様々な使用方法が推察される。

Ⅱ 類

Ⅱ-1 類：全長約 40 ~ 160mm の間に広く分布する。全長 80 ~ 90mm (54 点中 13 点)、120 ~ 130mm (54 点中 14 点) に多く分布する。I 類同様、調度品や建具などの使用方法が推察できる。

Ⅱ-2 類：全体的に資料数が少ないため、傾向を窺うことはできない。

Ⅳ 類

全長約 20 ~ 120mm の間に分布する。特に 20 ~ 70mm の小型のものに分布が集まっており、ある程度規格、使用方法が定まっていることが窺える。

3 小結

銅製角釘及び鉄製角釘それぞれにおいて頭部形状の類型と全長に基づいて集計を行った結果、分布の偏りが見られた。銅製の角釘は全長 80mm 以下のものがほとんどであるのに対し、鉄製の角釘は全長 20 ~ 130mm の間に広く分布しており、銅製角釘が鉄製角釘に比べて短い傾向にある。頭部の形状などに関係なく、全体的に銅釘と鉄釘で全長に大きな差が出ることから、銅と鉄という素材の時点で、異なる使用目的で製作されたことが考えられる。

先端部の形状では、鉄製角釘はすべて、軸部から端部にかけてゆるやかに先細ることで、打ち込んだ際に圧力が高まり、釘としての機能が働く。一方、銅製角釘は鉄製のものとは異なり、軸部から先端付近までの径がほぼ同じで先端部分のみ尖る、簪の先端形状に酷似する形になるものがほとんどである。先端近くから頭部付近まで厚みが変わらないことで、木材にかかる圧力は鉄製の角釘に比べて弱くなるため、銅製角釘は釘としての機能は弱く、大きな部材等を留めるのには適していない。調度品等の小型の製品に対して使用されたと思われるのが妥当と思われる。また、釘としての機能の弱さ、簪に酷似した先端形状から、簪を作る職人によって作られた可能性も考えられる。

頭部形態について各類型を個別に見ていくと、頭部の幅が胴部よりも広くなる I 類については、鉄

製のものでは全長 60～130mmの比較的大型のものが多くなるが、銅製のものは 70mm以下と比較的小型になる。鉄製も銅製も部材に打ち込んで繋ぐという同じ使用方法が考えられるが、対象物は銅製の場合、鉄製のものより小型になると推察される。頭部と胴部の境のないⅡ類においても、鉄製のものは 80mm以上のものがほとんどであるのに対し、銅製のものは多くが全長 35～40mmに収まる（第 10・12 表）。小型で、打ち込んだ際に頭部が木材表面に埋め込まれ目立たない構造になっていることから、使用対象は調度品等の小型のものが想定される。Ⅲ類の構造は、頭部を曲げるという点から留め具としての機能を持つと考えられるが、資料数が少なく、具体的な使用方法について述べることはできない。Ⅳ類は頭部が薄く広がる小型の釘であることから、留め具としての機能が考えられるが、銅製のものは資料がほとんどなく、鉄製のものは全長 80mm以下が多い。頭巻釘は戸板などを留めるために使われることが多く、今回出土した資料も同様の使用方法が想定される。

角釘の形状について、使用対象物の大きさ、使用する部分によってそれぞれ適正な形状、サイズが求められ、その結果が、素材の違い、全長、先端形状、頭部形状といった、形態の違いとして現れていると思われる。

調査区別に見た場合、鉄製、銅製共に K-14、L-14、L-15 のⅠ層から大量に出土している。このあたりは御蔵・取納座部分にあたり、近くには金属製品溜まりなどもあることから、それらと同様に戦後以降の時期にまとめて廃棄されたものと考えられる。

K-14 Ⅱ層及び L-14 Ⅱ層からも角釘が多く出土している。これらの層は遺構直上に堆積する焼土・炭層で、層中に溶解した金属製品や炭化木材が含まれることから、戦時中における中城御殿焼失時のものと断定される。K-14 Ⅱ層からは鉄製角釘 30 点、銅製角釘 52 点、L-14 Ⅱ層からは鉄製角釘 28 点と多く出土しており、これらの釘は中城御殿焼失時の建築物（御蔵）及び調度品等の痕跡の可能性が考えられる。

第 13 表 銅製角釘Ⅱ類全長別集計表

全長 \ 銅製	全長							合計
	10～20mm	20～30mm	30～40mm	40～50mm	50～60mm	60～70mm	70～80mm	
銅製	1	0	170	0	6	10	1	200

第 14 表 銅製角釘Ⅱ類全長別集計表（30～40mm間）

全長 \ 銅製	全長							合計
	30～32mm	32～34mm	34～35mm	35～36mm	36～37mm	37～38mm	38～39mm	
銅製	2	0	1	11	87	30	21	155

第 6 節 鋸

鋸に含める遺物は 7 点得られており、全て鉄製であった。いずれも錆による劣化が見られるが、比較的残りのよい 5 点を図化した。全長 10cm 前後のものが多く、軸部の断面形が長方形になる。板同士などを繋ぐために使用されたと考えられる。

第15表 釘観察表1

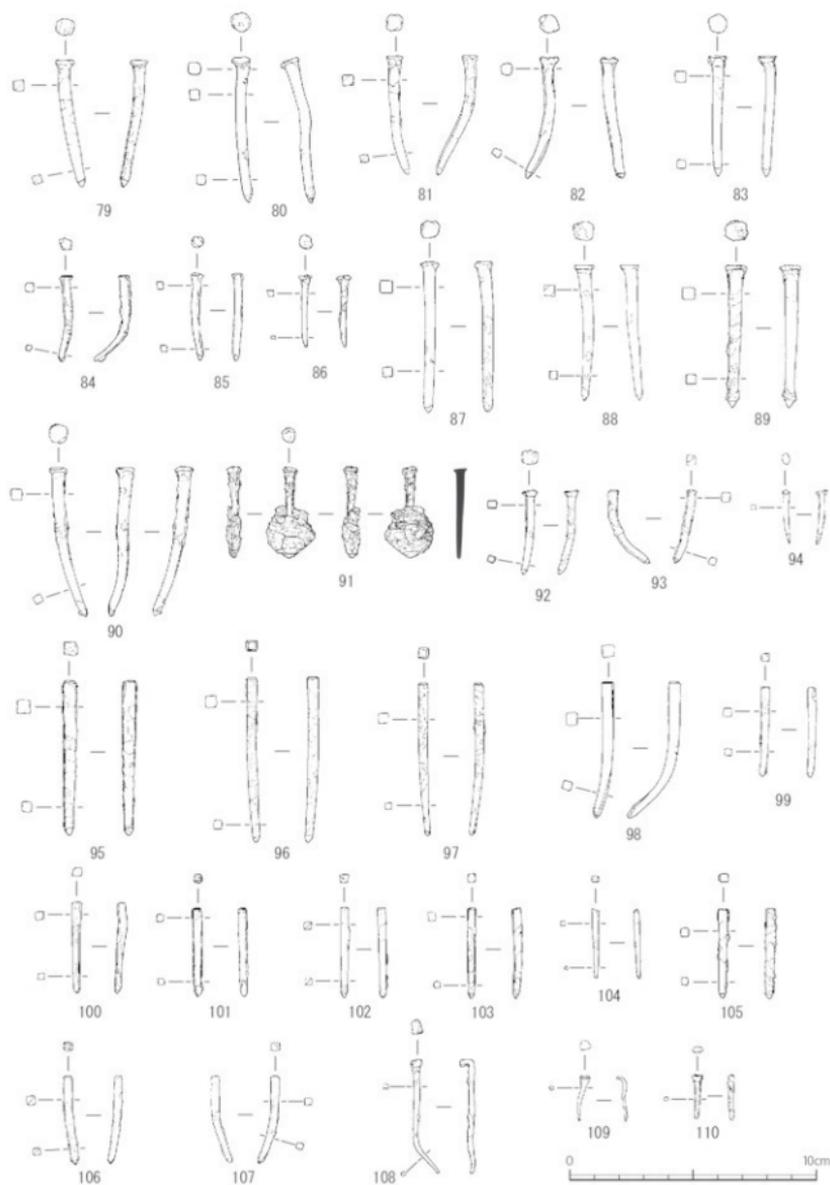
標記番号 回収番号	番号	材質	品種	頭部 分類	質量(mg)		ゴッド・層	所見
					全長 頭部軸 軸端	重量		
第500 回収50	79	鋼製品	向釘	I-1	52.41	6.9	J-13 LTS1層	頭部付近の軸において、内側の角が潰れ、断面が楕円形状となり、それより以下の断面は方形形状となる。頭部平面は円形近く、軸部から頭部にかけて径が僅かに細くなり、先端で尖る。
					7.71			
					4.49			
第500 回収50	80	鋼製品	向釘	I-1	59.27	9.2	表保	頭部付近の軸が潰れ、断面が楕円形状。それより以下は断面方形形状となる。頭部は頭部先端のみ尖る。頭部は潰れ、楕円形状となる。
					8.11			
					4.65			
第500 回収50	81	鋼製品	向釘	I-1	48.97	6.4	J-13 LTS1層	頭部付近の軸部に径が形成される。径のある軸部の断面は楕円形状で、それより以下から頭部までの断面形状は方形形状となる。頭部上面は楕円形状で、両側に亀裂が走る。
					6.8			
					4.24			
第500 回収50	82	鋼製品	向釘	I-1	53.48	6.9	K-11 1層	頭部は円形断面に潰れる。頭部付近の軸部において内側の角が潰れ、断面が楕円形状となる。軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。
					7.73			
					4.25			
第500 回収50	83	鋼製品	向釘	I-1	48.97	6.9	K-15 1層	叩かれた衝撃で頭部付近の軸が曲がる。頭部平面は円形に近い。軸部断面は頭部付近で楕円形状、軸部から頭部にかけては方形形状になる。
					7.37			
					4.15			
第500 回収50	84	鋼製品	向釘	I-1	44.2	2.4	I-15 1層	錆による腐食が強く、所々部みが見られる。頭部は方形。軸部断面は頭部付近で楕円形状、軸部から頭部まで方形で、径が細くなり、先端で尖る。
					5.18			
					3.61			
第500 回収50	85	鋼製品	向釘	I-1	35.65	2.5	J-14 TP1層	正面観では頭部が軸部より幅広くなる。頭部付近の軸部に径が形成される。上面観は楕円形状。軸部から頭部まで幅が狭くならず、頭部のみ尖る。
					7.53			
					3.34			
第500 回収50	86	鋼製品	向釘	I-1	29.07	1.1	I-15 1層	頭部は薄く、円形に形成される。軸部断面は頭部付近で楕円形状、軸部から頭部にかけて方形形状、軸部から頭部にかけて径が細くなり、頭部で急に尖る。
					5.78			
					2.56			
第500 回収50	87	鋼製品	向釘	I-2	61.24	9.6	I-15 1層	正面観において頭部が軸部より幅広くなる。頭部平面は円形近く、軸部断面は方形、軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。
					8.83			
					4.42			
第500 回収50	88	鋼製品	向釘	I-2	55.46	8.7	I-J-14 TP2層	正面観は頭部が軸部より幅広くなる。頭部平面は方形で、軸部断面も方形となる。軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。
					8.12			
					4.93			
第500 回収50	89	鋼製品	向釘	I-2	57.64	9.6	I-14 目録表内	錆粉などによる腐食が強い。頭部平面は方形と見られる。軸部断面は方形で、頭部のみ尖る。
					8.83			
					5.15			
第500 回収50	90	鋼製品	向釘	I-2	62.45	8.5	I-15 目録表内	軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。軸部断面は方形、頭部は潰れ、楕円形状に広がる。
					7.45			
					4.81			
第500 回収50	91	鋼製品	向釘	I-2	36.51	2.5	I-16 TP1層	錆による腐食が強いが、恐らく1層と考えられる向釘。木片が残った状態で出土した。軸部断面は方形。頭部は楕円形状に広がる。先頭部が木片に埋まっているため、先端形は不明。
					4.16			
					3.36			
第500 回収50	92	鋼製品	向釘	I-2	36.81	2.8	J-14 目録表内	頭部平面は円形に広がる楕円形状。軸部断面は方形形状となる。軸部から頭部にかけての径が狭くならず、先端で尖る。
					6.38			
					3.3			
第500 回収50	93	鋼製品	向釘	I-2	38.09	2.4	I-16 TP1層	頭部は潰れたのか、軸部より径が幅広くなる。頭部平面は方形。軸部断面も方形となる。頭部から頭部まで厚さがほぼ変わらず、先端のみ尖る。
					3.95			
					3.24			
第500 回収50	94	鋼製品	向釘	I-2	23.07	0.7	I-14 目録表内	小形の向釘。軸部断面は方形で、軸部から頭部にかけて径が細くなり、頭部は潰れ、両側に広がる。
					4.87			
					2.27			
第500 回収50	95	鋼製品	向釘	II	63.16	10	I-14 1層	目録に分類される釘で、正面観において軸部と頭部の幅が変わらず、垂直に立ち上がり、頭部平面方形で、軸部断面は方形形状となる。軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。錆による腐食が強い。
					5.67			
					5.67			
第500 回収50	96	鋼製品	向釘	II	62.37	7.9	I-15 1層	頭部平面は方形で、軸部断面も方形形状となる。頭部と軸部の幅が変わらず、軸部から頭部にかけてわずかに先細り、先端で尖る。
					5.67			
					5.67			
第500 回収50	97	鋼製品	向釘	II	62.23	6.3	I-14 1層	軸部から頭部にかけて垂直に立ち上がり、頭部平面は方形となる。軸部断面は方形で、軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で急に尖る。
					4.21			
					4.21			
第500 回収50	98	鋼製品	向釘	II	64.69	8	I-14 1層	頭部平面は径が潰れているが、方形形状となる。軸部断面は方形。軸部から頭部まで厚さがほぼ変わらず、先端のみ尖る。
					5.22			
					5.22			
第500 回収50	99	鋼製品	向釘	II	36.38	2.6	I-15 1層	頭部平面、軸部断面共に方形。頭部まで厚さが変わらず、先端のみ尖る。
					3.6			
					3.6			
第500 回収50	100	鋼製品	向釘	II	37.32	2.6	I-14 1層	頭部平面は少しゆがんだ方形。正面観は軸部から頭部まで幅が変わらない。軸部上部で斜めに尖っている。軸部から頭部にかけてあまり厚さが変わらず、頭部で尖る。
					3.58			
					3.58			
第500 回収50	101	鋼製品	向釘	II	35.88	2.3	K-14 1層	頭部平面方形で、軸部から頭部まで垂直に立ち上がる。軸部から頭部までの厚さがほぼ変わらず、先端のみ尖る。
					3.35			
					3.35			
第500 回収50	102	鋼製品	向釘	II	36.9	2.6	I-14 1層	目録の中ではこの37mm前後のサイズのものが最も多い。軸部から頭部まで厚さはほぼ変わらず、頭部平面は方形。軸部断面も方形となる。
					3.38			
					3.38			
第500 回収50	103	鋼製品	向釘	II	37.25	2.5	I-14 清浄	軸部から頭部にかけて垂直に立ち上がり、正面観では頭部と軸部の幅が変わらない。頭部上面は方形で、軸部断面も方形。軸部から頭部付近まではほぼ厚さが変わらず、先端で尖る。
					3.5			
					3.5			
第500 回収50	104	鋼製品	向釘	II	28.09	0.9	I-15 目録表内	目録の中でも小型の釘。頭部は曲がっている。頭部平面及び軸部断面は方形で、軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。
					2.99			
					2.98			
第500 回収50	105	鋼製品	向釘	II	37.04	2.5	K-14 1層	全体的に錆び付きが見られるが、程度は軽微。目録を判断した。頭部上面、軸部断面共に方形で、軸部から頭部にかけて厚さが変わらず、頭部で尖る。
					3.72			
					3.72			
第500 回収50	106	鋼製品	向釘	II	36.14	2.7	K-14 目録	頭部平面は方形となる。径の角が潰れ、正面観では方形となる。軸部断面は方形で、軸部から頭部にかけて径が細くなり、先端で尖る。
					3.46			
					3.46			

第 16 表 釘観察表 2

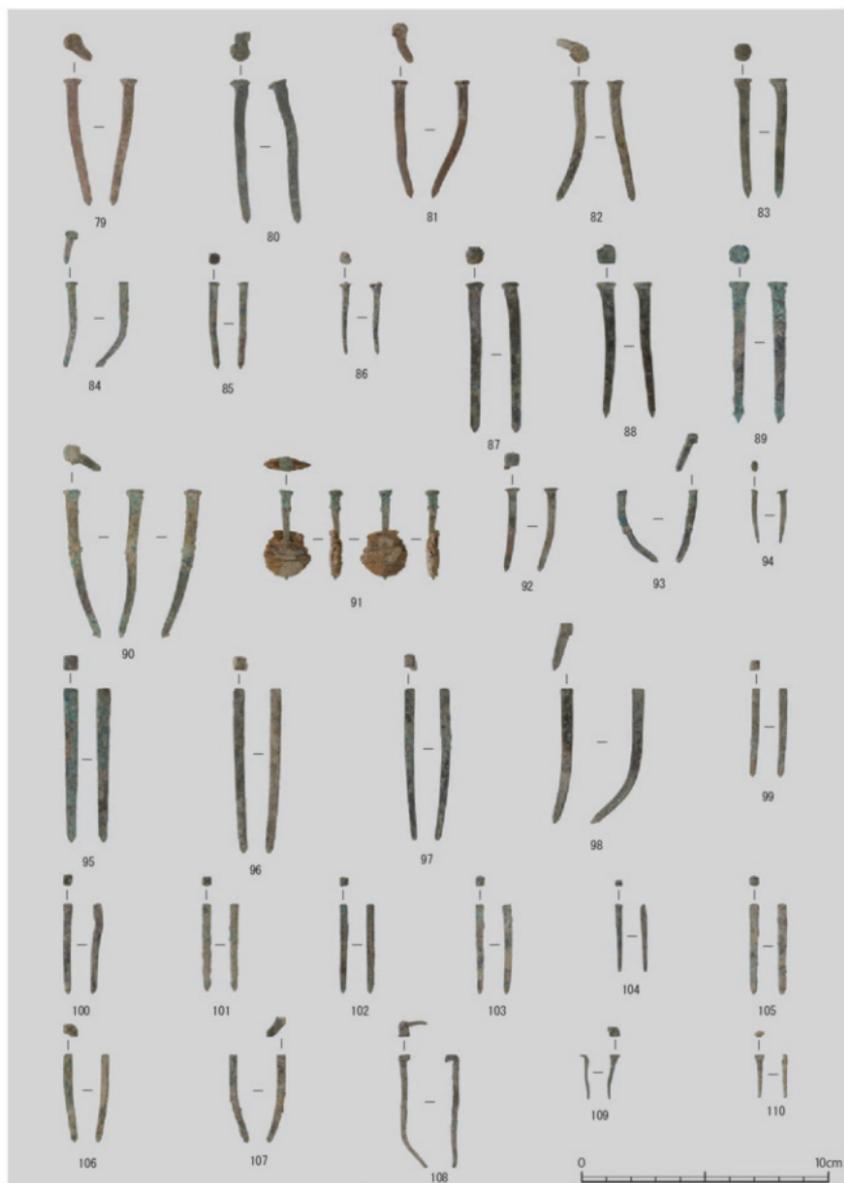
検体番号 回収番号	番号	材質	部種	頭部 分類	質量 (mg)		グッド・割	所見
					全長 頭部軸 軸端	重量		
第50回 回収50	108	鋼製品	内釘	III	50.15 4.68 2.73	1.9	K-15 I層	頭部釘の一種と思われる。頭部を深く作り曲がっている。頭部平面形は長方形状で、軸部断面は方形状。全長にして頭部が短い。軸部から頭部にかけて徐々に細くなるが、先端が欠失している。
第50回 回収50	109	鋼製品	内釘	IV	18.92 4.37 1.65	0.4	K-16 TP9 I層	小型の頭部釘。頭部はヘラ状に薄く、曲がって作られている。軸部断面は方形で、軸部から頭部にかけて徐々に細くなる。
第50回 回収50	110	鋼製品	内釘	IV	18.08 4.91 2.12	0.4	K-14 I層	頭部を欠失した小型の頭部釘と思われる。頭部付近の軸でくだけ、深く曲がっていくと考えられる。軸部断面は方形状。軸部より頭部にかけて徐々に細くなる。
第51回 回収51	111	鋼製品	内釘	その他	91.28 7.47 6.72	25.1	K-15 両色土層	軸釘として用いる釘釘。頭部は逆J字状に曲がり、頭部先端は丸みを帯びた形状になっている。軸部半ばから頭部にかけて徐々に細くなり、先端部である。
第51回 回収51	112	鋼製品	内釘	その他	43.09 4.25 2.4	8.6	J-13 I層土層2内	頭部に丸の空く釘釘。柱や壁などに打ち込み、フック等をかけるために使用したと思われる。頭部平面形は長方形状で、軸部半ばから頭部にかけて徐々に細くなる。
第51回 回収51	113	鋼製品	内釘	その他	28.85 5.03 5.03	6.8	K-15 I層	頭部平面は方形状で、側面観では斜めになる。軸部半ばで曲がっており、一回り細くなる。頭部から頭部まで厚さがほぼ変わらない。先端部は欠失しているが、恐らく先端のみ欠失と思われる。
第51回 回収51	114	鋼製品	丸釘	×	70.26 8.96 7.84	4.1	K-14 II層	今回出土した中で最大の丸釘。頭部平面形は円形で、正面観では丸みを帯びた形状になる。軸部断面は円形で、軸部から頭部にかけて徐々に細くなる。
第51回 回収51	115	鋼製品	丸釘	×	7.89 3.33 4.37	5.7	K-14 両色	比較的大型の丸釘。頭部側面観はドーム状になり、厚みを持つ。平面形は円形状で、軸部断面も円形となる。軸部から頭部にかけて徐々に細くなる。
第51回 回収51	116	鋼製品	丸釘	×	33.87 3.33 2.97	0.7	K-15 I層土層2内	頭部はふくらみのあるドーム状。軸部には後が見られる。全体的に錆が散見される。
第51回 回収51	117	鋼製品	丸釘	×	20.19 5.4 2.66	1.5	J-14 TP2 I層	頭部は磨かれているが円形の軸が覗く。軸部から頭部までほぼ同じ厚さで、先端は四角錐状になる。
第51回 回収51	118	鋼製品	丸釘	×	21.41 5.33 2.35	0.7	J-15 TP1 I層	頭部はドーム状で、三方に広がりを持つ。先端にかけて先細り。先端部は四角錐状になる。
第51回 回収51	119	鋼製品	丸釘	×	32.48 4.23 2.08	0.8	K-15 I層土層2内	頭部には円形の軸が覗く。軸部には薄く後が見られる。軸部から頭部にかけてゆるやかに先細る。
第51回 回収51	120	鋼製品	丸釘	×	14.33 3.62 2.06	0.2	K-15 I層	先端部は四角錐状で、軸部から先端にかけてゆるやかに先細る。
第51回 回収51	121	鋼製品	丸釘	×	17.71 4 1.94	0.3	K-15 I層	頭部は平たく打ち出し、三方に広がりを持つ。先端部は錐状になる。
第51回 回収51	122	鋼製品	丸釘	×	11.85 3.08 1.86	0.4	K-15 I層	頭部はドーム状に近い。先端部は欠損のため不明だが、軸部にかけてあまり細くならない。
第51回 回収51	123	鋼製品	丸釘	×	11.5 4.97 2.92	0.3	K-14 II層	先端部は欠失しているため不明。頭部は僅かに丸みを持ち、軸部には後が見られる。
第51回 回収51	124	鋼製品	丸釘	×	13.62 4.01 1.84	0.3	K-15 I層	頭部はドーム状になる。軸部から頭部にかけてゆるやかに先細る。
第51回 回収51	125	鋼製品	丸釘	×	18.99 4.38 2.04	0.4	表採	頭部は平たく打ち出し、広がりを持つ。先端にかけてゆるやかに先細り。先端部は四角錐状になる。
第51回 回収51	126	鋼製品	丸釘	×	14.05 4.49 1.88	0.3	K-14 II層	頭部はドーム状にふくらむ。軸部から頭部にかけて先細る。頭部は欠損しているため、先端形状は不明。
第51回 回収51	127	鋼製品	丸釘	×	12.38 3.23 1.98	0.2	K-14 I層土層2内	頭部は円形で、あまり広がらない。軸部から頭部までほぼ同じ厚さで、頭部で先細る。
第51回 回収51	128	鋼製品	丸釘	×	12.89 3.64 1.9	0.2	K-14 I層土層2内	頭部側面観はドーム状で、平面形は円形状になる丸釘。軸部断面は円形状で、先端部は四角錐状になる。
第51回 回収51	129	鋼製品	丸釘	×	15.27 3.96 1.98	0.3	K-14 I層土層2内	所々錆による腐食が見られ、頭部は側面によって欠損していると思われる。軸部断面は円形状で、軸部から先端にかけて徐々に細くなる。
第51回 回収51	130	鋼製品	丸釘	×	10.93 3.87 2.2	0.2	K-15 I層	頭部側面観は厚みがなく、平坦な形状。平面形は円形状。軸部は錆がわずかに見られる。先端部分は欠失しているため、形状は不明。
第51回 回収51	131	鋼製品	丸釘	×	13.87 4.38 1.83	0.2	K-14 I層土層2内	頭部平面形は円形状で、側面観では厚みのあるドーム状になる。軸部断面は円形状で、軸部から頭部にかけて徐々に細くなる。
第51回 回収51	132	鋼製品	丸釘	×	1.33 14.7 1.62	0.2	K-14 I層土層2内	小型の丸釘。先端部は鋭く丸い。頭部は膨らみのある円形状。軸部断面も円形状になる。
第51回 回収51	133	鋼製品	丸釘	×	20.54 4.18 2.06	0.3	K-15 I層	頭部側面観ではやや厚みのある平坦な形状。平面形は円形状になる。軸部断面も円形状となる。
第51回 回収51	134	鋼製品	丸釘	×	22.32 3.74 1.91	0.6	K-14 I層	頭部側面観は平たく打ち出された隅丸方形状。軸部から頭部にかけて先細る。軸部に後が見られる。

第17表 釘観察表3

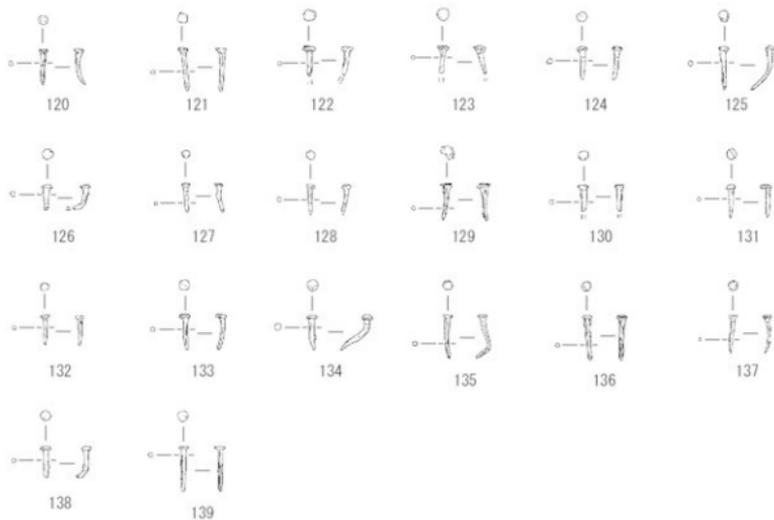
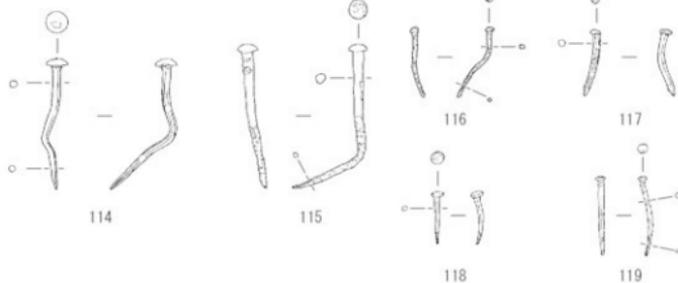
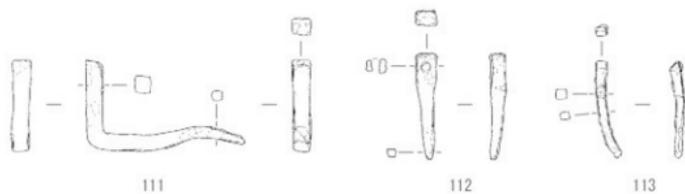
標本番号 回収番号	番号	材質	部種	頭部 分類	質量 (mg)		グッド・類	所見
					全長 頭部 重量	重量		
第51回収 回収51	136	鋼製品	丸釘	×	18.46 3.88 1.44	0.4	K-15 H 目録2内	頭部側面はドーム状で、平面側は円形状となる。軸部から頭部まで厚さが変わらず、先端部はわずかに欠損するが鈍る。
第51回収 回収51	137	鋼製品	丸釘	×	15.36 4.94 1.44	0.2	K-14 H 目録2内	頭部側面は薄く扁平、平面側は円形状。軸部から頭部にかけてゆるやかに先細り、先端は鋭く鈍る。
第51回収 回収51	139	鋼製品	丸釘	×	15.21 4.09 1.97	0.3	K-14 I 目録	頭部側面はドーム状、軸部には薄く稜線が見られる。頭部下から頭部までほぼ同じ厚さで、頭部は欠損。
第51回収 回収51	139	鋼製品	丸釘	×	18.22 4.75 2.7	0.4	K-15 H 目録2内	頭部側面は薄く扁平で、平面側は円形状。軸部から頭部まで厚さが変わらず、先端部が欠損している。
第52回収 回収52	140	鉄製品	角釘	I	115.06 12.66 7.1	23.5	J-14 TP3 I 類	ほぼ正六角の鉄釘、全体的に錆びによる割傷が見られ、身が厚まっている。軸部断面は長方形で、軸部から頭部にかけて緩やかに細くなる。
第52回収 回収52	141	鉄製品	角釘	I	10.92 8.76	27.1	K-15 H 目録2内	ほぼ正六角の鉄釘、全体的に錆び割れによる割傷が見られるが、割傷はあまりない。軸部断面は長方形で、軸部から頭部にかけて緩やかに細くなる。
第52回収 回収52	142	鉄製品	角釘	I	120.32 10.66 7.96	27	K-14 H 目録	軸部中央付近から曲がった鉄釘、全体的に錆に覆われている。頭部は軸部より一回り幅広く、長方形状になる。軸部断面も長方形状で、軸部から先端にかけて徐々に細くなる。
第52回収 回収52	143	鉄製品	角釘	I	12.14 8.17	38.7	K-15 I 目録	頭部平面形及び軸部断面が長方形状になる鋼製の角釘。先端部は錆による腐食が強く、形状は不明だが、恐らく軸部から頭部にかけて緩やかに細くなるものと思われる。
第52回収 回収52	144	鉄製品	角釘	I	142.67 12.97 9.2	31.2	K-14 H 目録	頭部が軸部より幅広くなる鉄釘。軸部断面は長方形状と思われる。全体的に錆による割傷、割傷が見られ、軸部中央は身が厚まっている。
第52回収 回収52	145	鉄製品	角釘	I	39.77 10.33 7.17	25.2	K-15 I 目録	頭部が大きく広がる鉄釘、形が小さくことによって潰れたと思われる。軸部中央より以下が大きく曲がり、頭部は錆に覆われ、形状は不明。
第53回収 回収53	146	鉄製品	角釘	II-1	123.96 8.23 7.34	31.5	K-14 H 目録	錆による割傷と割傷が全体に見られる。頭部が軸部から垂直に立ち上がり、平面形状になる。軸部断面も方形状で、軸部から頭部にかけて緩やかに細くなる。
第53回収 回収53	147	鉄製品	角釘	II-1	111.92 9.45 9.45	30.6	K-14 I 目録	頭部と軸部の幅が変わらない鉄釘。頭部平面および軸部断面は長方形状。軸部から頭部にかけて緩やかに細くなるが、先端部の腐食が強く、形状は不明。
第53回収 回収53	148	鉄製品	角釘	II-1	127.59 10.6 10.6	41.9	K-14 H 目録2内	全体的に錆による腐食が強い。頭部は所々錆に覆われているが、頭部と軸部の幅は変わらないと思われる。頭部平面、軸部断面は方形に近い長方形状。
第53回収 回収53	149	鉄製品	角釘	II-2	105.22 8.11 7.84	25.9	K-15 I 目録	軸部中央は錆による腐食、割傷が強く、身が厚まっている。頭部側面ははがれに付られ、平面形状となる。軸部断面は方形で、軸部から頭部にかけて徐々に細くなる。
第53回収 回収53	150	鉄製品	角釘	II-2	84.67 3.6 3.95	3.4	K-15 H 目録2内	比較的小型の鋼製角釘。側面側は頭部が斜めに作られている。頭部平面形及び軸部断面は方形状。軸部から先端にかけて緩やかに細くなる。
第53回収 回収53	151	鉄製品	角釘	IV	99.61 10.01 8.53	12.5	K-13 I3 I 類	頭部は薄く幅広く作られる大型の鉄釘。頭部が丸く一種と思われる。軸部断面は方形状で、軸部から先端にかけて先が細くなる。
第54回収 回収54	152	鉄製品	角釘	IV	48.55 9.11 4.97	4.6	K-16 TP9 I 類	比較的小型の鋼製角釘。頭部は薄く幅広く、先端が丸くなる。錆による割傷が見られるが、軸部断面は方形状と思われる。
第54回収 回収54	153	鉄製品	角釘	IV	38.66 7.96 3.74	2.1	J-14 TP1 I 類	小型の鋼製角釘。軸部と頭部の厚目できつ、頭部は薄く幅広くなる。軸部は鈍く、断面は方形状となり、軸部から頭部にかけて細くなる。
第54回収 回収54	154	鉄製品	角釘	IV	38.33 5.94 3.12	1.8	J-14 TP3 I 類	小型の鋼製角釘。頭部はくびれ、薄くなる。軸部断面は方形状で、先端付近の断面は円形に近くなり、鋭く鈍る。
第54回収 回収54	155	鉄製品	角釘	IV	38.71 5.09 3.08	1.3	K-14 H 目録	小型の鋼製角釘。軸部中央付近で折れ曲がっている。軸部断面は方形状で、軸部から頭部にかけて徐々に細くなる。
第54回収 回収54	156	鉄製品	角釘	その他	96.3 8.71 11.74	40.6	K-16 TP10 I 類	軸釘の一種。錆による割傷などが全体的に見られるが、元の形状を保っている。頭部は斜めに作られ、先端の角を取り、丸みを帯びた形状になっている。軸部で曲げられ、物をさけるための形状になっている。
第54回収 回収54	157	鉄製品	角釘	その他	91.32 7.38 5.91	15.8	K-14 H 目録	軸釘とを用いられた新釘。全体的に錆びによる割傷と割傷が見られ、身が厚まっている。軸部中央から頭部にかけて徐々に細くなる。頭部先端は斜めに作られ、鋭さを帯びるのに適している。
第54回収 回収54	158	鉄製品	釘	-	97.9 -	7.6	K-14 H 目録	錆による割傷、割傷によって身が厚まっている。頭部は欠損しているため形状は不明。軸部断面では、中央部は厚くなり、両端部付近になるにつれて長方形状に薄く扁平になる。
第54回収 回収54	159	鉄製品	釘	-	92.1 -	15.4	K-14 I 目録	全体的に保存状態は良い。片側の頭部が欠損している。軸部断面は長方形状で、全体的に5mmほどの厚みを持ち、先端部のみ鈍る。先端部は内側に曲がっている。
第54回収 回収54	160	鉄製品	釘	-	97.5 -	9.2	K-14 H 目録2	薄く扁平な形状で、片側の先端部のみ欠損する。軸部断面は長方形状で、厚さは全体的に3mm程度。平面側では中央部分が最も太く、先端に向かうにつれて細くなる。
第54回収 回収54	161	鉄製品	釘	-	111.6 -	34.2	K-14 I 目録	軸部中央で折れ曲がり、頭部の片側が欠損する。軸部断面は方形に近い長方形状で、中央付近の厚さは8mmほどになる。両端部に向かうにつれて細くなる。先端へゆるやかに細くなる。
第54回収 回収54	162	鉄製品	釘	-	42.3 -	3.5	J-15-16 TP7 I 類	出土した中で最も小型の釘。軸部断面は長方形状で、両端が先細る。形状としては合釘に近いが、断面の厚みのなから確認した。



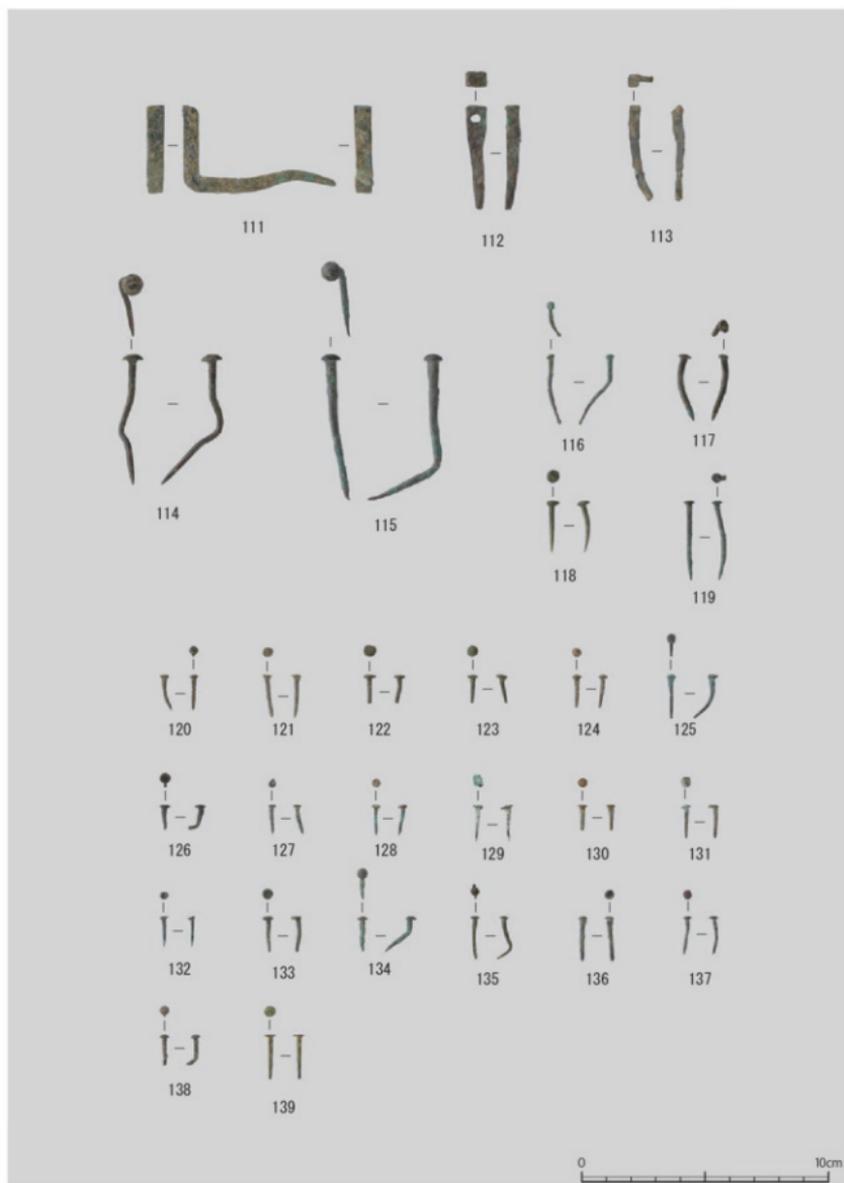
第50图 铜角釘 1



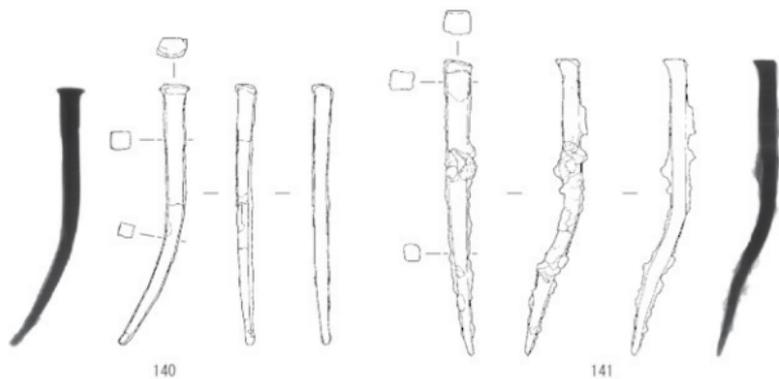
图版 50 銅角釘 1



第 51 図 銅角釘 2・丸釘



图版 51 銅角釘 2 · 丸釘



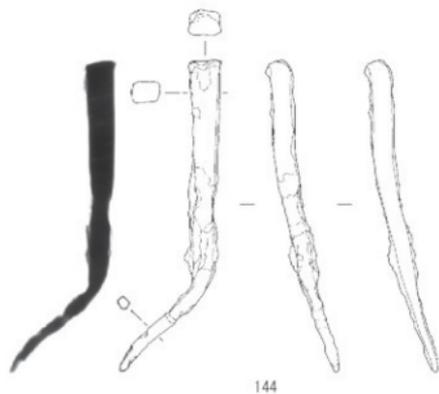
140

141



142

143

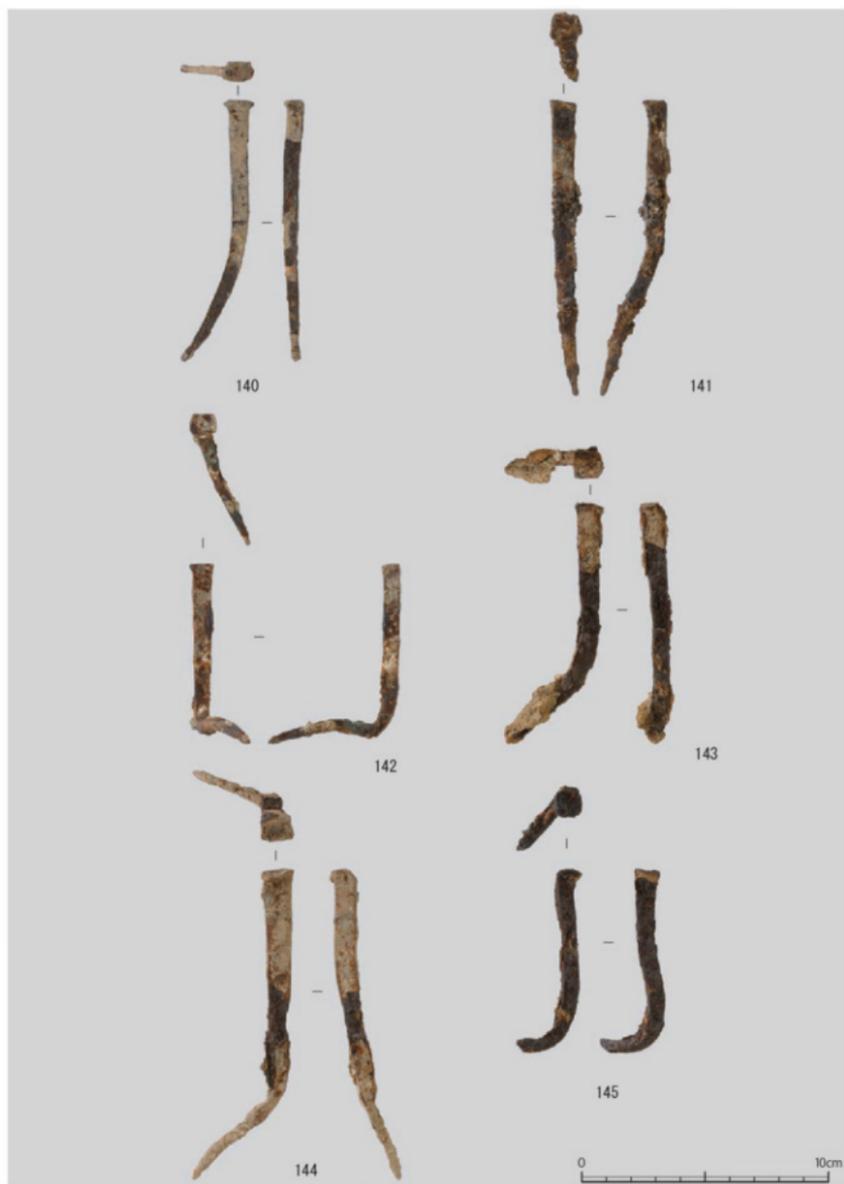


144

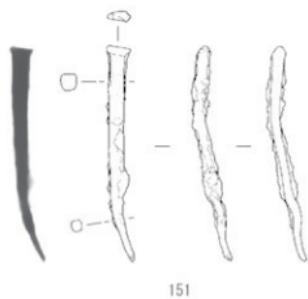
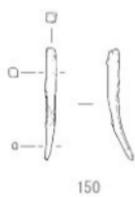
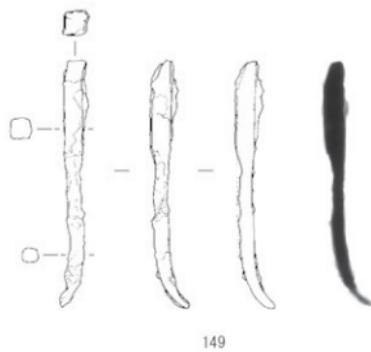
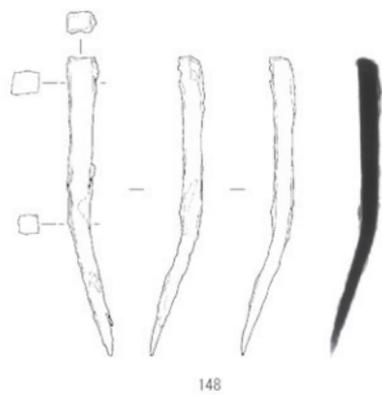
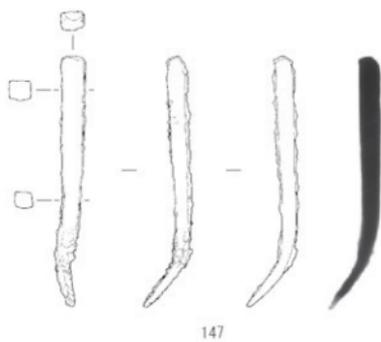
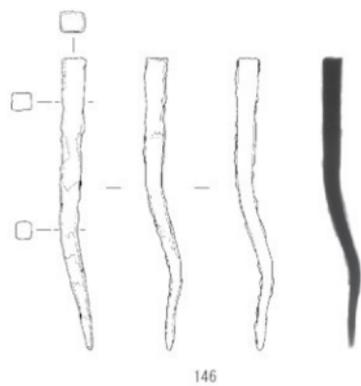
145



第 52 図 鉄角釘



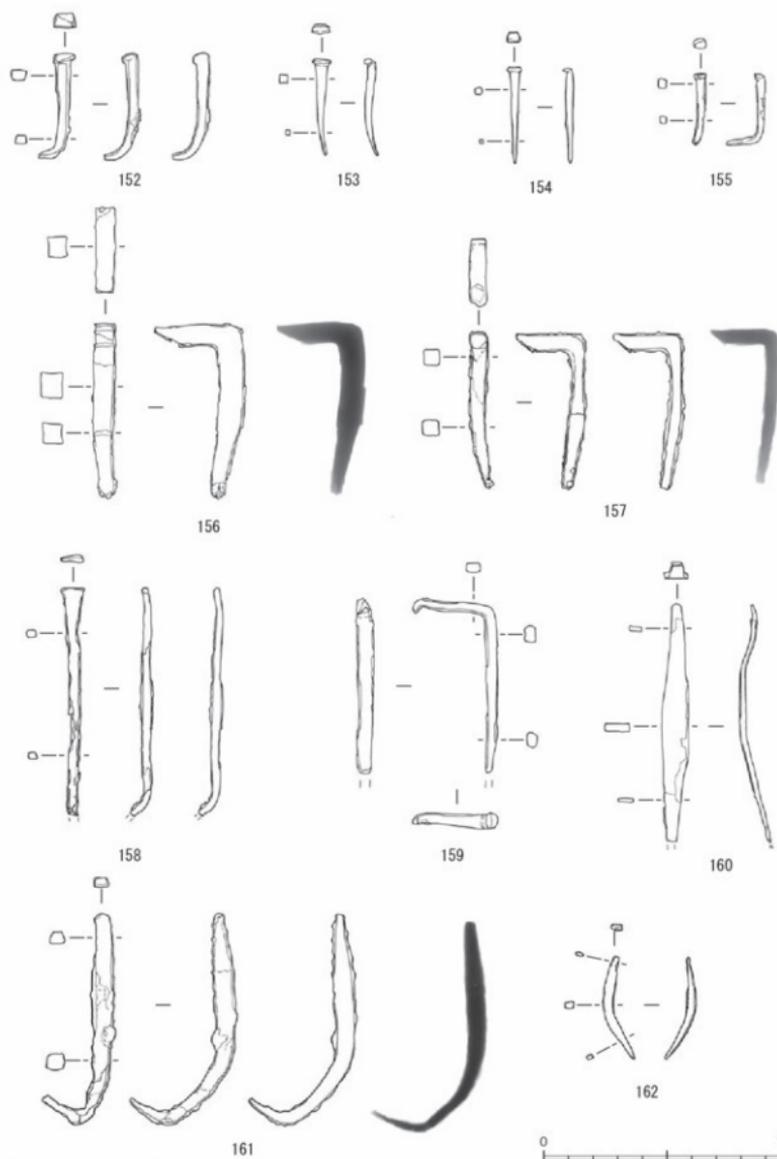
図版 52 鉄角釘 1



第 53 図 鉄角釘 2



図版 53 鉄角釘 2



第54図 鉄角釘3・鋸



図版 54 鐵角釘 3・釘

第7節 銭貨

銭貨は、近世以前では嘉慶通宝と寛永通宝がそれぞれ1点、出土している。他は戦後の琉球政府時代の通貨が攪乱層ならびに表探で得られている。

第19表 銭貨観察表

標記番号 採取番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第550区 採取55	163	銅製品	嘉慶通宝	0.9	F-13 TP13(ST1)層	半分に欠損した嘉慶通宝で「通」と「慶」が判読できる。背面には満洲文字で「宝」が刻まれている。直径2.5cm、厚さ0.9mm。
第550区 採取55	164	銅製品	寛永通宝	4	L-16 TP8 I層	銭貨の書体から寛永永に属する。直径2.5cm、厚さ2mm。
第550区 採取55	165	銅製品	5セント銅貨	5.3	L-16 TP11 I層	酸化が著しく、わずかに表面のセンチメートルの標度が確認として確認できる。直径2.2cm、厚さ2.7mm。
第550区 採取55	166	銅製品	5セント銅貨	5	L-16 TP11 I層	酸化が著しいが、文字ならびにトーマス・ジュリアーソン像が確認できる。直径2.1cm、厚さ2.7mm。
第550区 採取55	167	銅製品	5セント銅貨	4.9	表探	酸化が著しいが、文字が読み取れる。直径2.1cm、厚さ2.1mm。
第550区 採取55	168	銅製品	5セント銅貨	4.9	L-15 I層	残りは良好である。直径2.1cm、厚さ1.9mm。
第550区 採取55	169		10セント ニッケル貨	2.4	L-16 TP11 I層	残存状況は良好である。直径1.8cm、厚さ1.3mm。

第8節 その他金属製品

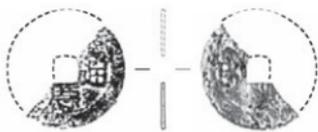
煙管、簪、銭貨、竿秤、帯金具、兩種の金具、薬研といった特徴的な製品や用途不明の製品をまとめた。銭貨については銭銘の判読が可能なものや同定が可能なものを取り上げた。縁金具は、全て文様は見られないが、様々な形態が認められる。これらは調度品に付く金具と思われる。

第20表 その他金属製品観察表1

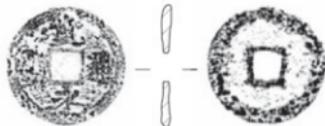
標記番号 採取番号	番号	材質	器種	重量(g)	グリッド・層	所見
第560区 採取55	170		陶製品	5.7	L-14 II層	用途は不明の、板金を嵌状に繋いだ陶製品。繋ぎ目は分離している。直径1.3cmであるが、端部はやや平まる。
第560区 採取55	171		鉤尾	4.3	J-15, 16 TP7 I層	帯金具の先端に取り付く金具。縦断面は扇平状となり、内部は空洞になっている。端部は細い窪みが付けられており、反対側の帯を留める孔は縦長さ2mmで幅は3mm。
第560区 採取55	172		竿秤	62.2	L-14 II層	棒状製品で上下に各1方所。左右に可動する突起が見られ、更にそれに直径1.7cmの部が取り付け、また、突起の反対側には約2mmの凹孔が開けられている。端部は細断しており、もう一方の端部は中や重なり、方孔が上下に見られる。この方孔には両り金具が取り付けられていたものと思われる。長さ12.4cm。
第560区 採取55	173		受け金具	8.9	L-14 I層	巾着の受け金具。欠損しており、全形は窺えない。受け部は円柱状となり、支部の断面形は五角形状となる。
第560区 採取56	174			499	L-15 II層Dウー一括	変形が著しく、筒形が判然としない。口縁部と思われる区画帯が見られることから器物の可能性がある。厚さは2～3mmと薄く、文様等は見られない。
第560区 採取56	175			1940	I-J-14 TP2深部時	銅板。高熱による融解により、木片や金風片、神護産陶器片を覆って凝固した銅塊。断面状となっている面がある一方で、反対面は平坦であることから、石炭などの平坦な床面で凝固したものと思われる。
第570区 採取57	176	銅製品	薬研	151.5	L-15 II層Dウー一括	高熱による融解で大きく変形しているが、全形は窺える。舟形の薬研でV字溝と注ぎ口が見える。板状の脚が底辺に取り付く。
第580区 採取58	177		煮湯具	1195	F-11 II層深部内	高熱による融解で大きく変形しているが、全形は窺える。筒状の容器を縁状の容器に収め、縁状の容器の上のみに輪状の蓋が覆っている。筒状容器の底部と縁状容器の側面に大小の凹孔が各11方所、開けられている。厚さは1mmと薄いため、全体的に丸くOの形が各所に見られる。

第 21 表 その他金属製品観察表 2

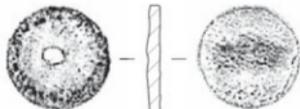
標記番号 国産番号	番号	材質	品種	重量(g)	サイズ・寸法	所見
第59国 国産59	178			124.3	1-15 H 目録2ウ 部	梵鐘の乳と考えられるが、厚みが4~5mmと極めて薄いため断定はできない。乳の断面形状は分銅状となることから、梵鐘であれば中央まで通る可能性がある。最大幅2.3g
第59国 国産59	179			15.6	1-14 I 類	脚または接続用の金具と考えられるが、詳細は不明。断面は25字状となり、端部には直径2mmの円孔が見られる。裏面には球状の突起が附着している。厚みは2mm
第59国 国産59	180			16.9	1-15 I 類	厚さ2mmの銅板で、二つ折れで大きく変形している。長方形で文様は見られない。用途は不明。
第59国 国産59	181			20.7	K-14 H 目録2内3	左右対称の扇形となる銅板。接続用の金具が、幅広がり、縁が弧状となり、もう一方の端部には幅8mmの突起が付く。直径2mmと4mmの円孔がそれぞれ1ヶ所見られる。
第59国 国産59	182	銅製品	棒状製品	289.8	1-14 I 類	断面形状が六角形状となる棒状製品。高熱による融解で変形し、破損も著しい。先端部は丸みを帯びているが接合面は稜を有する。先端にかけて縁やかに屈曲しているが、破損による変形か原形かは不明。また先端部近くには刻み跡が所見される。鋳造品。その形状から第60国183と同一体になるものと思われる。
第59国 国産59	183		棒状製品	106	1-14 I 類	断面形状が六角形状となる棒状製品。高熱による融解で先端部は欠損している。末広がりに開き、内部は中空となる。素と思われる突起が付属しているが、その先端部も高熱による融解で欠損している。番が脚部か。鋳造品。第39国182と同一体になるものと思われる。最大径6.1cm。
第60国 国産60	184		鎌金具	15.2	K-14 H 目録2内	調度品などの鎌金具。端部は入八反を連続させ、直向に折っていることから両面に取り付く金具であることが分かる。また刻印に伸びているが、欠損しているため金形を窺うことができない。直径2mmの新留の円孔が両端部にそれぞれ2ヶ所、中央部に2ヶ所の計6ヶ所開けられている。厚みは2.1~1.5mm。
第60国 国産60	185		鎌金具	5	K-14 H 目録2内	断面形状の字状に折れた鎌金具。欠損しているため、金形は窺えない。端部に直ぐには刻みが付かず、それぞれ打たれている。端部は入八反となり、先端部には切り込みは丸味を有する。
第60国 国産60	186		鎌金具	2.8	K-14 H 目録	調度品などの鎌金具が、欠損しているため金形は窺うことができない。横断面形状の字状となり、端部近くには直径2mmの新留の円孔が2ヶ所開けられている。角部は角欠きがなされる。厚みは2.1~1.5mm。
第60国 国産60	187		鎌金具	6.1	K-14 H 目録2内	調度品などの鎌金具。T字状の金具で、端部近くに刻みが所行打たれている。端部は入八反となり、先端部と切り込みは丸味を有する。第60国188と同形種であるが、やや小振りとなる。厚みは2.1~1.5mm。
第60国 国産60	188		鎌金具	4.4	K-14 H 目録2内	調度品などの鎌金具。T字状の金具で、端部は入八反となり、先端部は実らず平組で切り込みは丸味を有する。直径1.5mmの新留の円孔が端部近くに開けられている。厚みは2.1~1.5mm。
第60国 国産60	189		鎌金具	16.2	K-14 H 目録2内	大きく変形しているが、原形は窺うことができる。櫛や簞笥などの調度品の鉄部に取り付く鎌金具。T字状の銅板を切り出し、直向にそれぞれの端部を直向に折っている。断面形状は十字状に折れ、端部は平組になる。直径2mmの円孔が10ヶ所見られ、うち4ヶ所に縁が付く。
第60国 国産60	190		鎌金具	4.2	K-14 H 目録2内	調度品などの鎌金具。T字状の金具で、新が端部近くには折られ打たれている。端部は入八反となり、先端部と切り込みは丸味を有する点で特徴的である。厚みは2.1~1.5mm。
第60国 国産60	191	銅製品	鎌金具	2.4	K-14 H 目録2内	調度品などの鎌金具。十字状の銅板を切り出し、縦向の軸部の中央部を直向に折る。端部は入八反となり、先端部は実らず平組となり、切り込みは丸味を有する。幅広の端部には入八反を連続させている。また、直径1.5mmの新留の円孔が入八反の切り込み毎に1ヶ所、開けられている。
第61国 国産61	192	鉄製品	刀子	80.1	1-16 TP10 I 類	鋳製の刀子か、鋳製れ並びに鋳製が著しいことから、原形はほとんど窺えない。僅かに素と思われる首状の突起が窺われる。全長は12.5cm。
第61国 国産61	193	銅製品	簪	2.8	F-G-13 TP14IV 類	押差の簪。銅製。カブは耳掻き状となり、先端部は丸く成形する。頭の前部は六角形状、平の前部は扁平六角形状となる。平は僅かに歪みが見られ、平の先端部は尖らせる。カブ長15.5mm、頭長20mm、平長54.5mm、平長27.5mm。
第61国 国産61	194	銅製品	排管	4.32	J-14 TP31 類	排管の扉首。丸蓋は欠損している。厚さ1mmの銅板を管状に成形しており、変形により合わせ部が開く。全長4.3cm。
第61国 国産61	195	銅製品	排管	5.96		排管の扉首。丸蓋部分は破損により分離している。丸蓋の内径は16.5mmで銅板は厚みも有する。全長4.5cm、小径径22mm。
第61国 国産61	196	アルミ 製品	排管	9.47	1-15 TP11 I 類	排管の吸口。大きく変形し、一部欠損する。小口は両側へ丸く折り返しが見られる。全長4.2cm。
第61国 国産61	197	銅製品	排管	4.9	1-14 I 類	排管の吸口。小口部分は大きく変形しているが、全体的に残りは良好である。長さ1mmの銅板を管状に成形しており、変形により合わせ部が開く。内径は12.5mmで、内径へ平まる。全長6.1cm。



163



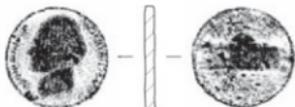
164



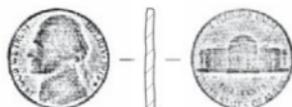
165



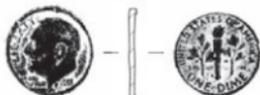
166



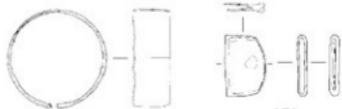
167



168



169

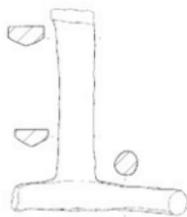


170

171



172



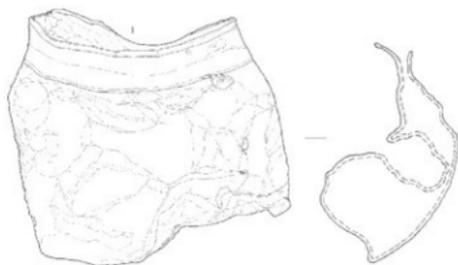
173



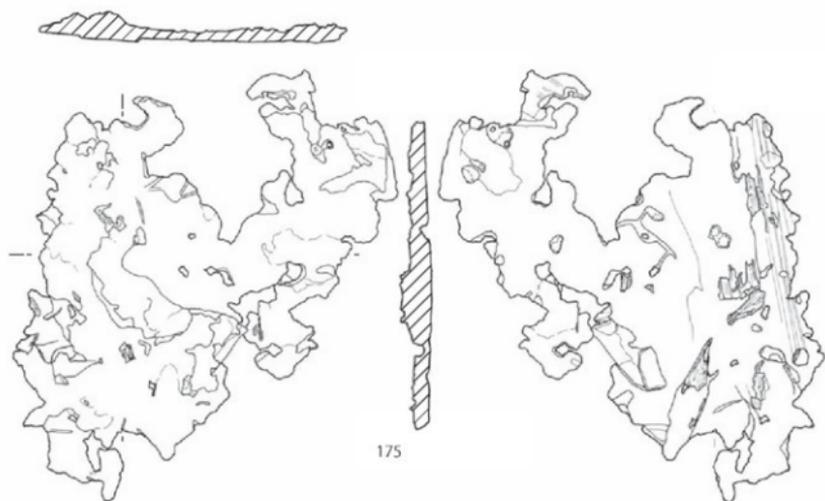
第55図 銭貨・その他遺物 1



図版 55 銭貨・その他遺物 1



174



175



第56図 その他遺物2



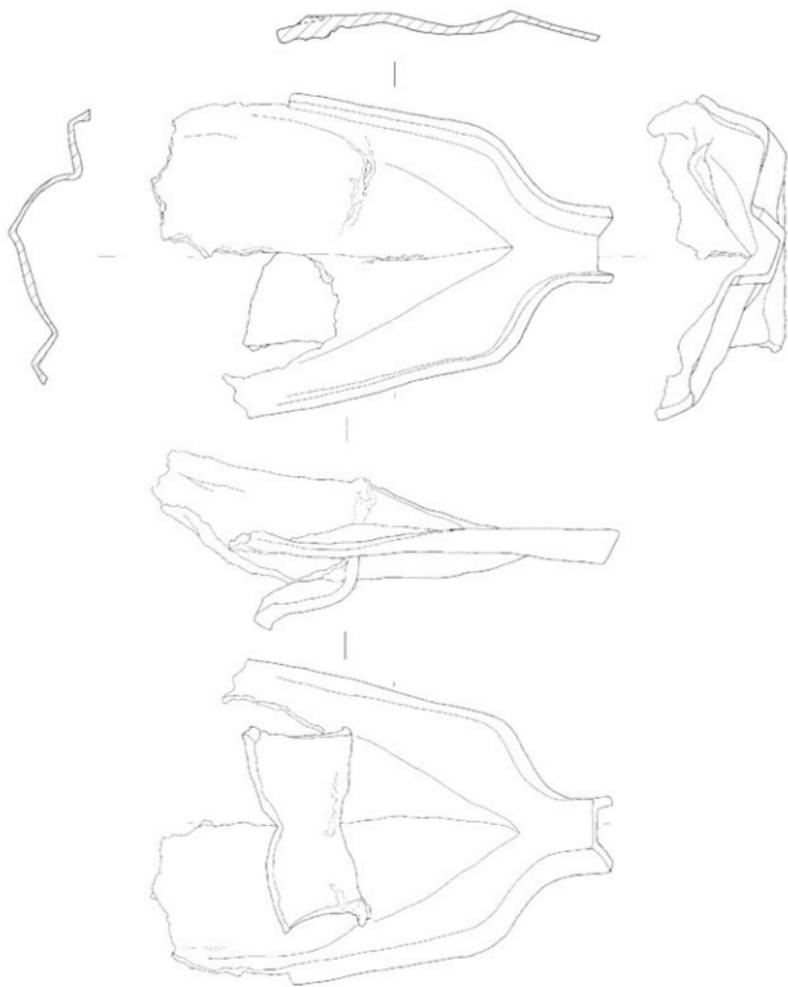
174



175



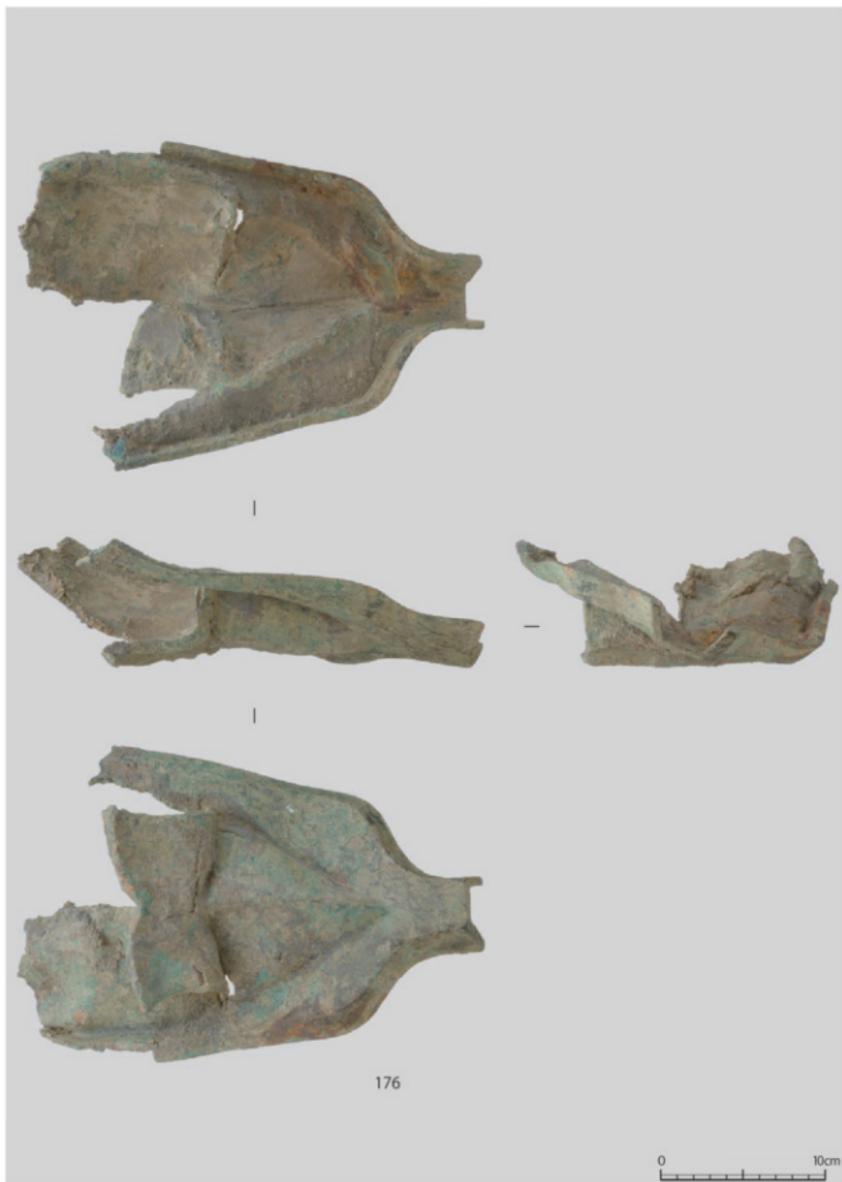
図版 56 その他遺物 2



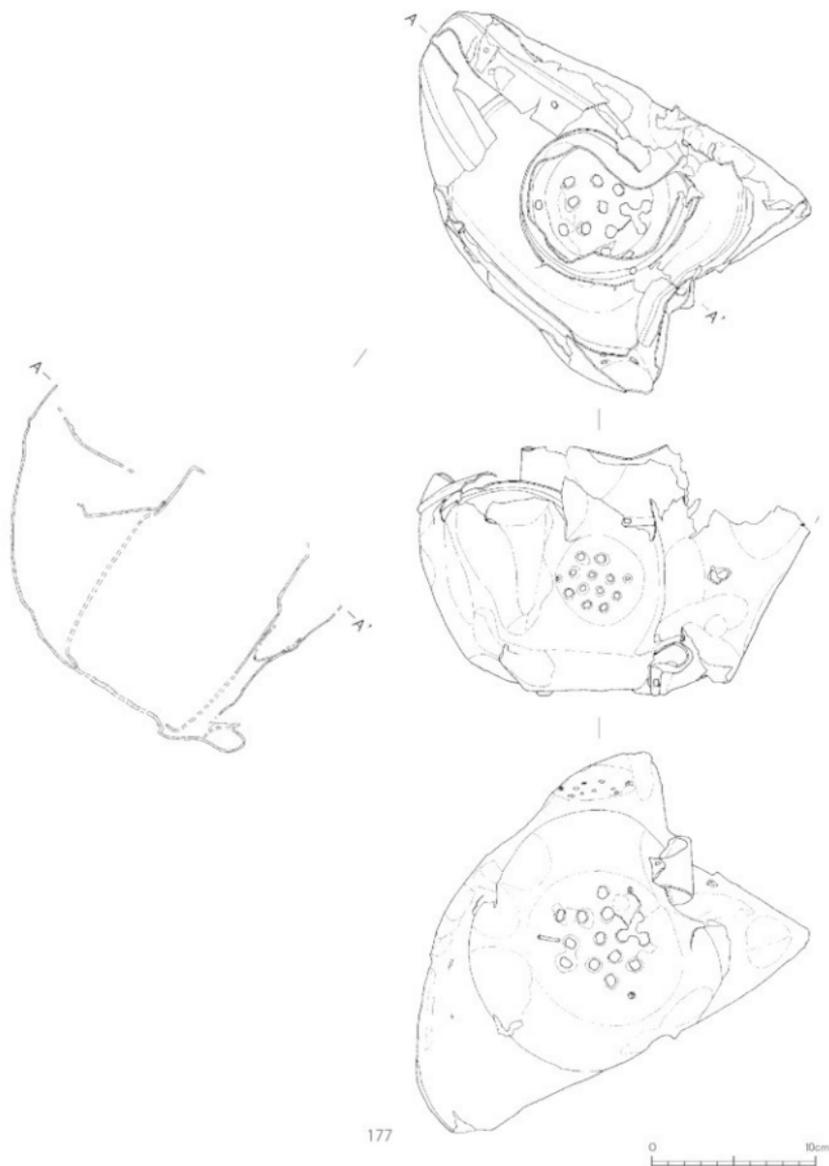
176



第 57 図 その他遺物 3



図版 57 その他遺物 3

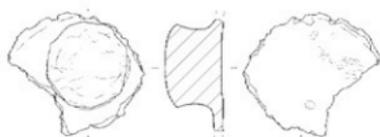


177

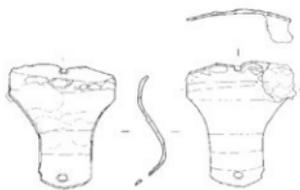
第58図 その他遺物4



図版 58 その他遺物 4



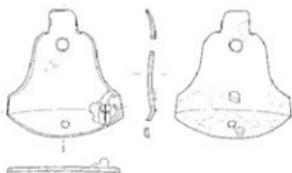
178



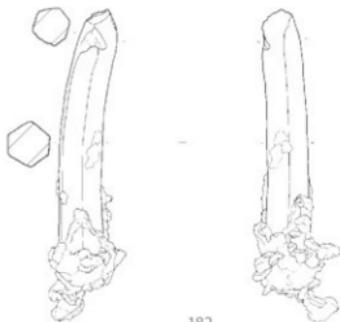
179



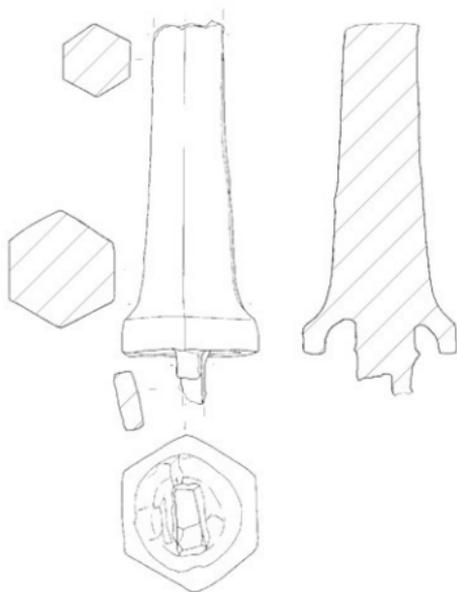
180



181



182

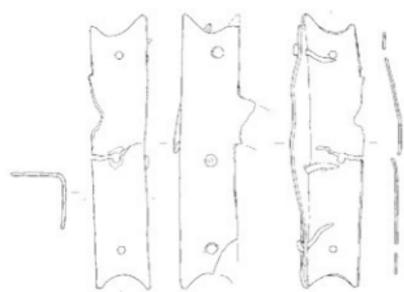


183

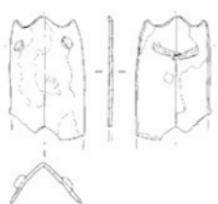




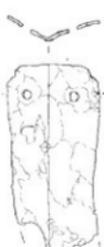
図版 59 その他遺物 5



184



185



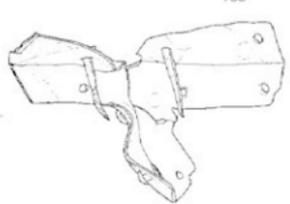
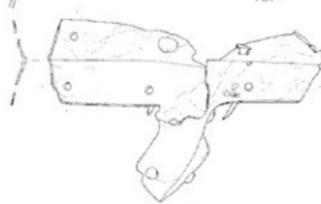
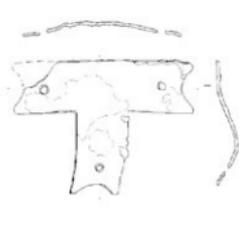
186



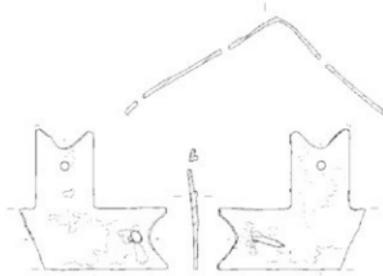
187



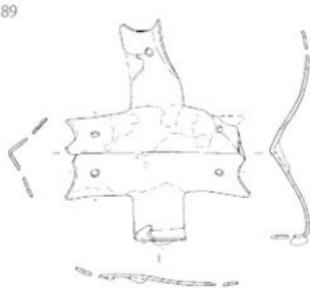
188



189



190



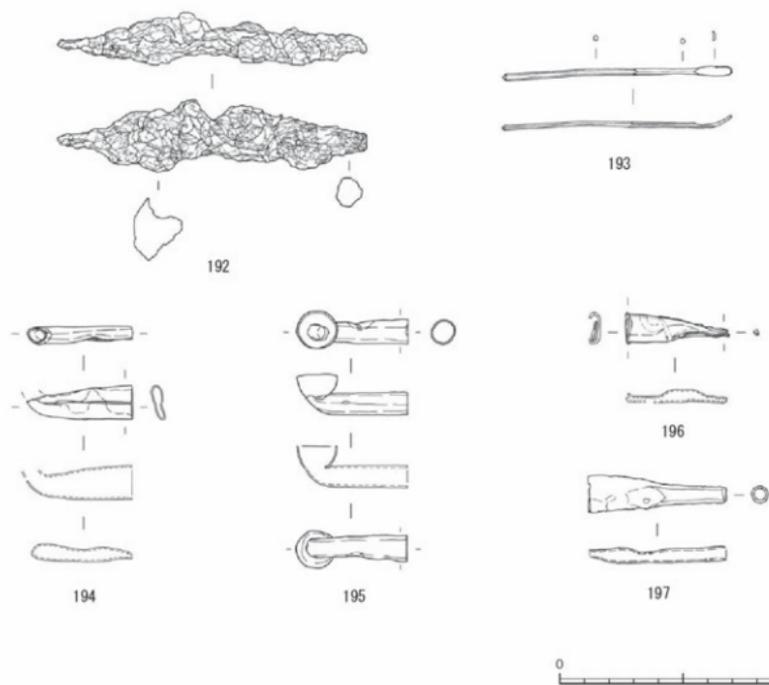
191



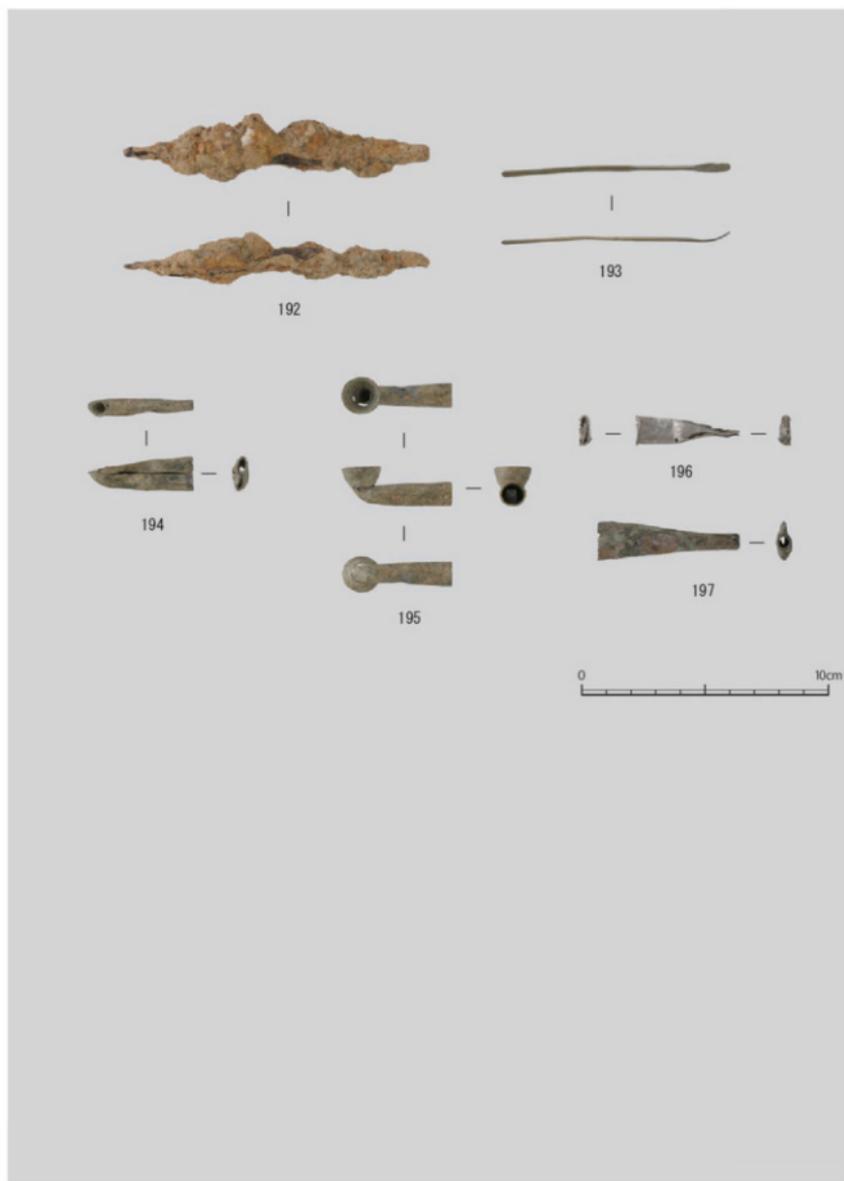
第60図 その他遺物6



図版 60 その他遺物 6



第61図 その他遺物7



図版 61 その他遺物 7

第6章 遺物（その他の遺物）

平成20年度発掘調査において出土した遺物の中で『中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿跡発掘調査報告書（2）—』において、金属製品以外での未報告の出土遺物を本章で報告するものである。とくに残存率の高い陶磁器、瓦を計7点取り上げた。

第62図1 沖縄産陶器の摺鉢。口縁部はくの字状に外反し、鈎状となる。口縁直下の器壁はやや薄くなり、胴上部は幅広の隆帯文が見られる。内面胴部にはわずかに刷毛目が見られる。外面には透明釉が、内面は黒褐色釉が共に薄く施される。内面の器表には微小な凹凸が見られる。胎土は細かく、茶褐色を呈し、小孔がわずかに見られ、黄色、白色粗砂が混入する。時期は18-19世紀か。Aトレンチ J-11出土。

第62図2 中国産青磁碗の口縁部。直口口縁で口唇部は丸く取める。外面胴部には丸みを帯びた弁先の連弁文が線彫りで描かれる。外面の器表には大小の小孔が見られる。青緑色の釉を内外面共にやや厚く施している。胎土は密で灰白色を呈し、白・黒粗粒子が多く混入する。また、断面が茶褐色もしくは黒色に変色している部分が見られる。時期は15世紀後半～16世紀前半。龍泉窯系。Aトレンチ J-11出土。

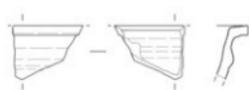
第62図3 中国産青磁皿の高台部。高台は低く内線りは浅い。畳付けは水平に切られているが、幅は一定ではない。胴部は膨らみを有する。暗オリーブ色の釉を内外面共に薄く施す。内底面は円状に釉剥ぎがなされ、外面は胴部から高台外面から畳付けにかけて施釉される。外面は2次的に被熱したため、一部、器色が白色に変色している。胎土は密で灰白色を呈し、黄色、白色粗砂が混入する。時期は15世紀で龍泉窯系。Aトレンチ J-10出土。

第62図4 中国産青磁の胴部で壺または瓶。膨らみを有する胴部で花卉を縁取った枠内に「福」の前し字が型押しで大きく刻まれている。その上部にも文様はみられるが、全体構成は不明。内面は型押しの際の指押し痕が確認できる。焼成はやや不良で胎土は密で乳白色となる。また、小孔も見られる。暗オリーブ色の釉を内外面共にやや厚く施す。内外面共に2次的に被熱したため、器色に一部白色が混じる。時期は15世紀で龍泉窯系。Aトレンチ J-11出土。

第62図5 本土産白磁皿の口縁部から胴部にかけての資料。薄手で、かつ無文の外反皿で口縁端部は僅かに肥厚する。胴部は膨らみを有する。胎土は密で白色を呈する。黒色の粗粒子が僅かに混入する。内外面共に透明釉を薄く施す。時期は18世紀～19世紀で徳化窯系。Aトレンチ J-10出土。

第62図6 明朝系瓦の軒丸瓦。両端部は欠損しているものの、全形は窺うことができる。瓦当部には花卉が牡丹様となる蓮華文が見られる。花文の下部にある茎は2条の縦線線で表され、左右には末広がりになる葉文が刻まれる。平瓦部が一部残り、瓦当部との接続部とは丁寧なナデ調整がなされている。色調は赤褐色であるが色斑が見られる。胎土は密で、褐・白色の粗粒子が多く混入している。Aトレンチ J-10出土。

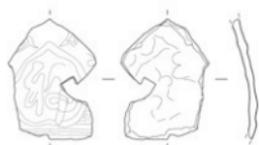
第62図7 用途不明の鉄製品と明朝系平瓦が接着する。鉄製品は錆化が著しく、瓦は錆に取り込まれる形で接着している。平瓦は狭端部周辺部分で、凸面は横ナデ調整痕が見られ、端部は僅かに肥厚する。鉄製品は厚さ7mmの鉄板状で、端部が大きく湾曲する。また、瓦との接着部周辺には錆が瘤状となって多数確認できることから、別の鉄製品が錆化により接着している可能性が考えられる。



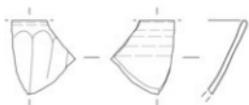
1



3



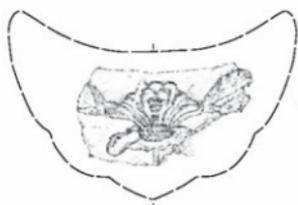
4



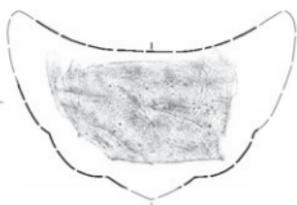
2



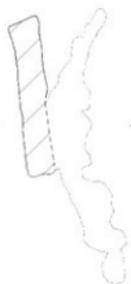
5



6



7



7



第 62 図 その他遺物（金属製品以外）



図版 62 その他遺物（金属製品以外）

第7章 金属製品の科学分析

バリノ・サーヴェイ株式会社

はじめに

中城御殿は、沖縄県那覇市首里、旧沖縄県立博物館跡に所在し、首里城から北へ250mほど離れた台地上に位置する。台地は第四紀更新世の琉球層群の那覇層を構成する碎屑性石灰岩、いわゆる琉球石灰岩からなる。

発掘調査では、琉球国王の世子の邸宅とされる中城御殿に関わる多数の遺構や遺物が確認されている。本報告では、調査区より出土した金属製品の材質に関する情報を得ることを目的とし、蛍光X線分析による非破壊調査を実施する。

1. 試料

試料は、表1に掲げた金属製品10点である。なお、これら試料は錆化を受けており、表面には腐食生成物が認められる。また、通し No.262 と No.255 は金による加飾が見られる製品であり、分析にあたっては加飾されていない地の部分と加飾部分の2箇所を対象とした。

第23表 試料

通しNo.	旧No.	種類1	種類2
291	257	青銅	釘隠しの座
2223	1046	すず製品	フタ
454	526	青銅	
279	861	青銅	
286	234	青銅	
275	313	青銅	
262	32	青銅	八双金具
257	27		
282	不明	青銅	金具?
255			

2. 分析方法

蛍光X線分析はサンプリングが困難な文化財の材質調査に広く用いられている手法であり、エネルギー分散型装置は、試料を破壊せずに元素情報を引き出せるため多用される調査法である。表面分析法であるために、遺物表面の状況によって結果が大きく左右され、遺物表面が錆化の影響を受けている場合には遺物本来の元素組成を求めることが難しいが、遺物保存の観点から考えれば、外観上の変化を伴わない本分析法は遺物の構成元素を知るためには極めて有効な手法となる。

本調査では、非破壊を前提とした概査を目的とすることから、試料はクリーニング処理や錆（腐食生成物）の除去を行わず、調査に供する。なお、調査に用いた装置は、セイコーインスツルメンツ（株）製エネルギー分散型蛍光X線分析装置（SEA2120L）である。本装置は、下面照射型の装置であり、X線管球はRh、コリメーターサイズは10mmφである。測定条件の詳細については結果とともに図中に掲げる。なお、写真図版に示した丸枠が今回測定を行ったおよその測定箇所である。

3. 結果

蛍光X線定性スペクトルを図1～8に掲げ、以下に特徴を記載する。

(1) 通し No.291 (旧 No.257 青銅 釘隠しの座)

銅 (Cu) が特徴的に検出されたほか、鉄 (Fe)、金 (Au)、鉛 (Pb) が認められる。腐食生成物の上から測定を行っているため、定量的評価は避けるが、スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄、金、鉛は微量程度である。純銅が用いられていたと推定される。

(2) 通し No.2223 (旧 No.1046 すず製品 フタ)

アルミニウム (Al) が特徴的に検出されたほか、ケイ素 (Si)、リン (P)、カルシウム (Ca)、鉄、銅、亜鉛 (Zn)、鉛が認められる。スペクトルを見る限りではアルミニウムを主とし、ケイ素や鉄を伴う。銅、亜鉛、鉛といった一般的な銅合金に見られる金属元素は少量から微量程度である。蛍光 X 線分析による表面分析では確かなことは言えないが、アルミニウム合金の可能性が疑われる。

(3) 通し No.454 (旧 No.526 青銅)

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄、スズ (Sn)、鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮 (黄銅) が用いられていたと推定される。

(4) 通し No.279 (旧 No.861 青銅)

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄、鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮 (黄銅) が用いられていたと推定される。

(5) 通し No.286 (旧 No.234 青銅)

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄、スズ、金、鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮 (黄銅) が用いられていたと推定される。

(6) 通し No.275 (旧 No.313 青銅)

銅が特徴的に検出されたほか、鉄、金、鉛が認められる。スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄、金、鉛は微量程度である。純銅が用いられていたと推定される。

(7) 通し No.262 (旧 No.32 青銅 八双金具)

地の部分では、銅が特徴的に検出されたほか、鉄、ヒ素 (As)、金、鉛が認められる。スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄、ヒ素、金、鉛は微量程度である。また、加飾部分には金および水銀 (Hg) が伴われる。地には純銅が用いられていたと推定され、アマルガム法による鍍金によって加飾されたものと考えられる。

(8) 通し No.257 (旧 No.27)

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄、スズ、鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮 (黄銅) が用いられていたと推定される。

(9) 通し No.282 (旧 No. 不明 青銅 金具?)

銅が特徴的に検出されたほか、亜鉛も伴われる。他に鉄、スズ、鉛も認められるが、スペクトルを見る限りでは微量程度である。真鍮 (黄銅) が用いられていたと推定される。

(10) 通し No.255

地の部分では、銅が特徴的に検出されたほか、鉄、金、鉛が認められる。スペクトルを見る限りでは銅を主とし、鉄、金、鉛は微量程度である。また、加飾部分には金と銀および水銀 (Hg) が伴われる。地には純銅が用いられていたと推定され、アマルガム法による鍍金によって加飾されたものと考えられる。

4. 考察

調査の結果、7 試料が青銅とされているが、通し No.291、275、262、255 の 4 試料は純銅製、通し No.454、279、286、257、282 の 5 試料は真鍮 (黄銅) 製と推定され、いずれも銅と錫の合金である青銅 (スズ青銅) ではないことが示唆された。また、通し No.262 と No.255 における加飾細工は金と同時に水銀が検出された特徴から、アマルガム法による鍍金が施されたと考えられる。

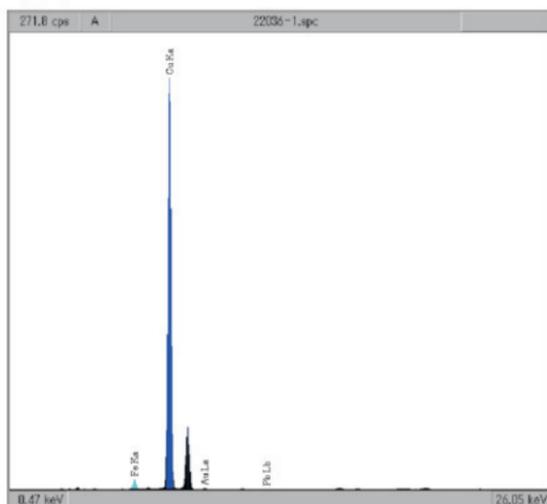
一方、すず製品とされている通し No.2223 は、スズのスペクトルが見えず、すず製品ではないことが明らかである。本試料については、真空雰囲気の中で測定を実施したところ、アルミニウムが

特徴的に検出され、相当量のアルミニウムを含むことが示唆された。なお、アルミニウム以外にもケイ素や鉄、さらに銅、亜鉛、鉛といった元素が検出されているため、一材料であるならばアルミニウム合金の可能性が疑われるが、一方でフタの外側で黒銀色、内側でやや黄色味を帯びた銀色を呈し、やや色味が異なるなど気になる点もある。メッキ処理されている可能性も疑っておく必要があるため、本製品の材質を明らかにするためには精査を要する。すず製品ではないことは確かではあるが、现阶段で材質について言及することは難しい。今後、金属組織学的調査を実施して材質を見極めることが肝要と考える。

【測定条件】

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	225
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.291

【スペクトル】



【結果】

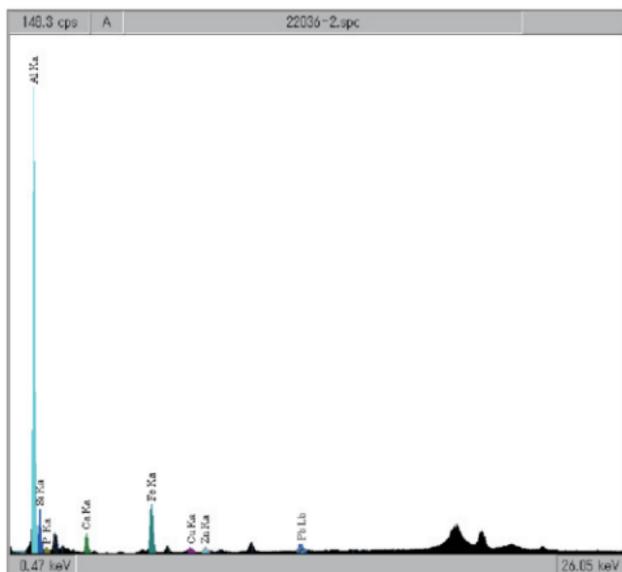
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	49.830	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	2110.066	7.87-8.21
79	Au	金	L α	4291	9.53-9.88
82	Pb	鉛	L β	2508	12.43-12.82

第 63 図 通し No.291 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	223
試料室雰囲気	真空
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	12
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.2223

[スペクトル]



[結果]

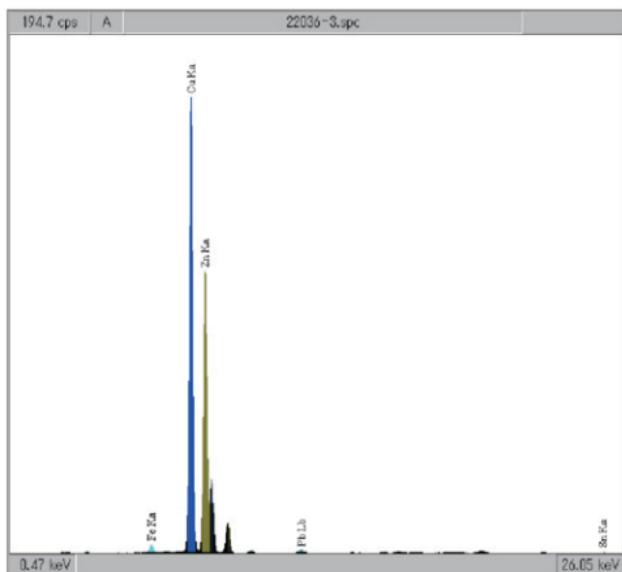
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
13	Al	アルミニウム	K α	752.963	1.38-1.59
14	Si	ケイ素	K α	84.281	1.63-1.85
15	P	リン	K α	15.827	1.90-2.13
20	Ca	カルシウム	K α	42.043	3.56-3.82
26	Fe	鉄	K α	116.756	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	21.003	7.87-8.21
30	Zn	亜鉛	K α	19.954	8.46-8.80
82	Pb	鉛	L β	37.105	12.43-12.82

第 64 図 通し No.2223 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	218
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	3
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.454

[スペクトル]



[結果]

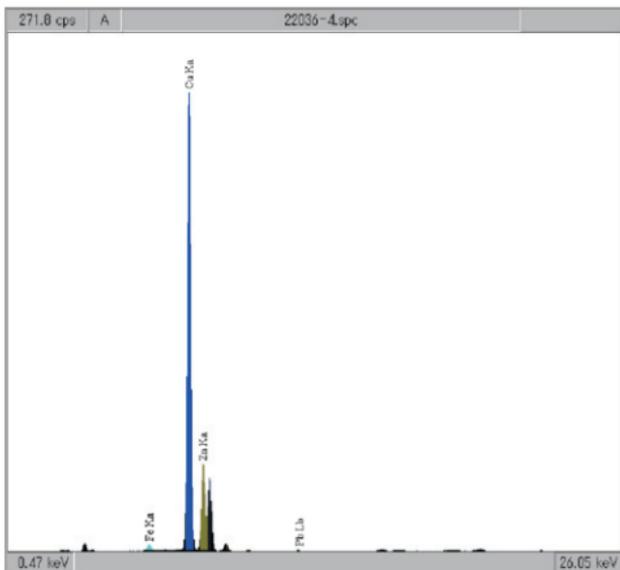
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	24.699	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	1475.501	7.87-8.21
30	Zn	亜鉛	K α	970.851	8.46-8.80
50	Sn	スズ	K α	2.928	24.93-25.46
82	Pb	鉛	L β	9.851	12.43-12.82

第 65 図 通し No.454 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	215
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.279

[スペクトル]



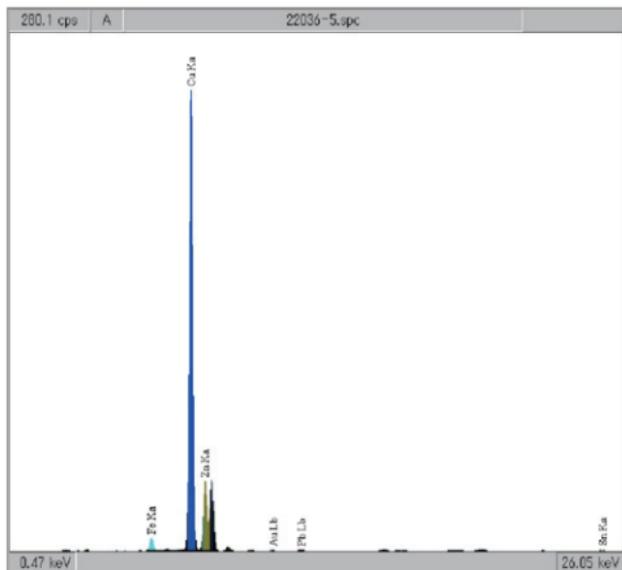
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	27.520	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	2082.215	7.87-8.21
30	Zn	亜鉛	K α	441.224	8.46-8.80
82	Pb	鉛	L β	3.210	12.43-12.82

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	214
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.286

[スペクトル]



[結果]

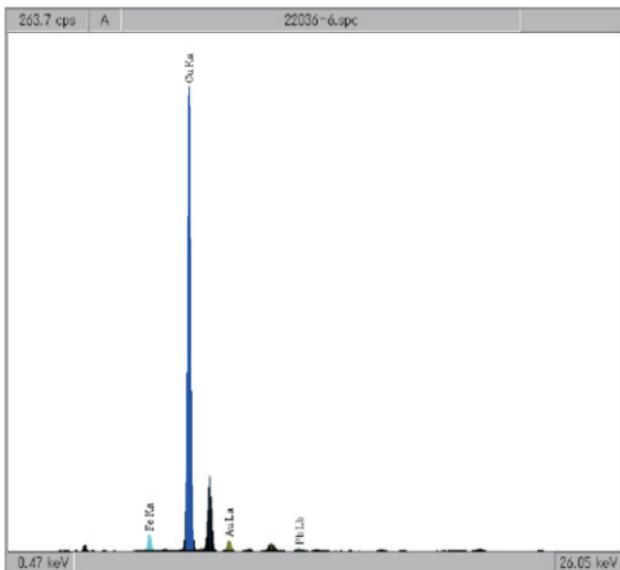
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	57.861	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	2157.036	7.87-8.21
30	Zn	亜鉛	K α	372.522	8.46-8.80
50	Sn	スズ	K α	4.761	24.93-25.46
79	Au	金	L β	3.735	11.29-11.67
82	Pb	鉛	L β	6.867	12.43-12.82

第 67 図 通し No.286 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	220
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.275

[スペクトル]



[結果]

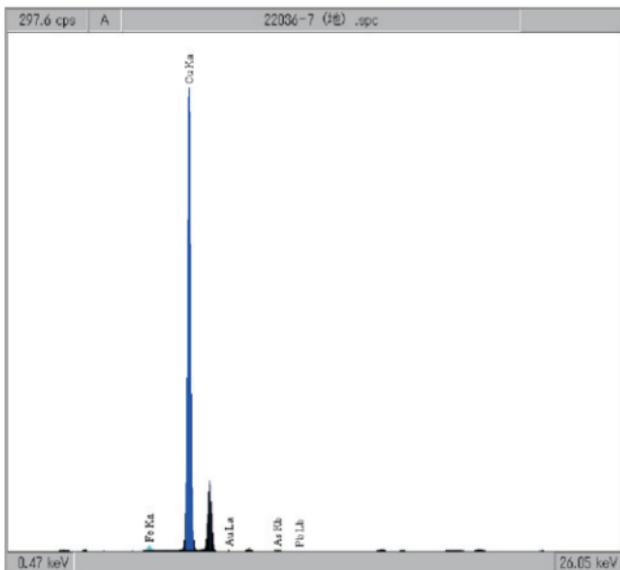
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	68.158	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	2056.641	7.87-8.21
79	Au	金	L α	52.459	9.53-9.88
82	Pb	鉛	L β	12.230	12.43-12.82

第 68 図 通し No.275 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	220
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	6
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.262(地)

[スペクトル]



[結果]

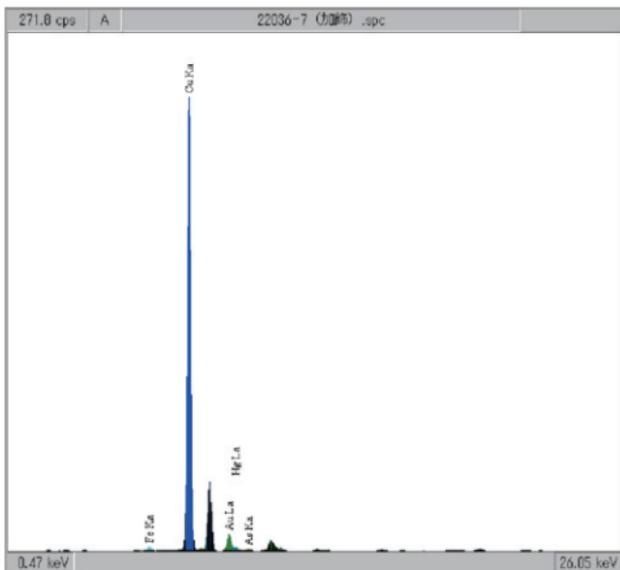
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	25.722	6.25- 6.55
29	Cu	銅	K α	2299.825	7.87- 8.21
33	As	ヒ素	K β	4.937	11.53-11.92
79	Au	金	L α	2.995	9.53- 9.88
82	Pb	鉛	L β	2.313	12.43-12.82

第 69 図 通し No.262 (地) の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	221
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	4
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.262(加飾)

[スペクトル]



[結果]

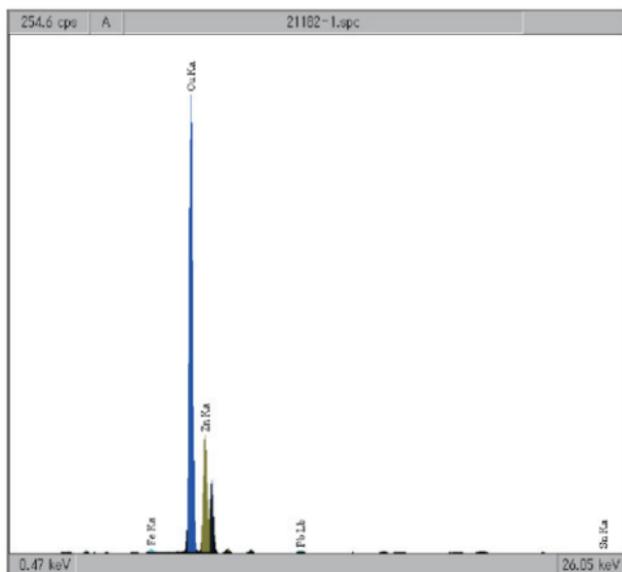
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	19.364	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	2060.604	7.87-8.21
33	As	ヒ素	K α	9.386	10.35-10.72
79	Au	金	L α	87.560	9.53-9.88
80	Hg	水銀	L α	28.895	9.80-10.16

第70図 通し No.262 (加飾) の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	217
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	6
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.257

[スペクトル]



[結果]

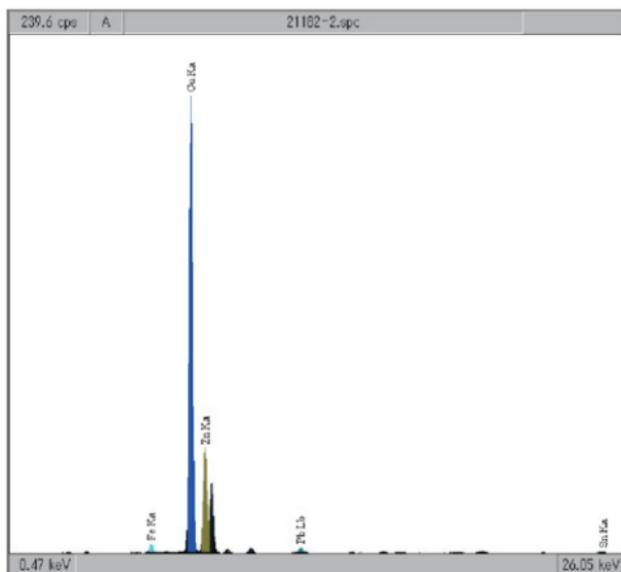
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	15.942	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	1960.572	7.87-8.21
30	Zn	亜鉛	K α	538.926	8.46-8.80
50	Sn	スズ	K α	2.024	24.93-25.46
82	Pb	鉛	L β	12.171	12.43-12.82

第 71 図 通し No.257 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	221
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	3
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.282

[スペクトル]



[結果]

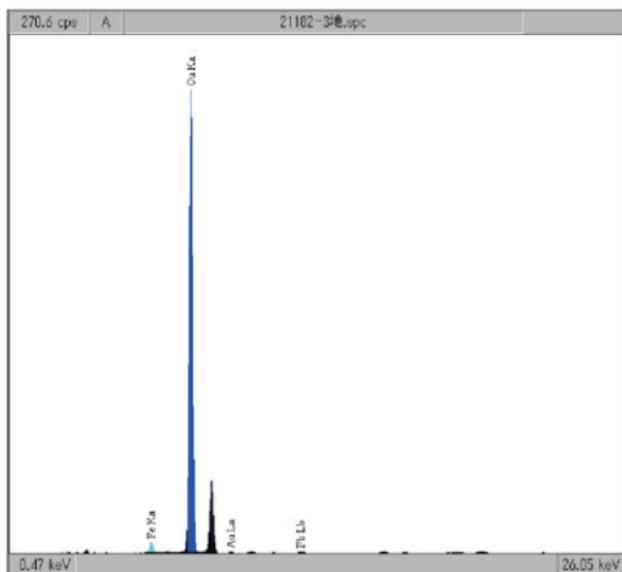
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	33.999	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	1841.927	7.87-8.21
30	Zn	亜鉛	K α	458.777	8.46-8.80
50	Sn	スズ	K α	5.158	24.93-25.46
82	Pb	鉛	L β	23.282	12.43-12.82

第 72 図 通し No.282 の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	225
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	3
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.255(地)

[スペクトル]



[結果]

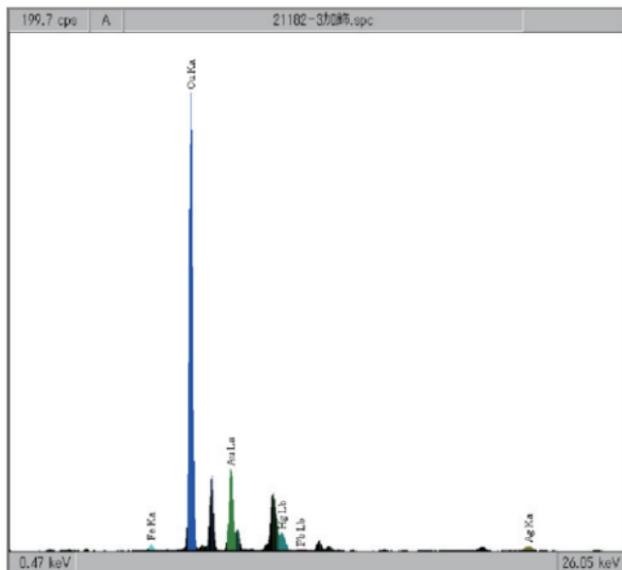
Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	K α	45.155	6.25-6.55
29	Cu	銅	K α	2094.676	7.87-8.21
79	Au	金	L α	3.595	9.53-9.88
82	Pb	鉛	L β	7.011	12.43-12.82

第 73 図 通し No.255 (地) の蛍光 X 線定性スペクトル

[測定条件]

測定装置	SEA2120L
測定時間(秒)	300
有効時間(秒)	217
試料室雰囲気	大気
コリメータ	φ10.0 mm
励起電圧(kV)	50
管電流(μA)	5
フィルタ	なし
マイラー	OFF
コメント	通しNo.255(加飾)

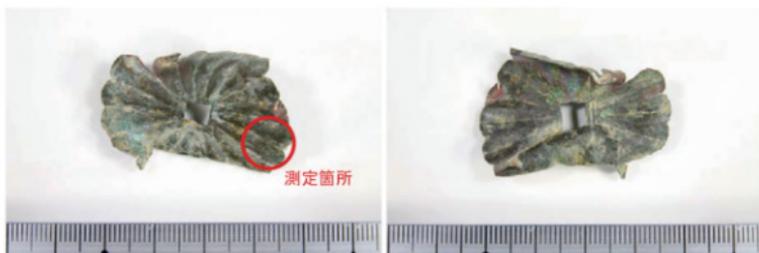
[スペクトル]



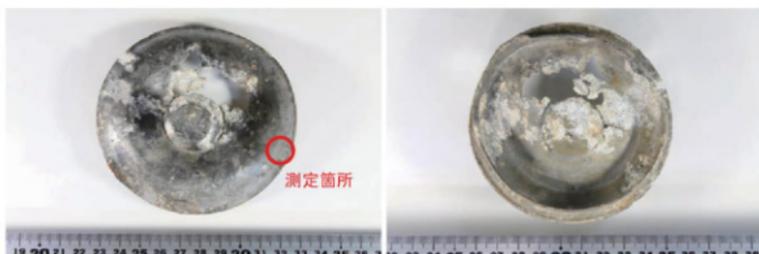
[結果]

Z	元素	元素名	ライン	積分強度(cps)	ROI(keV)
26	Fe	鉄	Kα	21.073	6.25-6.55
29	Cu	銅	Kα	1514.848	7.87-8.21
47	Ag	銀	Kα	27.224	21.85-22.35
79	Au	金	Lα	318.578	9.53-9.88
80	Hg	水銀	Lβ	103.451	11.66-12.05
82	Pb	鉛	Lβ	6.753	12.43-12.82

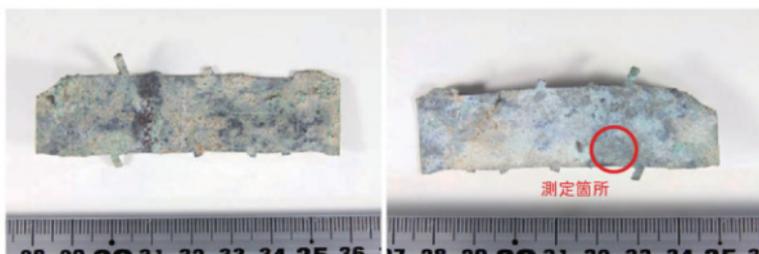
第 74 図 通し No.255 (加飾) の蛍光 X 線定性スペクトル



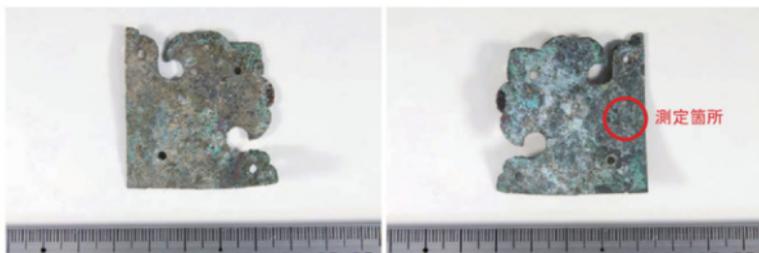
通LNo.291



通LNo.2223



通LNo.454



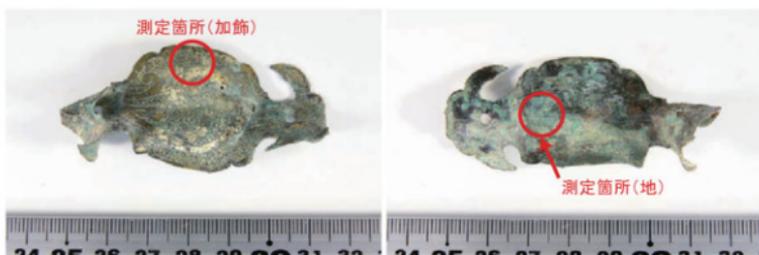
通LNo.279



通LNo.286



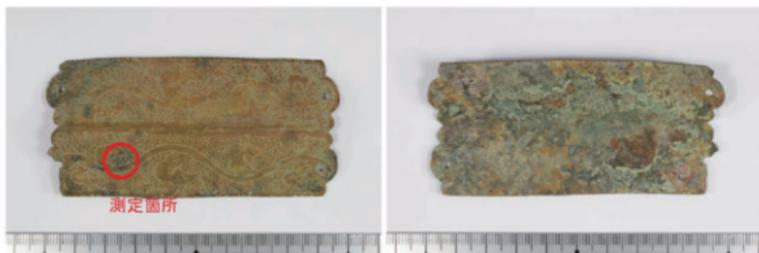
通LNo.275



通LNo.262



通LNo.257



通L No.282



通L No.255

第8章 総括

これまで、平成19～21年度に実施した中城御殿跡発掘調査で出土した金属製品と、これに関する遺構について報告した。本章では、中でも特徴的な遺物についてまとめ、総括としたい。

調査を実施したJ～L・14・15区の一帯には、かつて御蔵と呼ばれる蔵があったとされており、発掘調査によりこれにともなう石畳や石列などの遺構が確認されている。出土遺物は18世紀から近代の陶磁器や飾り金具、耳盃、釣り灯籠などの金属製品が出土している。さらに金属製品を一括廃棄したと考えられる土坑と考えられる金属製品溜りからは、多数の大型金属製品が折り重なった状態で出土している。出土した金属製品はすべて(青)銅製で、長柄付銚子、香炉、花瓶、壺といった製品で構成される。このような大型の金属製品は、移転前の中城御殿(現首里高校)からはほとんど出土していないことから、琉球処分以降に首里城や複数の御殿から宝物などが持ち込まれたとする関係者の証言に由来すると考えられる(沖縄タイムス1975)。これらの金属製品はいずれも高熱を受け破損しており、また遺構の覆土は周辺の1層と同様に瓦片等も多く出土していることから、戦時中に形成された被弾痕に、周辺に散乱する破損品や瓦礫を一括して投棄したものと考えられる。

その他特筆できることとして、この区域からは鉄製・銅製の釘が多く出土しており、特に銅釘のⅡ類が多く出土している。このⅡ類とした釘は小型で、建材には向かないことから、調度品やその他の飾り金具などに利用されたものと考えられ、終戦直後には先の金属製とともに木製品の家具や櫃なども廃棄された可能性がある。

今回報告した金属製品は、種類、量ともに豊富であることから、当時の中城御殿における金属製品の多様性をみることができるとともに、祭祀用具や絢爛豪華な生活の様子を知ることができる貴重な資料として今後も引き続き調査・研究を行う必要がある。

最後に、発掘調査・資料整理作業にあたっては、多くの方々に指導助言・協力を賜った。記して感謝申し上げたい。



第75図 金属製品溜まり検出状況



図版 66 L-15 金属製品溜まり検出状況①（北から）



図版 67 L-15 金属製品溜まり検出状況②（北から）



図版 68 L-15 金属製品溜まり検出状況③（北から）

引用・参考文献

- 球陽研究会（編）1974 『沖縄文化史料集成5 球陽 読み下し編』角川書店
- 沖縄県土木建築部 1984 「首里城公園基本計画」
- 沖縄県土木建築部 1988 「首里城公園基本設計」
- 沖縄県立博物館 1993 『旧中城御殿—石牆工事地域にかかる第1次発掘調査—』
- 沖縄県立博物館 1994 『旧中城御殿—石牆工事地域にかかる第2次発掘調査—』
- 沖縄県立博物館 1995 『旧中城御殿—石牆工事地域にかかる第3次発掘調査—』
- 沖縄県立博物館 1996 『沖縄県立博物館50年史』
- 都築昌子 2005 「龍のひそむ島—近世琉球の風水—」『沖縄県史各論編第4巻近世』沖縄県教育委員会
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2010 「中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書（1）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第53集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2011 「中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告（2）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第58集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2012 「中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書（3）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第63集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2013 「中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告（4）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第67集
- 沖縄県立埋蔵文化財センター 2016 「中城御殿跡—県営首里城公園 中城御殿発掘調査報告書（5）」『沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書』第67集
- 株式会社国健（編）2010 『首里城尚家関係者ヒアリング調査業務報告書』財団法人 海洋博覧記念公園管理財団
- 那覇市市民文化歴史資料室（編）2003 『尚家関係資料総合調査報告書』那覇市
- 沖縄県教育委員会 2008 「沖縄の金工品関係資料調査報告書」『沖縄県文化財調査報告書』第146集

報告書抄録

ふりがな	なかぐすくうどうんあと							
書名	中城御殿跡							
副書名	県営首里城公園中城御殿発掘調査報告書(6)							
巻次	—							
シリーズ名	沖縄県立埋蔵文化財センター調査報告書							
シリーズ番号	第95集							
編著者名	山本正昭、田村 薫、上地 博、パノ・サーヴェイ株式会社							
編集機関	沖縄県立埋蔵文化財センター							
所在地	〒903-0125 沖縄県中頭郡西原町字上原193-7 TEL 098-835-8752							
発行年月日	平成30(2018)年3月31日							
ふりがな 所収遺跡名	ふりがな 所在地	コード		北緯 ° / ' / "	東経 ° / ' / "	調査期間	調査面積	調査原因
		市町村	遺跡番号					
中城御殿跡	沖縄県那覇市 首里大甲町1 丁目1～3番	472018	—	26° 13' 15"	127° 43' 05"	2008.12.01～ 2009.02.27 2009.0602～ 10.30	650㎡	県営首里城公園 整備事業
所収遺跡名	種別	主な時代		主な遺構		主な遺物		特記事項
中城御殿跡	屋敷跡	近世～現代		土坑		金属製品(祭祀具、器類、 建具、飾り金具、煙管、 簪、釘、錠)		K-14グリッドから大量の金属製品が一括して出土した。金属製品は近世期に相当するが、他の出土遺物や検出状況から近代に埋蔵されたと考えられる。鍍金された飾り金具や大型の香が多くみられることから中城御殿内で使用された祭祀道具や建築部材である可能性が高い。
要約	中城御殿は国王の世子が暮らした邸宅跡で、1870年から1945年まで存在していた。戦後は県立博物館が建てられるが、老朽化により撤去される。調査は遺構の残存状況を確認する目的で7本のトレンチを設けて行い、石組みや石積み、造成層などの遺構が良好な状態で検出された。							

沖縄県立埋蔵文化財センター発掘調査報告書第95集

中 城 御 殿 跡

— 県営首里城公園中城御殿跡発掘調査報告書（6） —

発行年 2018（平成30）年3月31日

発 行 沖縄県立埋蔵文化財センター

編 集 沖縄県立埋蔵文化財センター調査班
〒901-0125
沖縄県中頭郡西原町字上原 193-7
TEL 098（835）8751・8752

印 刷 有限会社ドリーム印刷
〒901-1117
沖縄県南風原町字津嘉山11537-6
TEL 098（889）2784

沖縄県立埋蔵文化財センター2018 Printed in Japan
許可無く本書の無断複製、転載、複写を禁ずる。

首里古地図

本図は1760年に複製されたものである。これより早稲田に江戸幕府から御寄書を出して、

城下の町割を記したより割合が出ているので、この地図もその一度である。

ところが、この地図も時代が経つにつれて、再版されたのでは、複製のほかに改訂を重ねてきたと
 思われ、まったく従来の見え方になっていない状態になっていた。複製の際による、丸筆跡（おしほり）が
 御寄書の方筆として、この地図を再複製したことがみえてくる。当時、尺牒は使用できないので、
 屋敷図、山形図を参照し、各町筆跡にきいてやり、この仕事を完成し、複製を頼っている。

図中の千石余の公署、監物等が縮刷に記載され、179年時の状況を詳しく記しているが、

この地図が町割確定に協力をした理由は1760年当時の状況を伝えたいから。

町筆跡の町割図とい、あるいは町見直しによって、現代の町筆跡があるからである。

この地図の図には、複製丸の丸まで、研究に利用できるため、

よく複製して書きあらためたものである。（各町筆跡）





沖縄県立埋蔵文化財センター